
そして伝説は紡がれる.....

そばつゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして伝説は紡がれる……

【Nコード】

N4570S

【作者名】

そばつゆ

【あらすじ】

ゼロ魔のルイズにドラクエ？の勇者が召喚されます

チートです

ぶっちゃけギガデインとかベホマとかゲームバランスおかしいと思います

序章　そして新たな伝説は始まった（前書き）

期待の中型新人、そばつゆの二作品目です

中二病的な感じですよ

更新は気分次第と言った所……

できれば1巻辺りまではさらっと投稿したいと思います

思うだけで、実現しない事もあります

序章　そして新たなる伝説は始まった

俺の名前はナハト

職業は……勇者

アリアハンの英雄を父に持つ、血統書付きの勇者

そんな肩書きを持つ勇者

『あなたなら、魔王も倒せるわ

だって偉大な勇者オルテガ…父さんの子ですもの！』

『お主ならば必ずや魔王バラモスを打ち倒してくれるだろう

アリアハンの勇者の血を汚さぬようにな』

……思い出すだけでもヘドが出る……

俺はたまたま『勇者オルテガの息子』ただただで、『俺が勇者オルテガの息子』じゃない

俺は『ナハト』だ！

お袋もアリアハンの糞王も俺の事を『ナハト』ではなく、『オルテガの息子』或は『勇者の血筋』としか見ちゃいねえ

親父は火山の火口で死んだらしいが、俺にはそんな事どうだって良かった

そう思っていたし、今でもそう思っている

そうして俺は16歳の誕生日を迎えた

この日、俺は魔王バラモスも倒す旅に出た

……今では懐かしい記憶だ

この日以前は血筋等をネタにバカにされた事がよくあった

もちろん俺はそんな事をした連中を個別に呼び出し、一人一人徹底的にシメた

そしてその後俺はそいつらの大將になって、グループの中心となった

一緒にバカやったり、イタズラしたり、色々やった

だが、この日を境に周りの、そいつらの態度が一変した

今までの『バカやってた仲間』から『勇者を応援する村人』に

正直そんな予感はあるし、そんな事はしょうがないと理解していた

所詮俺はどんな事をしていても『勇者の息子』なのだ……

俺はそんな懐かしい記憶を思い出しながら目の前の敵を見据える

今回で何回目の挑戦だろうか？

5桁を超えた辺りで数えるのを止めてしまった

そんな事を考えている内にも、奴は狡猾にも、指先から凍てつく波動を放ち吹雪を吹く

だが、残念ながら俺の装備は後にロトの装備とされる存在する中で最強の物……

呪文の補助無しでも奴の攻撃には耐えられる

「……つーか、てめえは行動がワンパターンなんだよ！
……ギガデイン！」

俺は奴……『神龍』に向けて電撃最強呪文を放つ

すると、奴は地面に落ちて息絶えた

俺は地面に横たわる奴に蹴りをかまして叩き起こす

「おら、さっさと起きて願い叶えろや」

すると奴は何事もなかったかのように起き上がり言った

「……というか、お主もう叶えられる願いがないのではないか……？」

「……まあ、そうなんだよな」

双六も出したし（つーかもう何十回もクリアした）、親父も生き還らせたし（お袋とイチャイチャしててウザイから家にはもう帰っていない）、モンスターメダルも全種類集められるだけ集めたし、エ

ツチな本も99冊集めきつたし、グランドラゴーンの所だつて出禁くらつちまつたし……

……他何かあるか？」

「……………ワシも出禁出そうかな……………」

そうなのだ

正直もうやる事なんて何もなく、アイテムも集められるものはフルコンしちやつたし、ステータスも種や木の実を拾いまくってたらカンストしちやつたから、本気で何もやる事がない

だから無闇やたらに神龍に挑戦している

「……………というより、今までずっと一人でワシを倒した事があるのはお主ぐらいじゃ

……………だからもうよくないか？」

「じゃあ、俺はどうすりやいいんだ？

勇者なんて倒すべき魔王がいてこそその勇者だろ？

バラモスも倒して、ゾーマも何か『もう悪さも復活的なものもしないから、お願いだから殺さないで！』って土下座までしてきたし……後残ってんの神龍、あんたのトコぐらいなんだよ」

「……………ふむ……………では、こうしよう

アリアハンのお主の部屋の引き出しに、新たな世界への扉を用意しよう

そこはどんな世界かはワシにもわからん

……………じゃが、このままこの世界に留まっているよりかは刺激ある事は間違いないじゃろ？」

「……それもそうだな
じゃあ、それで頼む」

「よかるう」

「……よし、これでお主の部屋の引き出しに新たな旅の扉がある
じゃろう」

では、さらばじゃ」

神龍がそう言うのと、俺は竜の女王の城にいた

「ルーラ」

すかさず俺はアリアハンまで瞬間移動呪文を唱えた

アリアハンに戻ると、一直線に自分の家にむかう……前にゴールド
銀行に行く

「こちら愛と信頼の……」

「名前はナハト
用件は全額引き出し」

俺が早口でそう言うのと、店主は俺が持てるだけのGを出して宣った

「ナハト様はこれ以上Gを持てません」

「じゃあ、残りは全部でめえにくれてやる」

そう吐き捨て、今度こそ家に向かう

家に入ると親父とお袋が未だにイチヤイチャしている

「…………ちっ」

何も言わずに二階の自分の部屋に向かおうと思ったが、多分もう二度と会う事もないだろうから、最後の挨拶ぐらいはしようとリビングに顔を出す

「おお、ナハトか

実は母さんの話がまだ終わらなくてな…………どうにかならんか？」

「だって、本当に久しぶりなんですもの！
まだまだ話し足りないくらいよ！」

「イチヤついてるトコ悪いんだが、俺今から異世界に行くから
もうこっちには帰ってこないんで、そこんとこよろしく」

「…………えっ？あつ、おい、ナハト！」

親父が何か言っていたが、無視して二階に上がり自分の部屋に入る
引き出しを開けると、旅の扉があった

「じゃあ、新たなる世界へ行きますか！」

そう呟き、俺はこの世界に別れを告げた……

序章 そして新たな伝説は始まった（後書き）

目指せ！連続投稿！

第1章 ナハト（前書き）

主人公のプロフィール

まあ、基本的にカンストなんで

第1章 ナハト

Name: ナハト (口ト)

Age: 17

Sex: 男

Tall: 172?

Weight: 62?

Hair: 黒

Eye: 黒

Occupation: 勇者

Character: ぬけめがない

Gusto: アイテム、武器、メダル集め

Status

Strength: Max

Quickness: Max

S t a m i n a : M a x

C l e v e r n e s s : M a x

L u c k : M a x

L i f e : M a x

M a g i c : M a x

S p e l l

メラ、ギラ、ベキラマ、イオラ、ライデイン、ギガデイン

ホイミ、ベホイミ、ベホマ、ベホマズン

ニフラム、アストロン、ラリホー、マホトーン、ルーラ、リレミト、トヘロス

おもいだす、もつとおもいだす、ふかくおもいだす、わすれる

I t e m

W e a p o n : 吹雪の剣

S h e a t h : 光の鎧

S h i e l d : 勇者の盾

G a l e a : グレートヘルム

A d r n m e n t : 星降る腕輪

I t e m : 賢者の石、破壊の鉄球、ルビスの剣、小波の杖

B a g : 色々なアイテム（ほぼフルコン）

以上が俺のステータスだ

吹雪の剣を装備してるのは装飾が好きだから

さて、袋には色々アイテムあるし、金だって能力だって有り余ってる

この異世界は何が待っているのか……

……ちなみに俺は両親の事は嫌いじゃない

ただ、態度とかが気に入らないだけだ

……… 多分

第1章 ナハト（後書き）

ルビスの剣のイラスト見たい……

第2章　そして勇者と伝説は出会った（前書き）

まあ、タイトル通りようやくゼ口魔の世界に行くトコッスね

ではでは

第2章　そして勇者と伝説は出会った

SIDE〜ルイズ〜

今私がいるのはトリスティン魔法学園の春の使い魔召喚の儀で使用されている広場

さつきまではその広場には笑い声や感嘆、落胆様々な声が満ちていた

……………私が召喚する番になるまでは

「次ー！ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

「はい」

名前を呼ばれ一歩前に出ると、賑やかだった声は消え、代わりに私に対する中傷の声があがる

「おい、ゼロのルイズ

今度はこの広場を爆破するのか？」

「おいおい、それだといつも爆破してるみたいじゃないか」

「違うのか？」

「（爆）」

「ｗｗｗ

それ最高（笑）」

そんな嘲笑にも負けずに所定の位置まで進む

「俺らもつと下がった方が安全じゃないか？

100メートルぐらいｗｗｗ」

聞こえてないわけじゃない

むしろ聞こえるように言っているのだ

嫌って程聞こえてくる

だが、そんな連中に律儀に反応してやる必要はない

他の誰にも召喚できないような凄い使い魔を召喚してから見返せばいい

「……………我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……………」

そして私はサモン・サーヴァントのスペルを紡ぐ……………

~~~~~

SIDE ～ナハト～

「あんた誰？」

旅の扉を抜けて砂煙の中で聞こえた第一声がそれだった

声の方を見るとまず飛び込んできたのはピンクの髪

次に見えたのは小さな体

髪の長さや声からしてまだ少女……俺とあまり変わらないぐらい

先程の声の主はおそらくこいつだろう

という事は誰かと尋ねられたのは俺だ

砂煙が晴れると周りの状況が明らかになる

周りには俺がいるここを中心として、約10m程に数十人少年少女が円になってこちらを見ている

ざっと見回すと、先程声をかけた少女の後ろ数mにハゲのおっさんがいる

……こいつがここの責任者っぽいな……

「ちょっと、あんた！」

この私を無視してキョロキョロしてるなんて、何処の田舎者よ！」

すると目の前まできた少女が仁王立ちして怒鳴る

「……とりあえず人に名前をきく時は自分から名乗るのが礼儀だと覚えとけ、ちんちくりん」

「ち、ち、ちんちくりんですってえっ!？」

いいわ、教えてあげるから一発で覚えなさい、平民

私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！  
由緒正しきラ・ヴァリエール家の三女よ！」

……長つたらしい名前だな

「なげえ名前……俺はナハト

異世界からきたナハトだ」

勇者なんて職業を言ってしまうと、どんな面倒事になるかわからんから、まずは様子見

「で、あんた何処の平民よ？」

……イラッ

名前言つたのに名前を呼ばれず平民扱い

……まるでエンジンベアの連中みてえだな

「黙れちんちくりん、殺すぞ」

むこうが無礼な態度をとるなら、こつちも下手になる必要はない

「なっ!?!……あんた平民のくせに貴族に逆らうんだ?」

ルイなんとかって名乗った少女はぶるぶる震えながらステッキを振

りかぶる

「平民とか貴族とか……お前バカか？」

「……ブチッ」

そしてとうとうキレたのかそれを振り落とす

俺は今までの長年の経験から、それから『何か』がくる事を予想した  
だから俺は自分の道具袋から小波の杖を取り出し振る

俺の目の前に見えない光の壁が出現する

その次の瞬間には何かが光の壁に当たり、そのまま少女に跳ね返った  
そして起こる爆発

周りにいた少年少女は口々に苦情を言っているが、俺にはそれどころじゃなかった

見えなかった

目の前に迫っていてもその魔法を確認できなかった

恐らく、小波の杖を持ってなければ反応できずに食らっていただろう

……まあ、それで俺が死ぬかどうかはおいとくが……

「……えっ！？あんだメイジなの？」

「メイジ？」

少女の言う意味がわからず、おうむ返しにきいていた

「魔法が使えるのかって聞いてるのよっ！？」  
「どうなの？」

「んにゃ

これは道具を使った」

ウソは言っていない

質問に答えていないだけ

「ミス・ヴァリエール！？  
大丈夫ですか？」

後ろにいたハゲのおっさんが少女に言う

その手には先程少女が使っていたのと同じ様なステッキが握られていた

……こいつは油断できない奴だな

「え？……ええ、大丈夫です」

「そうですか

では、コントラクト・サーヴァントをしてください  
もう次の授業が始まってしまうので」

「……ええ……」

……じゃあ、あんた……ちょっとだけ大人しくしてなさい」

そう言うところなんかさんとは何か呪文を唱え始めた

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

五つの力に司るペンタゴン

この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

どうやら重要な儀式か何かのようだが、穏やかではない単語が聞こえてきた

……使い魔……？

そんな事を考えてると、ルなんとかさんがゆっくりと顔を寄せ、唇を近づけてきた

俺は同年代の女の子との接触が異様な程に少なく、いきなり目の前に迫った見た目は美少女なルなんとかさんの顔に戸惑い、反応が遅れた

「……なっ！？」

そして気付いたときには唇を奪われていた

我に返り、押し退けようとすると、彼女はもうすでに一歩引いた位置に下がっていて、おっさんと何事かを話している

「……っ痛うつ!？」

その様子を見ていると、急に左手の甲に激しい熱と痛みを感じ、慌てて見てみると、見た事もない文字が浮かんでいた

「……ふむ

サモン・サーヴァントは失敗続きでしたが、コントラクト・サーヴァントは一回で成功したようですね

……それにしても珍しいルーンですね…  
少しスケッチさせてください」

いつの間にか目の前にやってきたおっさんが左手の甲を見て呟き、スケッチブックに文字を描き始めた

「どーせ平民相手だから契約できたんだよ!」

「違うない(笑)」

周りがそう笑いながら言う

契約……だと？

……使い魔に契約……もしかして俺、こいつに勝手に使い魔にされた!？

「おい!てめえ、俺に何しやがった!？」

「しっ!

……後でちゃんと説明してあげるから、ちょっとだけ大人しくしてて」



俺が奴に食いかかると、そう小声で言われた

「……じゃあ、後で俺が納得できる説明しないとぶっ飛ばすからな？」

俺がそう（律儀にも）小声で返した時

「よし、それでは全員コントラクト・サーヴァントまで終わったので帰りますぞ」

おっさんがそう言うのと皆は幕に跨がり、当たり前のように飛んで行った

「ルイズはちゃんと歩いて帰ってくるんだぞーっ？」

「遅刻すんなよww」

…そんな言葉を残して

そして皆が行ったのを確認して、奴は言った

「私、あなたを私の使い魔にしたから」

……やれやれ……

新たな旅立ちで初っぱなから面倒事に巻き込まれるとは……

## 第2章　そして勇者と伝説は出会った（後書き）

矛盾を消していくのが難しい&めんどい……

### 第3章　そして勇者は使い魔に転職した（前書き）

最近ふと思う

実は俺って勇者の一族なんじゃないのか……と

はい、戯れ言ですね

### 第3章　そして勇者は使い魔に転職した

~~~~~

SIDE〜ルイズ〜

最初、彼を見た時は嬉しさ半分落胆半分だった

何回も……本当に数えきれない程失敗して、もう召喚できないんじゃないかと諦めて挑んだあの召喚……

そして彼はやってきた

見た事ない鎧や兜を着け、名のある名工が作ったような美しい剣を
持って……

あの時、コルベール先生が戦闘中の傭兵かもしれないと言っていた
が、私にはどちらかといえば『騎士』というイメージだった

……まあ、平民だったけど……

やっと召喚できた！という喜びと、なんで平民なのよ！という憤り
……

でも、その辺の感情も全部ぶっ飛んだ

あまりにも失礼な平民にメイジとの身分の差を教えようと魔法を放った

どうせいつものように爆発するだろうけど、それでも平民を調教するには十分だと思った

だが、その爆発は彼を襲う事なく、いや、何かに反射したかのように私に返ってきた

いつの間にか彼の手には見た事ない杖が握られ、こっちを睨みつけている

「…えっ！？あんたメイジなの？」

だが、彼はメイジではないと言う

と言うよりメイジが何だかわかってない様子

どっちにしてもただの平民じゃないみたいなのは確か

なら、卑怯ではあるが、有無を言わずに使い魔にしてみよう

そしてわけがわからないといった顔の彼にコントラクト・サーヴァントをした

だが、その直後になって思う

もし彼がメイジとかそういう記憶を無くした名のある騎士だったら？

もし使い魔にした事に怒り、私を殺そうとしたら？

そんな不安を抱えて夜、私の部屋で私は彼と向かい合っている

全部ちゃんと答えよう……

誠意を持つて答えれば命までは助けてくれるだろう

そして私は彼に全てを話し始めた……

~~~~~

SIDE ナハト

あれから夜になり、ルなんとかさんの部屋でどういう事なのかを詳しくじっくりたっぷり聞いた

曰く、彼女は名家の三女であるが、魔法の才能がなくいつもバカにされていた

曰く、俺を呼び出した召喚の儀式で、幻獣の類いを召喚し皆を見返すつもりだった

曰く、この召喚の儀で使い魔を召喚できなければ留年してしまう

曰く、普通使い魔は幻獣等の動物で、人になるなんて事は聞いた事もない

曰く、最初は自分が呼び出したのが人間でがっかりしたが、俺が魔

法を反射したのを見てただ者ではないと思い、契約の儀式を俺の許可なく敢行した

曰く、契約の儀式の後、俺に怒りで殺されるかもしれないと不安でいる

曰く、この世界には基本的に魔法使いはメイジと呼ばれ、貴族であり、魔法を使えない平民よりも身分が高い…… e t c

……と、ここまでが彼女から説明された大まかな内容

俺を利用しようなんて、このアマイい度胸してんじゃねえか……

「じゃあ、次は俺の事を話そう」

そう言っただけ俺は自分の事を話し始める

「まず、俺はこの世界の人間じゃねえ  
こことは違う世界からやってきた」

「……はあ!？」

何それ、意味わかんないんですけど」

……いきなり話の腰を折られた

「人の話しは最後までちゃんと聞け  
その証拠なら後で見せてやる」

まあ、モンスターメダルとか見せれば大丈夫だろ



「う、うん」

「で、どこまでだったけ？」

「……ああ、そうそう」

つまり俺は異世界から来て、お前の使い魔に強制的にされたワケだが、別にこれについては気にしてないから、そんな不安になる必要はねえよ」

俺がそう言つと顔にはまだ緊張の色はあつたが、体の雰囲気が柔らくなる

「で、俺はここじゃない異世界にいた時は一応勇者って職業だった」

「……勇者？」

あからさまに怪訝な顔になるルなんとかさん

「俺がいた世界には魔王が世界を征服しようとしていて、その魔王を倒すのが勇者の仕事」

「何その突拍子もない話？」

それを私に信じろっていうの？」

今度は何か痛々しいものを見る目が変わる

「まあ、信じるかどうかはお前の判断次第だな  
ちなみに魔法も使える」

「あつ！じゃあ、やっぱりあの時私の魔法跳ね返したの！」

「いや、それは道具を使った  
この世界にあるかわからんが、俺の世界にはそれ自体が魔法の塊み  
たいな道具がある」

「……まあ、それぐらいこの世界だってあるわよ  
それであんたが異世界から来たっていう証拠は？」

「んー、何が証拠になるかわからんが、とりあえずこいつのはど  
うだ？」

そう言つてモンスターメダルを見せる

「へえ……綺麗なメダルね……  
これは何なの？」

「俺が今まで殺した魔物のメダル」

「……………え？  
だつてこれどんだけあるのよ！」  
俺が言つと驚いた表情を浮かべるルなんとかさん

ちなみにモンスターメダルは数万単位である

そりゃ、驚くのも無理はない

「後はそうだな……もしかしたらこっちにはない魔法も使えるかも  
しれないと思う  
こっちにはどんな魔法がない？」

すると少し考え、顔を赤くして言った

「……………爆発……………」

…爆発、ね…………イオ系かな？

「爆発系ならあるぞ？  
俺も使えるし」

そう言つとルなんとかさんは食いついてきた

「えっ？ウソ？本当に？  
やって見せてよ！」

席を離れ俺に詰め寄ってきた

「…………ああ、ホントだから、少し離れろ、近い」

「…え？…………ああ、ごめん」

少し照れながらに離れてくるとかさん

「ただ、ここでやると部屋が部屋として使えなくなるから、今度ち  
やんと見せてやる」

「……………そう……………」

残念そうな顔をする

色んな表情をする奴だな…………

「……まあ、その代わりと言っちゃ何だが、お前の使い魔とやらになつてやるよ」

「……え？」

「俺は前の世界では勇者なんてもんをやつてたが、魔王を倒してからはもうつまんねえ生活でよ…」

それをあんたが喚んでぶつ壊してくれた  
だったらあんたの使い魔になつてみるのも悪くない」

「……でもあんたメイジなんでしょ？本当にいいの？」

「いいも悪いももう契約しちゃったんだろ？  
なら、もう使い魔やるしかないじゃないじゃねえか」

使い魔になるかどうか不安だっただろうるなんとかさんは、今度こそ安心したような表情を見せる

そこに、ただし……と付け加える

「ただし……俺が使い魔になる以上、てめえは誰よりも優れた魔法使いになれ」

「当たり前よ！

私はラ・ヴァリエールの三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラ  
ン・ド・ラ・ヴァリエールよ  
そのぐらい当然じゃない！」

自信満々に言う

「ならよし

改めてよろしく頼む

俺はナハト……アリアハン大陸出身のロトの称号を持つ『元』勇者、  
ナハトだ」

「あなたのご主人様になるラ・ヴァリエール家三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ  
ルイズと呼びなさい」

そして俺は勇者の職業を捨て、使い魔の職業に転職した

### 第3章　そして勇者は使い魔に転職した（後書き）

クロスオーバーってホント難しいですね

最近改めて思います

## 第4章　そして使い魔はメイドと出会う（前書き）

### 注意

誤解ないように言っておきますが、勇者は小波の杖を使えません

この作品では都合上、そのような事態も起きます

今後、そのような事態が起こった場合、なるだけ早く説明をするようにします

## 第4章　そして使い魔はメイドと出会う

「そういえば俺は寝る時どうすりゃいいんだ？」

話が一段落して、まったりムードになったトコで尋ねる

ちなみに鎧等は全部脱いで、装備してるのは旅人の服（自分で改造し、少しは格好良くなった）とルビスの守り

その他は全部袋に入れた

余談だが、ルイズがその袋の構造を聞いてきた時、仕様ですと答えた

「ああ……そうよね……」

まさか人間がくるなんて思ってたから用意してなかったわ」

そう言っと思案するルイズ

「つまり俺は床で寝ればいいのか？」

「でもそれじゃあまりにも可哀想よね……」

いつそ使用人宿舎を借りるのはどうかしら？」

ふむ、妥協案にしては悪くないかもな

「わかった

じゃあ、後でちょっち宿舎まで行ってくるわ

……あっ、そうだ



そついや使い魔って何すりゃいいんだ？」

今更のようにこれからの仕事の事を思い出す

「そうね…

むしろ何ができるか気になるわ」

「んー、とりあえず戦闘なら余裕

後は、人ん家漁って使えそうな物を探すのも得意だったな」

「……………後者はどうなのよ？

まあ、そうね…………

後は使い魔は主人と視覚を共有できたりするのだけど、どう？」

「んにゃ、まったく」

右目も左目も至っていつも通り

「じゃあ、とりあえず日々の雑用って所かしら

その辺は宿舎に行った時に聞けば教えてくれるはずよ」

「んー、りょーかい

……………あつ、最後にもう一つあった」

「今度は何よ？」

「俺が魔法使える事は秘密にしといてくれ」

「なんでよ？」

「そもそもあんたの魔法見た事ないんだけど？」

「ああ……、そついやまだ見せた事なかったか？」

「だってあの魔法跳ね返したのは道具の力なんでしょ？」

「んー、じゃあ…… メラ」

俺は メラ を唱え、人差し指に灯した

部屋で使っても問題なさそうで、かつ目に見えて効果がわかる呪文だと、これが妥当だと思った

「ファイアーボールっ!？」

ルイズはそれに凄じ驚きを見せる

「メラ メラ メラ メラ」

俺は次々に メラ を指先に合計5つ灯していく

「す、凄じ……」

大した事でもないのにかなり驚いてるルイズ

「とりまこれで俺が魔法使えるのは納得してくれたか？」

出した メラ を消しながら言う

「……ええ……とりあえずあんたが魔法使えるのを秘密にすればいいんでしょ？」

「頼むわ

……それと俺は『あんた』じゃない……『ナハト』だ  
人の事はちゃんと固有名詞で呼べ」

「わかったわ」

ルイズの返事を確認すると、俺は部屋を出て使用人宿舎を探し始めた

………

………

………

散歩がてら色々見てみると中々面白かった

例えばここトリステイン魔法学院はある一定の年齢以下の人間が勉強する為の場所なんだが、前いた世界だと何処の国にもそんなものはなかった

なるほど、確かに教養を学ぶのは必要だろう

今俺がいるのは中庭

流石に夜もいい時間であり、人の姿は確認できない

「ん？」

と、そこにかすかだが賑やかな笑い声が聞こえてきた

そろそろ散策よりも宿舎に行きたかったので、人に聞く事にした

「すんませーん」

俺は声のした方角に明かりのついた建物を発見し、もう一度確認してから中に入り声をかける

「……………あんた誰だ？」

ここに来て、もう厨房は閉めちまったぜ？」

言われて見渡す

確かにフライパンやら何やらあり、ここは厨房のようだ

「いや、俺の名前はナハト

今日使い魔召喚で呼び出された新人使い魔」

すると話していたオヤジ、それに周りにいた他のコックやメイド達は驚いた表情をする

「おお！？じゃあ、なんでい？お前さんが噂の使い魔か？」

どうやらもう噂になってるらしい

「まあ、多分その使い魔ですね

ちなみにどんな噂が？」

ちょっと……………いや、あまり聞きたくないが、これから世話になるこ

ここで円満な人間関係を築くには情報が必要だ

「ウチのメイド達が給仕してる時に聞いた話だが、『平民の使い魔』『召喚されて早々魔法をもらった使い魔』『実は何処かの傭兵じゃないか』とか、こんな感じだな」

……おおよそ予想通りだった

まあ、魔法（一応呪文なんだがな）を使えるのがバレてないだけマシか……

「……そうですか……」

あつ、お願いあるんですが……」

「ん？なんでい？」

「人が使い魔って例がなかった事らしく、主人の部屋に俺が寝る場所ないんで、今日明日だけでいいんで使用人宿舎貸してもらえます？」

「おお、そんな構わないぞ

おいシエスタ、使い魔さんを宿舎まで案内してやんな」

「はい」

オヤジがそう言うと、黒髪のメイドが目の前にやってきてペコリと頭を下げる

「私、シエスタっています  
よろしく願います」

「ああ、いや、こちらこそよろしく頼む  
俺はナハトって名前だ」

随分礼儀正しい娘だ

「ナハトさんですね  
じゃあ、案内しますから付いてきてください」

「ああ、りょーかい  
……っと、そうだオヤジさん」

「ん？まだ何かあるのか？」

「あんたの名前、まだ教えてもらってないだろ？  
こっちは名乗ったんだ  
そっちも名乗るのが礼儀ってもんだろ？」

するとオヤジはハツとした顔をして、笑いながら名乗った

「そいつは悪かったな  
俺はこの学院の料理長を務めるマルトーってもんだ  
マルトー親父かマルトーさんって呼んでくんない」

「おう、オヤジもよろしくな」

そう言つて、オヤジの笑い声を背中に聞きながら、シエスタってメ  
イドの後ろを付いて行く

「ナハトさんってどの辺に住んでたんですか？」

宿舎らしき建物に入ると、シエスタが話しかけてきた

異世界って事ぐらい言ってもいいかな？

「んー、信じらんないかもしれないけど、俺この世界の人間じゃないんだよ」

「えっ？」

「つまりここじゃない異世界だな」

「ナ、ナハトさんはユーモアが上手いんですね」

まあ、普通はそんな反応だよな

「まあ、信じなくてもいいけど、実際異世界から来たんだよ  
ちよつと理由があつて証拠的なのは見せれないけど」

「もうっ、秘密にしたいならそんな冗談で茶化さなくったっていい  
じゃないですか！  
そつしたら私だってそんなに聞きませんよ！」

どうやら怒らせたようだ  
ふざけてるつもりなんてなかったんだが……

………ちよつとだけならいいかな？

「なあ、シエスタ……ちよつとこつち来てくれ」

「……なんですか？」

まだ不機嫌オーラを纏っているシエスタを、もっかい外に出て建物の裏の方に連れて行く

「……こんな所に連れて来て何をするつもりなんですか？」

……めっちゃジト目で睨まれるが気にしない

「始めに言っておくが、俺はメイジじゃない  
それとここで見た事は口外禁止で頼む」

「……？」

何をしたいのかよくわかってない様子のシエスタ

「メラ」

「……えっ!？」

最初何が起こったのかわかってなかったシエスタ

だが、段々と状況を理解すると同時に顔を青ざめていった

「メ、メイジの方でしたかっ!？  
も、申し訳ありません!!」

そして一步下がり、これでもかって程に頭を下げるシエスタ

「いやいや、話を聞けって



俺はメイジじゃないし、貴族でもないんだから畏まる必要ないって」

そう言うとうまく顔を上げるシエスタ

その目にはうつすらとだが、涙が浮かんでいた

「とりあえず、俺は貴族でもメイジでも何でもない

じゃあ、何なのかっていうと、異世界からこっちの世界に召喚された新人使い魔……ここまで大丈夫？」

「（コクコクコクコク）」

「……まあ、いいや

で、今は俺のいた世界での魔法……ってより呪文なんだが……まあ、これらもうでもいい事だな」

「……あ、あのう、もしかして私お咎め無しですか？」

不安そうに聞いてくるシエスタ

「お咎めも何もシエスタが謝る事じゃないから」

「……ほっ……」

恐らく相当緊張してたんだろう

一気に脱力するシエスタ

「とりあえず、俺は身分の差とかの差別は大っ嫌いな奴だから」

「そ、そうですね……」

「だから畏まなくていいから  
んー、どこまで話したっけ？」

「……ああ、そうそう、俺が異世界から来たって証拠の話だっけ」  
「……へっ？」

「だってさっきのはこっちの世界でもある魔法だろ？  
……じゃあ、こういうのはどうだ？」

俺は袋から『キメラの翼』を出してシエスタに見せる

「……これは？」

「一度行った事のある、思い浮かべた所に一瞬で移動できる道具  
もしかしてこんな道具こっちにある？」

「い、いいえ……」

私は魔法に関しては疎いですけど、初めて聞きます」

「よし、なら丁度いいな  
じゃあ、ちよつと一度行った事があって、また行きたい場所を思い  
浮かべてくれ」

するとシエスタは少し考え、はいっ、と言った

「じゃあ、そこを思い浮かべたままこいつを空に向かって投げてく  
れ」

そう言ってキメラの翼を渡す

「ええっと、こうですか……きゃっ!？」

受け取り、それを空に向かって投げたシエスタと彼女に掴まっていた俺はまるで何かに引つ張られるように夜の大空を飛んでいく

そして何かを考える時間もなく、気付けば小さな村にいた

「……………へっ？」

あまりの事に呆然としていたシエスタだったが、ここが自分の思い浮かべた場所だとわかると凄いキラキラした瞳で俺に詰め寄る

「す、すすす凄いですっ!!」

こんな魔法今まで見た事ないですよっ!

ナハトさんって本当に異世界から来た方なんですねっ!」

まあ、これは魔法ではなく道具なんだが、いいか

「まあな

で、喜んでいるトコ悪いがこの事は内緒にしてくれ」

「はい!もちろんです!」

さっきまでの不機嫌モードと違い、しきりにはしゃいでいるシエスタ

…………… ああゝ… そっぴや使い魔の仕事も聞かないとなゝ

でも今はもう少しそっとしておくか……

まだ「凄い!凄い!」とはしゃいでいるシエスタにまともな事は聞けないな、と彼女を見ながら思った



## 第4章　そして使い魔はメイドと出会う（後書き）

シエスタ、キターー（・・）

黒髪ショートボブっていいですね！

作者はショートカットが大好物（？）です！！

**第5章　そして使い魔はお仕置きされる（前書き）**

ストック切れた……

## 第5章　そして使い魔はお仕置きされる

~~~~~

SIDE シエスタ

ナハトさん凄かったです！

最初は意地悪な人だと思ってたのですが、あの『きめらのつばさ』とかいう道具を見て見方を変えました

あの後、また『きめらのつばさ』を使って学院に帰ってきた後、ナハトさんから使い魔の雑用って何をするのかを聞かれたり、前にいた世界ではどんな事してたのかを聞いたりしてたら消灯時間になっちゃったので、宿舎の部屋に案内しておやすみなさいをした

……それにしてもナハトさんって魔法使えるのに威張らないし、私達平民にも平等に接してくれるし、本当に素敵な人……

そしていつしかシエスタはナハトの事ばかりを考えていくのだった

……

~~~~~

SIDE ～ナハト～

新しい世界に来て最初の夜が過ぎた

まあ、ちよつと大袈裟な言い方をしたが、大した事はなかった

シエスタがトリップしたせいで使い魔の仕事の説明を聞き忘れそうになった事ぐらい

ルイズに起こす為に宿舎を出る

どうやら使い魔の雑用とは主の身の回りの世話等らしい

一応野営とかの経験があつたから、一通りの事はできる

だが、それはあくまで自分の事であり、誰かの為にする事なんてなかったから少し新鮮である

……やっぱり未経験の事を経験していくのは面白いものだな

と、ルイズの部屋の前に着く

「……………ん？」

ドアノブを回すが、ガチャガチャいうばかりで開く気配がない

室内の音からしてルイズはまだ寝てるものとみられる

「……………やれやれ、困ったご主人だ……………」

これはどちらが上かしっかり教える必要があるな……………（ 立場的に



はルイズの方がナハトよりも上です」

俺は袋から『最後の鍵』を取り出す

この最後の鍵は、マネマネ銀という特殊な金属が使われており、どんな扉の鍵でも開ける事ができる鍵である

最後の鍵を使って、魔法でロックされている扉を開けて部屋に入る  
部屋の中は昨日出て行った時とほぼ変わっておらず、ベッドにはまだスヤスヤ眠っている我がご主人がいる

俺はベッドに近づくと『変化の杖』を取り出し、自分に振りかざす  
変化の杖とは、対象を一定時間イメージしたものの姿に変化させる杖だ

本来なら、手元にはいはずなのだが、こいつは神龍に出してもらった双六で手に入れた品だ

そして俺が変化するのは……

~~~~~

SIDE 〽ルイズ〽

「きゃーっ ルイズ様素敵ーっ」

「今日も女神のような美しさ……
一生付いていきまゝす！」

皆、口々に私を褒め称える

当然よ！

私はラ・ヴァリエール公爵家の三次、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールなのよ？

むしろ今までの扱いがおかしいのよ

でも私は皆を許してあげるの…

だって私はどっかの胸ばかり大きくて、心が小さい下品なゲルマニア人とは違うもの

「ルイズ様、今日も私のような下品な牛女にもお慈悲をくださいませ……」

そして今日もその牛女が来たわ

私は目の前で慈悲を乞う下品な牛女……キュルケに足を差し出して言った

「なら、今日もしっかり舐めなさい
いつものように指の股までじっくりたっぷりとね……」

「は、はいいいっ！」

そしてキュルケは四つん這いになり、私の足を必死に舐めていく

「ああ……、快感……」

そんなヒロインとしてどうなのよ？ 的な事を言ってるルイズさん

だが、ふと体を揺すられて後ろを振り向いてみると……

「……ふにゃ？……えっ？……ぎゃああああゝあゝゝゝゝっ！
?!?!」

……そこにはゾンビの顔があつた

~~~~~

SIDEナハト

「ふにやう、たつぷり舐めるのよう……スヤスヤ……」

「……何の夢見てるんだよ……」

わけわからん寝言を言っているルイズ

「……まあ、今の内に精々楽しんでおく事だな……」

「……なんせ、もうすぐそれは悪夢に変わるんだからな……」

弦きながら俺は部屋に置いてある鏡を見る

そこには見事な腐った死体の姿をした俺がいた

そう、俺が変化したのは腐った死体という名のアンデット属だ

「ほら、ルイズ起きろ…起きろって」

俺はルイズを揺する

何回も揺すっていると、寝返りを打って、目を覚ました

「ふにや?.....えっ?.....ぎゃあああゝあゝ~~~~~っ!」

それはおおよそ、ヒロインが朝イチに出していいような声じゃなかった

「あ、ああああんた何！？何なのよっ！？どっから入ってきたのよっ！？」

かなりガチ泣き入りながら、それでも気丈に振る舞えるのは評価できよう

「オレサマ、オナカヘッタ」

「ひいつ!?!」

「オマエ、タベテイイ?」

「ぴいぎゃあああああゝゝゝっ!?!?!?!」

とうとう泣き出してしまった

……やり過ぎたか……

物凄い勢いで泣いているルイズを見て、流石に反省する

ここでタイミング良く変化の杖の効力が切れた

「……なあ、ほら俺だって」

俺は一応鏡で自分の姿を確認してからルイズに種明かしをする

「……ぐしゅっ……あ、あんた……誰よ……?」

だが、当のルイズは昨日の今日で俺の事を忘れている様子

……俺のせいかな?

そう思ったが、やっぱり昨日の今日を忘れるルイズも悪いと結論付ける

よって俺の中で、双方悪いという事になった

「……昨日でめえに召喚された元勇者のナハトだよ  
つか、昨日の今日で忘れんじゃねえよ」

するとルイズは少し考え、あぁっ！と言って納得した様子

「そういえばあんたを召喚したんだったわね……あれ？でも昨日あんた使用人達の宿舎行ったんじゃないかったかしら？」

「てめえの世話するんで朝起こしにきたんだよ」

「……そういえばそうね……  
………ねえ、ナハト？私あなたに聞きたい事が二つあるのだけど  
？」

「ん？」

「……あれ？  
なんか知らないけど悪寒がする……？」

「一つ……部屋には鍵が掛けてあったと思うのだけど？」

「ああ……鍵？  
俺の持つてる道具にどんな扉の鍵でも開けられるのがあるから、それで開けた  
でも、それは部屋に入らないとルイズの世話も何もできないから、  
不可抗力だぞ？」

ルイズの額に井形ができる

「……………二つ…なんであんたゾンビだったのかしら……………」

……………あれ？

また寒くなってきた……………？

「ああ、あれか？

あれは変化の杖って、イメージしたものに一定時間化けられる俺の  
世界の道具

世話しろって言ったのに部屋に鍵が掛けてあったから、そのお返し  
にちよっとしたお茶目…………ドヤ？」

ルイズの額に井形が増える

「こ、こ、こここここ……………」

「コケコッコー？」

ニワトリのマネか？

「この、バカ犬うーっ!!」

後に聞いた事なのだが、その叫びは明け方の澄んだ空によく響いた  
という…………





第5章　そして使い魔はお仕置きされる（後書き）

何も語る事はない

しいて言えば腐った死体の名前はスミスといった所か……

第6章　そして運命の輪廻は再び……（前書き）

とうとうストック消えた……

つか、全然進まねえ……

## 第6章　そして運命の輪廻は再び……

SIDE〱??〱

「ふふふ……」

ナハトがルイズに召喚された日の深夜某所の湖にて、少女の不気味な笑い声が響く

「……もうすぐ……もうすぐ会えるよ……」

少女の年齢はおそらく16か17歳だろう

身の丈は150?を少し超えるかどうか

「……長かったよね……ううん

……本当に永かったよね」

髪の色は淡いライトグリーンで、その髪型は所謂ツインテールと呼ばれるものだが、その縛られた髪の長さは肩……いや、頭と首の境目程までしかない

「……ようやく会いに行く準備ができるよ」

顔は整っており、10代の女性にとって理想的な可愛いと綺麗の間辺りで、有り体な言葉で言えば10人の男とすれ違えば、10人が振り向く程

胸は女性だとわかる程度に膨らみ、腰のラインは綺麗な曲線を描いている

……ただ、一糸纏わぬ全裸で頭上に見える満月を見上げてる少女は幻想的でもあり、美しくもあるが、同時に不気味でもあった

「すぐに準備終わらせて会いに行くから、それまで待っててね……？」

少女が不気味なのはその瞳からも伺える

その瞳は髪と同じようなライトグリーンのはずだが、今は瞳に光はなく、黒い緑色を放っていた

「あはっ

……早く出ておいでよ……」

唐突に少女が言うと、湖の周りに何処から集まったのか、人とも動物とも違う……そう、異形の魔物が出てきた  
その数およそ20匹

普通の少女では抵抗する間もなく殺されるだろう

「んー、ちょっと少ないかな？」

だが、少女は普通の少女ではないらしく、蠱惑的な笑みを浮かべ、魔物達を挑発する

「……ほら、相手してあげるから、皆まとめておいで？」

少女がそう言っていると魔物の群は一斉に少女に襲いかかった……

これはナハトが勇者を辞めて使い魔になった日の夜の事だった……

~~~~~

SIDE 〱 ナハト 〱

俺は今、ルイズに怒られている

理由は………わからん………

どうやら先程の変化の杖がいけないらしいが、俺には何が悪かったのかよくわからん

それもそうだろう

なんせナハトは今までずっと一人旅で、それ以前に町でつるんでいたのは同年代の男しかいなかったのだ

ただ、例外で過去に一人とある町の為に仲間にした少女がいた

まあ、彼女はナハトにとって思い出したくない過去の女らしいので、
ここは割愛しよう

つまり、何が言いたいのかというと、ナハトは女性、特に同年代の少女の扱いがわからないから、あのような普通ならあり得ないような奇行（腐った死体に変化）をしてしまったのだ

「朝食もまだだっというのに、あんたのせいで余計時間かかったじゃないの！」

それはお前が起きるのが遅いからだと思ったけど、口にしない俺の優しさ

「つまりもうこの部屋を出ないとマズイのでは？」

俺はそろそろ説教よくない？のニュアンスで言った

「……そうね

でも、私は飼い犬の粗相にはこまめな躰が必要だと思つたのよ」

「……さようで……」

……嫌な予感しかない

そう、例えばあいつが俺の一人旅に……いや、止めよう
もう終わった事だ

今更自分のトラウマを決る必要はないんだ……悪夢はもう起こらないんだ

「あんた今日一日ご飯抜き
さあ、早く行くわよ」

一日メシ抜きか……

中々辛そうだが……まあ、ネクロゴンドの洞窟とかもそんな事あつ

たし、一応我慢できるかな…？

そう思って甘んじて罰を受ける事にした

.....

.....

.....

部屋の扉を開けると、丁度隣から同じタイミングで人が出てきた

「あら、朝下品な叫び声を上げて、その後も怒鳴ってたヴァリエー
ル嬢じゃないですか
夢見は如何でしたか？」

何やら芝居のかかった口調と仕草でルイズに挨拶する女性

「キュルケ……」

ルイズが多分その女性の名を憎々しげに呟く

「ルイズ、この人は？」

「ゲルマニアの牛女よ」

「ちょっとルイズ！その紹介はないんじゃない？

……初めまして、ルイズの使い魔さん

私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー

んで、こっちが私の召喚した使い魔のサラマンダーよ」

言われてルイズと共に下を見ると、見た事ない姿のトカゲがいた

……この世界でのサラマンダーがこれか……

「この尻尾の炎を見てなさいな

こんなに立派な炎だと火竜山脈にいるオリジナル種よ

出るところに出したらきつと値段なんてつけられないでしょうね
どうせ使い魔にするなら、こういうのを使い魔にしたいものね、ね
え、ルイズ？」

また嫌味つたらしくルイズに挑発してくるキュルケとかいう女

「ふ、ふん！」

ルイズはルイズで悔しそうな顔してるし……

「（おいルイズ）」

俺はルイズにキュルケに聞こえないように話しかけた

「（あによ？）」

「（お前、まさか俺があのとカゲに劣ってるとでも思ってるんじゃないだろうな？）」

「（べ、別にそういうわけじゃないけど……

メイジの実力を見るにはまず使い魔を見ろ、って言われてるぐらいなのよ?」

「(つまり、こっちの世界だと見るからに平民の男を連れてるよりも、サラマンダーを連れてるメイジの方が優れてる、と?)」

「(……うん)」

「(だったらそう思わせとけ)」

「(…えっ?)」

「(昼行灯装っておけて事

確かに俺は秘薬集めとかはできないけど、使い魔にとって一番大切な主人を守るって事に関しては、誰にも負ける気がしない)」

「ちょっと！内緒話してないで、私にもその使い魔を紹介しなさいよ！」

俺とルイズが無視して話してたのが気に食わなかったのか、キュルケが俺を紹介しろと言ってきた

まあ、確かに俺だけ自己紹介してないしな

「ああ、悪い

俺はナハト

ルイズに召喚された使い魔だ
よろしく」

「ええ、よろしく

……にしても大したものね
貴族相手にそれだけ堂々とした態度……それにサラマンダーを見て
も怯えも何もないなんて」

「ん？」

んにゃ、それこそ大した理由じゃないって
使い魔つてのはメイジにとってパートナーみたいなもんだろ？
しかもここ学院内で、平民が貴族に逆らったので死刑なんて、下手
すると貴族の家同士の争いになるじゃないか」

「……へえ……」

「それに俺は俺に敵意を持ってない奴に警戒する程臆病じゃない」

「……これは中々……ブツブツ」

俺がそう言つとキュルケはまた感心したように何事か呟く

………つか……朝食は？

第6章　そして運命の輪廻は再び……（後書き）

さて、今回出てきた少女……

彼女の名前を募集したいと思います

縛りは亀甲……ゲフンゲフン……ではなくて、カタカナ4文字以内です

候補の名前の中から、作者のイメージと合ったものを選びます

アンケート協力よろしくお願いします

第7章　そしてルイズは苦勞が増える（前書き）

更新が遅くなりました

実はリアルボミオスを…（r y

第7章　そしてルイズは苦勞が増える

~~~~~

SIDE 〱 サラマンダー

やあ、ボクはキュルケご主人様の使い魔になったサラマンダー

元々は火竜山脈なんて呼ばれてる所で暮らしていたんだけど、突然目の前に光り輝く鏡が現れて、ボクを誘ってきたんだ

ボクは迷う事なくそれに飛び込んだ

だって、山脈も確かに広いけど、この鏡の向こうはもっと新しくて見た事ないような光景があると思うと、ワクワクしてきたんだ

そこで出会ったのがキュルケご主人様

そしてボクはご主人様の使い魔になった……

……

……

……

「なあ、お前人間の言葉わかるか？」

ボクがご主人様との出会いのエピソードを思い出しながら、ご飯を食べていると、今朝部屋の前で（ご主人様が）自己紹介していた使い魔が話しかけてきた

なんと、彼は珍しい事に人間の使い魔らしい

「きゆるきゆる」

そんな彼が自分のご主人様所じゃなくてボクの所にいるのには理由がある……らしい

今ご主人様達は遅めの朝食を食べているところだと思う

今朝あの後、彼がそろそろ朝食食えなくなるぞって言って、急いで食堂に向かった

ボク達使い魔は食堂には入れず、違う場所で食事が与えられる事になってるんだけど、彼は使い魔ではあるものの一応人間だから中で食べるのではないかと思ったが、そうではなかったらしい

「だよな」

普通わかんないよな……」

ちなみにボク達使い魔は人間の言葉がわかる

じゃないと、ご主人様の命令に反応できないからだ

「……まあ、それでもいいか……」

ちょっと俺の独り言だけど聞いてくれよ

今朝俺は主人たるルイズを起こす時にちょっとしたお茶目をしたんだよ

そしたらルイズはガチ泣きして、しまいには俺に一日メシ抜きとか宣いやがった……

どう思うよ？」

……それは自業自得というやつなんじゃないだろうか？

彼の独り言にボクはそんな感想を持った

~~~~~

SIDE ～ナハト～

サラマンダーに独り言を言った後、ルイズ達が教室行くのについて行く

授業とやらが始まる直前だったからなのか、周りに他の人の姿は確認できない

そして教室に入ると、皆が俺達の方を見てきた

「おっ？平民召喚したヴァリエールがきたぞ！」

「本当に平民連れてるぞ！」

「あの平民、何処からか拐って来たんでしょ？」

あんまりな言葉の数々にルイズは真っ赤になって反論しようとするが、俺はそれを押し止める

「言いたい奴には言わせとけ
能ある鷹は爪を隠すって言うだろ？」

俺がそう言つと、ルイズは渋々ながら言う通りにした

そしてそれを見た連中がまた増長するが、今度はルイズも気にしないようにしてる様子

「はい、皆さん席に着いてください」

と、そこに教師らしき人物が来て皆席に着く

ルイズも皆と同じように席に着く

俺もルイズについてイスに座ろうかと思つたが、教室にいた他の生徒達の使い魔に見た事もない種類がいた為、そっちに行く事にした

近付いて見てみると、やっぱり今まで見た事ない魔物ばかりだった

名前も知らない魔物を見ていると、なんかこう……湧いてくる

モンスターメダルが欲しい！

元々、勇者であつた時でも珍しい武器防具やアイテム、モンスターメダルを集めるのが趣味だった

そしてここにきて未知の魔物との邂逅

テンションが上がらないワケがない！

という事で俺は教師のおばさんが何かスクエアがどうだとか、トライアングルだから何やらとかの講義（？）の声をBGMに魔物の観察を始めた

「……うーん……もしあっちの世界の魔物を使い魔にするなら、どんなのがいいかねー…」

ドバアアアアンツ！！

なんて、使い魔達を見て少しズレた事を言っていると、突然背後で爆発が起きた

俺のいた所は丁度イスやら机やらの影になっていたらしく、そんなに爆風はなかった

爆発音に興奮した周りの使い魔達から、今度は爆発の中心地と思われる場所を見ると……

「……少し失敗しちゃったわ」

……ルイズが皆の前において、まるで何かのギャグのように黒焦げになりながら言った

「どこが『少し』の失敗だー！！」

「そうだそうだ！

いつもいつも魔法の成功率ゼロのくせに！！」

「ゼロのルイズー！」

どうやらこの爆発はルイズが起こしたらしい

ルイズの足下には教師のおばさんが倒れていた

どうやらショックで倒れているようだ

……結局、その授業は中止になり、ルイズと何故か俺まで部屋の片付けをやらされた……

………なんで俺まで………

~~~~~

SIDEルイズ

またやっちゃった……

また魔法失敗して今は教室の掃除をやって、食堂でお昼を食べている  
周りには一緒に食べる友達はいない

いつも一人だ

本当は一人で寂しくないわけがない

でも、皆私をゼロのルイズと言つてバカにして遠ざける

いつもの事とはいえ、それで私が傷つかないわけじゃない

むしろ、気持ちが生んでる今だからこそ隣に誰かいてほしいものだ

「……はあ…、こんな事ならあいつも誘えばよかったかな……」

そう呟き、あの昨日召喚した使い魔を思い出す

このハルケギニアでは珍しい黒髪の少年

見た事ない装備を持ち、魔法も使える異世界から来た元勇者・ナハト

彼は今、今朝の件で一日ご飯抜きを与えているので、ここにはいない

「はあ………」

また溜め息をこぼす

「おい、聞いたか？」

広場でギーシュが決闘やるみたいだぞ！」

と、その時他のテーブルからそんな事が聞こえてきた

「やれやれ……」

この学院の生徒達は本当に決闘だの恋愛だのそういった退屈しのぎが大好きね

まあ、どうせ私には関係ない事でしょうけど…

そう思い、紅茶のカップに口をつけ……

「相手は誰よ？」

「昨日召喚された平民の使い魔らしいぞ」

ブッ！？

思わず紅茶を噴き出す

「な、なな何やってんのよ！

あのバカ使い魔はっ！」

私はその話をしていた生徒の所に行き、何処で決闘するのかを聞いた

『ヴェストリの広場』

すぐにそこに駆け出す

別にナハトを心配してるわけじゃない

あんなに自分は強いと豪語し、実際魔法も使っていた彼ならトライアングルが相手でも勝てると思う

だから、ナハトの身の安全とかは全くこれっぽっちも心配していない  
私が心配してるのは、ナハトが面倒事を起こして私が責任をとらさ  
れる事

「もう！少しは大人しくしててよ、あのバカ使い魔は！」

**第7章   そしてルイズは苦勞が増える（後書き）**

次回決闘ですね

何やらせようか……

## 第8章　そして使い魔は決闘する事になった（前書き）

語る事は何もない

強いて言うならば、もう一方の作品も書かなければヤバイという事か……

## 第8章　そして使い魔は決闘する事になった

ルイズと一緒に何とか午前中に部屋の片付けを終わらせる

片付けの最中になんで俺もやらないといけないんだって言ったら、メイジと使い魔は一心同体だからだそうだ……意味わかんね……

で、片付けが終わった後、ルイズは食堂に昼飯食いに行つて、俺はどうしようかとふらついていると、テラスのような広場に出た

どうやらここの生徒らしき連中がティータイムを楽しんでいるようだ

軽く見渡していると、見知った顔を見付けたので近付いて行った

「うつす、シエスタ」

「えっ？」

「……あつ、ナハトさん！」

「忙しそうだな…手伝うぞ？」

他のメイド達も広場を所狭しと行き来している

だから、俺も少しは手伝いたいと思ったのかもしれない

「そ、そんな！」

大丈夫ですよ、これが私の仕事ですから」



が、シエスタは俺の申し出を拒否……というより、何やら遠慮しているような様子

「いいからいいから

一食一泊の恩があるだろ？」

そう言つて無理矢理手伝おうとする

するとシエスタも苦笑いして

「えっと……じゃあ、このデザートをあっちのテーブルに運んでもらえますか？」

そう言つた

俺の答えはもちろん

「任せろ」

力強く頷くのだつた

……

……

……

シエスタから盆を受け取り、指定された場所に行くと、惚れたモチ

たなんて話し声が聞こえてきた

「おいギーシュ

結局今は誰と付き合ってるんだい？」

「ふっ、無粋だね君たちは

僕というバラは特定の女性にあるものではないのさ  
皆に平等に愛を捧げる為にあるのだよ」

……うえっ

あのパッキンよくそんなキモいセリフ吐けるな  
あいつ（精神衛生上名前は言いたくない）連れてくるから、同じセ  
リフ吐いてみるよ……連れてきたくないけど

だが、どんなにキモい連中相手でも、俺は給仕であいつらは客

つまり、表情は隠して相手をしなければならぬ

「皆さん、デザートをお持ちしました」

「おお、これはご苦労

適当に置いておいてくれたまえ

……で、先程の話の続きなのだが……」

…イラッ

こつちを見向きもしないその態度に、デザートのパイを顔面にお見  
舞いしてやろうかと思っただが、まあ、仕事なので我慢する

「では失礼します」

そう言ってデザートを並べ始める

そして並べ終わった後、さつさとこのテーブルから離れようとした時に見付けてしまった……

あの時ソレを見付けなければ俺はあんな事に巻き込まれずに済んだのだろう、とのちに思った

……まあ、巻き込まれるのが嫌だったワケじゃないから結果オーライではあるのだがな……

ソレは小さな小瓶だった

その小さな小瓶はキモいセリフを言っていた奴のイスの下辺りに落ちていた

位置的に言ってもそいつが落としたと思われるソレを拾い、そいつに渡す

「ほらよ、イスの下に落ちてたぜ？  
これあんたのдаро？」

やつべえ……俺良い奴過ぎるわ

多分今までの人生の中でベスト3に入るぐらい優しい行動だよ

「ん？……いや、それは僕のではないよ  
悪いが、人違いのようだよ

……で、やっぱり下級生の……」

だが、そいつは俺の好意の行動を一瞥しただけで、自分のではない  
と言いつつ放った

しかも、顔を見るに明らか自分のだと言っているようなのに、だ  
おまけにまた話の続きをしやがった

……これは俺も切れていいんだよね？

そこまで考え、俺はやってやる事にした

……そっちがそついう態度なら、俺にだって考えがある、と

「ええーっと、ティータイム中失礼しまーす！  
少しでいいので、注目してくださいさーいつ！」

俺はいきなり大声を上げて、周りに呼びかけた

そして、周りの皆が俺に注目してくれたのを確認し、続きを言う

「誰かこの小瓶に見覚えのある人はいませんか？」

と、俺は小瓶を高々と上げて叫んでみる

すると、周りの皆は俺の高々と上げた小瓶を見てくる

これに真っ先に反応したのは、さっき自分のじゃないと宣ったキモ  
いセリフヤローだった

「ちょ、ちよつと待ってくれたまえ！

それはやっぱり僕のだったよ！

だから、すぐに返してくれ！」

なんかめっちゃ必死こいて取り戻そうとしているが、そうは問屋が卸さない

こいつには俺が受けた屈辱を何倍にも味わってもらわねばならないのだから

そして俺はおもむろに小瓶のフタを取り、中身の匂いを嗅いでみる

「ええゝ、何やら良い香りがしますねゝ

香水か何かでしょうか？」

と、俺が実況中継した途端、少し離れたテーブルからツカツカと一人の少女がこっちに歩いてきて……

ベチャッ

デザートのパイをそいつの顔面に叩き付けた

「やっぱりあのドリルな先輩と付き合ってたんですねっ！？最低ですっ！」

そう言つて、彼女は何処かに走って行ってしまった

そしてその少女と入れ違いになるように近付いてきた少女（あつ、こいつは教室で顔見た事ある）が、同じくテーブルの上にあった紅

茶のカップを奴の頭の上で傾け言った

「まだあのケティってのにちょっかい出してたのね？  
もう私に二度と近付かないでちょうだい！」

やっぱり彼女もそれだけ言うのと、何処かに行ってしまった

……やっべ、思ったた以上に面白い展開になってきたかも……

俺は平凡を嫌い、変化を求める

故に今みたいなイベントやら何やらは大好きである

だから、引つ掻き回そうと思ってやったのだが、想像以上に面白い  
事になっていったようだ

「……ふう……どうやら彼女達は僕というバラの良さに気付かなか  
ったようだ……」

しかもこいつ、性懲りもなくそんな事を宣ったから始末にを得ない  
イベントは好きだが、面倒事はどちらかといえば嫌いな部類なの  
で、もうその席を離れようとした時

「待ちたまえ」

……うわぁ……めんどくさいのに巻き込まれる予感……

「君のせいで、僕の名誉といたいけな少女二人の心に大変大きな傷  
ができてしまった

どう責任をとるつもりなんだね？」

訂正

めんどくさい通り越して、もはや言い掛かり

だから言ってやる

「うるせえよ、二股野郎

てめえが二股なんてバカみたいな事やってるのが悪いんだろ？  
それを俺のせいとか責任転嫁しやがって、子供かてめえは」

「はははっ！

確かにそいつの言う通りだ！

ギーシュ、二股したお前が悪い」

「ちげえねえ（笑）」

と、俺が言つと連れだった友人にまで笑われるギーシュとやら

俺はまあ、自業自得だと思って今度こそこの場を後にしようと踵を返した時、思わぬ言葉が聞こえてきた

「き、貴様あ……決闘だっ！！」

………今度は一体何だよ………

俺は心底ゲンナリして、奴を睨むのだった……



## 第8章　そして使い魔は決闘する事になった（後書き）

ちなみにあの謎の少女の名前はまだ募集しています

何分、作者が怠惰なものでして……

決闘どうしよ……

## 第9章　そして使い魔は決闘した（前書き）

おはようございます

皆さんはこのGW如何お過ごしでしょうか？

作者は学校の課題をやらずにバイトと執筆の毎日です

このままではリアル卒業できません……（涙）

## 第9章　そして使い魔は決闘した

俺はギーシュとやらの友人に案内してもらいビクトリア広場にやってきた

そこではすでにギャラリーが集まっていた

「諸君！決闘だ！」

奴がそう言うが、正直俺には決闘のつもりなんてこれっぽっちもない

理由は簡単だ

決闘とは実力が拮抗してる者同士で行うものであり、俺と奴とでは拮抗どころか同じ土俵ですらないだろう

ならば、これは決闘と呼べるものではないな……

そう考えてた時、ギャラリーの間を縫うようにすり抜けてきた者がいた

俺のご主人、ルイズだ

「ちよつとナハト！」

あんた何やったのか知らないけど、面倒事は止めなさいよね!」

目の前まできたルイズは何故か怒っていた

「面倒事？」

そいつは向こうに言ってくれよ

俺は俺の思うように行動してたらこうなったんだ……」

「だ・か・ら!

あんたは少しは自重しなさいよっ!」

「んな事言ったって、今更どうともできんだろ……」

俺がそう言つと、ルイズは溜め息をついた

「……はあ……」

じゃあ、もういいからできるだけ穏便に終わらせなさいよ……」

そんな会話をしていると、顔面パイ紅茶ぶっかけ男が水を差してきた

「おやあゝ？」

そこにいるのはゼロのルイズさんではないかね？

こんな所でどうしたんだい?……ああ、そうかそうか

無礼な使い魔の代わりに僕に謝りに来たんだね？

まあ、僕としては平民の使い魔君でもゼロのルイズでも、謝ってくれるならどちらでも構わないよ」

……しかも早口にわけわかんねえ事言いだした

俺がお前に謝るだど？

意味わかんね

「おいルイズ

あいつムカつくからギガデインかましていいか？」

「何だかわからないけど、危なそうだからダメよ」

半分冗談半分本気でルイズに許可を求めたら、即答で拒否された

「ちなみにどんな魔法なの？」

恐る恐るルイズが尋ねる

「魔法じゃなくて呪文な

効果範囲は多分こちら辺一帯で、その効果としては、雷の力を一瞬溜めてから大爆発させるって感じかな？

予想被害としては、多分だけど、効果範囲にいる人間が瀕死かあるいは即死」

「そんなの禁止！

禁止も禁止！大禁止よ！

あんたバカじゃないのっ！？」

なんかめっちゃ怒られた

「だから、半分冗談って言っただろっが！

そんな怒鳴らなくったっていいだろ」

「つまり半分は本気だったって事じゃない！」

「ああゝ…、こらこら、この僕を無視するな」

「うるさい！

ギーシュは黙ってて！

今私はこいつと話してるの！」

ルイズは完全にヒートアップ

当事者の傍らを邪魔者扱いし、俺を怒鳴りちらしている

「よく平気で人が死ぬような魔法使う気になれるわね！？  
ほんつとに信じられないわ」

「だから冗談だって言ってるだろうが！  
何回同じ事言えばわかるんだよっ！」

かくいう俺も最早奴の事なんて眼中になく、ルイズとのケンカに意識がいつている

「僕を無視するn…」

「うるさいっ！！」

「ひいっ！？」

「おいルイズ

このケンカ後回しにして、とりあえずあのうるさいのを黙らせるのが先だと思ったんだが？」

「名案ね

私も丁度そう考えてた所よ」

と、ルイズと意見が一致する

だが、もう元々の原因がわからなくなっていて、ケンカをする事が目的となっている俺とルイズ

そしてようやく決闘相手……ギーシュを見る

……うん、ギガデインなんて使ったら、即死しそうだな

そう思いつつ、装備を確認

武器：吹雪の剣

鎧：旅人の服（俺仕様に改造版）

盾：なし

兜：なし

装飾品：星降る腕輪

まあ、ガチバトルするわけじゃないんだから、こんだけあれば十分か

そんな事を考えていると

「ま、まあ、色々あったが、決闘を始めようではないか

僕はメイジだから当然魔法で闘うよ

君はその背中の剣でも使いたまえ」

そんな若干へっぴり腰で言ってきた

「いいからさっさと始めるぞ  
俺はこの後予定ができたんだ」

俺が少しイライラしながら言うと、奴は一礼し名を名乗ってきた

「僕はギーシュ  
ギーシュ・ド・グラモンだ」

それが決闘の礼儀らしい

だから俺も名乗ろうと思うが、俺には家名があるわけでもない

少し迷った末に俺は称号を名乗る事にした

「……俺はナハト  
ナハトⅡロトだ  
さあ、さっさと始めるぞ」

そう言っただけで俺は吹雪の剣を構える

すると不思議な事が起こった

剣の柄を握った瞬間、まるでピオリムとスカラとバイキルトをかけられたかのような変化が起こった

そして左手の甲……使い魔のルーンとやらが光り輝いていた

こいつが原因か……？



そう思ったが、今はそんな事を考察してる余裕はないようだ  
いや、余裕はあるんだが

「さあ、行けワルキューレ！」

ギーシュは人形の何かを土から作り出していた

見た目はあまり精巧な物ではなく、動く石像等に比べれば威圧感もない

つまり大したレベルじゃなさそうだって事だ

俺は踊りかかってきた木偶の坊に誰が反応するよりも速く懐に入り、  
袈裟懸けに吹雪の剣を振り抜く

「あっ……」

それは誰が溢した眩きだっただろうか

あるいは俺自身が溢したものだっただか

気分的にはまるで隼の剣を使った時のようだった

「なっ!?!」

今度の声はギーシュのものだろう

実は俺も内心驚いているのを表情に出さないようにして、ギーシュ  
を見て言った

「まだやるか？」

~~~~~

SIDE↳タバサ

キュルケに誘われて決闘『ごっこ』を見に来たけど、誘ったのがキュルケじゃなければ絶対に来なかっただろう

決闘の当事者の一人はクラスメイトのギーシュ

多分また女性絡みのいざこざだろう

それでも親友に誘われたからには一応見物だけでもしに来た

「まだやるか？」

だけど、そこで見たのはドラゴンと虫の戦いだった

いや、これは戦いと呼べるものではなく、一方的な展開だ

「くっ、まだまだ終わりだと思っなよっ！」

さあ、ワルキューレ！奴を囲って潰してしまえ！」

ギーシュは新たに錬金でワルキューレを6体作り出したが、彼には意味なかった

「つーか、男なら己の拳で戦えよ！」

そう言つて身近にいたワルキューレを殴り、ギャラリーまで飛ばし、ギーシュが指示を与える前に次々にワルキューレを葬っていく

僅か5秒足らずの時間で6体全てのワルキューレがただの土に還つた

強い

あまりに圧倒的な強さだった

誰にも反応できないスピードで
誰にも対処できない力で
誰にも止められない攻撃をする

彼なら……彼にならできるかもしれない

そう、彼女は希望を持ってしまった
今まで自分しか希望はないと思つていた彼女が
初めて自分以外に希望を持ってしまった

第9章　そして使い魔は決闘した（後書き）

思ったのですが、星降る腕輪装備したナハトが隼の剣も装備できたら音速を超えるような気がします

まあ、そんな事したら個人対個人でチートだと思うのでやりませんが……

第10章　そして使い魔はとつとつやらかした（前書き）

全然進まねえ……

こんなゆっくりペースでちゃんと終わるのか……？

第10章　そして使い魔はとつとつやかした

~~~~~

SIDE 〓? 〓? 〓

ナハトとギーシュの決闘を覗き視ていた者達がいた

それは決闘の報せを秘書から受けた学院長オールド・オスマンと、別件で学院長を訪ねていたコルベール……ナハトのルーンをスケッチしていたハゲだった

コルベールの用件とはまさにその事で、ナハトのルーンが伝説の使い魔・ガンダールヴのそれと酷似していた為、過去の文献を漁って調べた

その結果、ガンダールヴのルーンと一致しており、これは一大事だ  
と思い学院長に相談しに来た

そしてその話を始めた途端、件の決闘騒ぎ

しかもその当事者の一人は先の少年とあって、彼らは決闘を遠視の魔法で視ていたのだった

「学院長……」

「わかっておる」

二人は何も言っていないのにお互いが言わんとしてる事をわかっていた  
片や学院長という役職で職権濫用するエロジジイ

片や真面目ではあるが研究一筋であり生徒達からの人望があるとは  
言えないハゲ

だが彼らは曲がりなりにも数多の修羅場を潜ってきた猛者である  
今の決闘にどれだけの情報が隠されていたのかを読みとっていた

「ミスター・パゲール君」

「コルベールです」

「コルベール君」

「なんですか？」

「この事は他言無用じゃ」

「なんでですか!？」

コルベールにとってオスマンの言葉は理解できなかった

彼の戦闘力はまさしくガンダールヴのそれだった

つまりガンダールヴ……伝説の再来である

「ではハゲ君、ガンダールヴとはあらゆる武器を使いこなし、その圧倒的な戦闘力で主を守ったという  
確かに彼は圧倒的な戦闘力を持っていたが、ワシが思うにあまりにも人間離れし過ぎじゃ」

「ついに呆けましたか？私はコルベールです  
して、どの辺が人間離れし過ぎだと？」

「動きが速過ぎなのじゃ  
君はあの動きを目で追えてたのか？」

オスマンの言う通り、ナハトの動きは肉眼で追えるレベルではなく、遠視の彼らですら何が起こったのかわからなかったのだ

「いや……しかし、ガンダールヴでしたら……っ！」

「そうかもしれぬ  
じゃが、ワシの長年のカンがそれだけじゃないと告げているのじゃよ  
……それともう一つ」

「今度は何ですか？」

「少年がガンダールヴだとすれば、彼の主たるメイジは虚無という事になるが……彼の主は誰じゃ？」

「確かミス・ヴァリエールだったかと」

「公爵家の末っ子か……  
彼女のメイジとしての能力はどうじゃ？」



「……それがあまり芳しくなく……座学なら良い成績なのですが……」

「さて、そこじゃ

尋常じゃない強さのガンダールヴとその主のメイジとしての能力の差……

謎が多いのにわざわざ事を大きくする必要もあるまい」

「わかりました

では、この件につきましては私も箝口令をしまししょう」

そうしてナハトは観察されていたのだった

~~~~~

SIDE ～ ナハト ～

時間はすでに夜

俺はルイズとケンカする為に学院敷地内にある森にやってきた

森といってもそんなに広いものではなく、城とかにある中庭程度の大きさの森だ

「じゃあ、夜も遅いしさつさと始めるか」

「ええ、そうしましょ
どっちが上だか思い知らせてあげるわ」

と、未だに売り言葉に買い言葉なのだが、当の本人達はすでにケンカの目的を忘れており、ケンカ自体が目的になってしまっている

そんな一触即発（？）の空気の中、俺は誰かがこちらを見ているのを感じた

「誰だ？」

最初はホントにカンのようなものだったが、長い一人旅で身に付いた自分を守る為の能力：即ち野宿や寝込みを襲われないような危機感知能力

「もう一度だけ言う
姿を見せて名を名乗れ」

多分ルイズには何の事だかわからないだろうが、こればかりはしょうがない

このままケンカしてて、こっちを覗き見している奴に奇襲をかまされるよりかはマシだろう

「……………」

そして視線の正体たる彼女は木の影から出てきた

「タバサ？」

あなたこんな所で何やってるの？」

ルイズがそう尋ねるが、青髪のちびっこは答えずに真っ直ぐ俺の所まで来る

「なんだ？」

「助けて」

「唐突になんだそりゃ？
理由と経緯を説明しろ」

いきなり助けてとかわけわからね

だが、おそらくではあるが面倒事に巻き込まれるのは確かだろう

面倒事は嫌いじゃない

何故なら、十中八九戦闘が絡んでくるからだ

つまり俺が欲しかった刺激がある

そう思って理由を聞いたんだが、これがただの面倒事じゃなくてこの世界単位での面倒事になるなんて、俺はまだ知らなかった

「お母さんを助けてほしい」

「それだけじゃわからんって
ちゃんと全部話さないと助けようにも何もできないぞ？」

「わかった………実は………」

そう言って語ったのはこんな感じだった

- ・彼女の名前はタバサ………だけど本名はシャルロット
- ・ガリアという国の王族だとか
- ・次の王になるはずだった父親をその兄である叔父に殺された
- ・次に狙われたのは自分と母親
- ・母親はタバロット（俺にはどっちで呼べばいいのかわからん）を庇って毒を盛られた
- ・今は母親を人質にとられている
- ・おそらくあちらにはエルフがついている

エトセトラ

まあ、つまりは母親を人質にとられている事か

こっちの世界の事情なんて知らんから他の事はわからんが、それだけわかった

「そ、そんな！タバサ、オルレアン公の娘だったの！？」

「（コク）」

なんかルイズは驚いているみたいだが、俺にはわからん事だ

「それで？」

助けてほしいってのはお前の母親の事か？」

「そう」

「条件があるがそれでもいいか？」

「やって……くれるの？」

「まあ、条件をのんでくれるならだけだな」

「あ、あんた何言ってるのよ！

相手にはエルフがいるかもしれないのよ？いくらあんたが規格外に強くったってエルフには絶対に勝てないわ」

「ルイズ」

「な、何よ」

「お前勘違いしてないか？」

「え？何がよ？」

「……まあ、いいや

丁度いい機会だし見せてやるよ
爆発呪文ってやつを」

「え？」

「前に言ってた俺の世界の爆発呪文を見せるってやつ

……あつ、お前もだけどこれからの事は誰にも喋るなよ？」

「わかった

……でも何をするの？」

そついや俺の事から説明しないといけないのか

「じゃあ、今更だが自己紹介するか

俺の名はナハト

信じられないかもしれないが、俺はこことは違う異世界から来たんで、俺は剣とかの他に呪文……こつちでいう魔法を使える」

「わかった

私はタバサと呼んでほしい」

え？わかった？信じるの早くね？

「な、なあ、俺が言うのもなんだが、なんでこんな荒唐無稽な話をすぐに信じられるんだ？

ルイズですら呪文とか見せてようやく信じた口だぞ？」

俺の疑問にタバサはごく当たり前のように答えた

「あなたは私を助けてくれると言った
だから私もあなたを信じる」

俺はその真っ直ぐな言葉に何も言えなくなる

「そ、そつか……

じゃあ、爆発呪文いくぞ……

……イオラ」

俺は森に向けてイオラを放つ

ドガアアアアン！！

イオナズン程ではないが、巨大な爆発が森の木々を薙ぎ倒していく

「なっ……！？」

「（ポカーン）」

いきなり森に爆発が起こり、その爆発で木々が燃え出した

そして二人共目の前の光景が信じられないといったように茫然自失している

「これが俺の使える爆発呪文だ

俺のいた世界だともっと強力な爆発呪文もあるし、俺はそのどれよりも強力な呪文を使える」

俺が若干ドヤ顔でそう言ってる間、二人は爆発によって燃えている森を茫然と見ていた

「……やり過ぎたか……」

流石に燃えてる森を見て冷静になりそう呟く

「やり過ぎに決まってるわよ！

燃えてるじゃない！どうするのよ、これ！」

って言っても俺ヒヤドなんて使えないし、吹雪の剣でも消火できるかどうか……

「……バツクレるぞ」

結局俺の出した結論はそれだった

どっちにしろここで消火活動しててもお偉いさん方が来て、事情を聞いてくるに決まってる

だったら、さっさとバツクレて面倒は避けよう

どうせ後から来た連中で消火してくれるだろう

「逃げるなんてできるわけないでしょうがっ！

ここを何とかしないと大火事になっちゃうでしょ！」

そうは言うが俺もお前も消火できそうな呪文なんてできんだろ…

「タバサは何とかできそう？」

「あなたの望みなら」

そう言っ杖を燃えてる森に向けて何事か呟く

すると何もない所から水が出現し、火事を消していった

……いや、あれは空気中の水分を魔法でかき集めたのか

俺は今の魔法の仕組みをそう考察した

それを何回か繰り返していたタバサだったが、もう火が上がっている部分もほとんど消えた時、杖を下ろした

「精神力が切れた」

そう言つて

精神力……MPみたいなものだろうか

まあ、ほとんど火は消えたし問題ないか

そう思つていた所で人が近付いてくる声が聞こえた

「な、なんだ今の爆発音は!？」

「知らないよ

でも、何かありそうじゃないか？」

まずいな……

「おい二人共こっちに来て
今度こそバツクレるぞ」

「えっ？でももう人が……」

「いいから!」

そう強めに言つて二人を引き寄せ……

「二人共、俺の体から手を離すなよ？」

……
「ルーラ」

そうして俺は初めての呪文に戸惑う二人を連れてルイズの部屋に戻っていったのだった

第10章　そして使い魔はとうとうやらかした（後書き）

最後駆け足気味だったかな？

この後イオラとルーラの説明入れなあかんし……

ホントに終わる気配がしない……orz

第11章　そして使い魔は新たなスキルを手に入れた（前書き）

またまた間が開きましたね……

今日明日は連続投稿できそうなのでそれで勘弁してください……

第11章　そして使い魔は新たなスキルを手に入れた

とりあえずルーラでルイズの部屋に帰ってきた俺達三人

色々やらなきゃいけないが、まずはルイズ達にルーラの説明をしないといけなかった……

「まあ、今はルーラ　といって、一度行った事のある場所に瞬間移動できる呪文だ」

俺はとりあえず、今の瞬間移動について説明した

まあ、説明といっても呪文を使ったからの一言で済むんだが

「なんでそんな便利な魔法をあんたは使えるのよっ！
ご主人様はまともな魔法すら使えないのに！」

俺の説明にいきなり怒りだすルイズ

………つか、キレるトコか、そこは……

「まあ、俺は元勇者だからそんなぐらいは余裕でできるんだよ」

………ホントにムカつくがこればかりは『勇者オルテガの息子』であつた事に感謝だな……

「で、んな事よりも今の問題はタバサだろ？」

さっきは色々時間もなかったりして深くは聞けなかったが、俺をどうして信用してきて、そして助けを求める経緯になったのか

この辺をしつかり聞いておく必要がある

俺は俺の素性がバレようが手の内がバレようが、その程度で寝首を搔かれる心配なんてしてないし、むしろそんな度胸と能力があるならかかってこいと言える

だけど、今の俺には使い魔としてルイズを守らなきゃいけない

こいつがホントに俺の手助けを必要としているのか、それとも（どんな必要性があるのかはわからんが）俺をハメて、俺かルイズを傷付ける可能性があるなら、そこはしつかり白黒付ける必要がある

……俺もわずか数日で随分使い魔になっちまったな……

「で、改めてだけど、お前が俺に助けを求めている理由と、どうして俺なら信用できると思ったのかを教えてくれ

俺はさっきも言った通りこの世界の人間じゃねえから、お前の言葉に対して何の信憑性も感じない
さっき引き受けたのは一瞬ではあるが、面白いと思ったからだ
だけど、この後のお前の理由如何によっては前言撤回もあるからよろしく」

俺の言い分はあまりに勝手だ

こんなのガキでもわかる事だ

『約束した事は必ず守れ』

そんなのは百も承知だ

だけど、俺は他人の決めたモノサシなんかで行動を制限されんのが嫌いだ

俺は俺のやりたいように生きていく

めちゃくちゃでも何でも、こればかりは俺の性分だからしょうがない

……でも、それでも俺を動かしてくれるような奴、俺が考えを曲げざるを得ないような事をしてくれれば、あるいは……

……さて、タバサ殿はどうやって俺の興味を引かせてくれるのかね

……

~~~~~

SIDE〜タバサ〜

……驚いた

私は今までこんなに理不尽な事を言われた事はなかった

……いや、でもイザベラからはいつも言われてるかな？

それでも希望から絶望に落とされた気持ちなのは変わらない

でもだからこそここでこっちの事を信用してもらえように説明できればいい

そう考えると幾分気持ちは楽になった

「本当の事言つと、まだあなたの事は信用しきれてない」

「……ほう」

……あれ？

私は何を言っているのだろう

普通に考えればここは心証をよくするような言葉を選ぶべきだ

それなのに口から出てきた言葉はその逆の言葉

……だが、逆ではあるが私の本心だった

「ギーシュとの闘いを見て、気持ちの糸が切れたのかもしれない  
あなたの力にすぎりたくなつたのかもしれない  
でも、あなたの力ならあの叔父相手でも勝ってくれると思った」

もう自分で口を止める事はできなかった

思っていた事が次々と口から出ていく



「つまり俺を完全には信用してないが、利用して自分の母親を助けられるかもしれないと思った

……でいいのか？」

「（コク）」

……もう取り返しがつかない

……でも、何故か気分は悪くなかった

言いたい事を言いきったからだろうか？

「いいんじゃないか？」

今のを聞いて俺はタバサに協力してもいいと思ったぜ」

………え？

今この人は何て言った？

協力してくれる？なんで？

「呆氣にとられたって顔だな

俺が協力するって言ったのがそんなに意外か？」

よっぽど表情に出ていたのか、彼にそう言われる

「大した理由じゃないさ

人ってのはウソをつく時にはどんな奴でも少なからず表情に出るもんだ

お前はさつきと今では顔つきが違った

……少なくともルイズに危害を与えるような奴じゃなかった……と、俺はそう判断した」

「ちよっ!？」

なんでそこで私の名前が出てくるのよ!？」

いきなり名前が出てきてビックリしたのか、あるいは久々に自分が会話に入れるからなのか、ヴァリエールは大きな声を出す

……が、今の私には些細な事だった

あの状況からまさか本当に協力してくれるとは思っていなかった

「んー、だって俺はお前の使い魔だろ？」

だったら、主人の身の安全に気を使うのは当たり前じゃねえか

……感謝しろよ？」

主人にここまでストレートに気持ちを伝えられる使い魔なんていないじゃねえか？」

「~~~~っ!?!?」

彼がそう言つとヴァリエールはトマトのように真っ赤になった

「んと、じゃあ、タバサ

協力するかわりに条件出すつつたよな？」

そうだ

協力はしてくれるけど、そのかわりにこっちもあっちの条件を飲ま

なければいけない

……条件とはやっぱり身体だろうか……

前にキュルケが言っていたけど、男性は毎日どんな時でも女性の身体の事ばかり考えている才オカミらしい

……私はあんまり女性らしくない身体だけど、それが望まれるのなら……

と、そこまで考えた所で彼が口を開いた

「俺が出す条件は………」

……ドキドキ

……あれ？

私、何故か少しドキドキしてきた…？

「必要になった時でいいから、お前の使い魔を足として使わせてくれ」

「………はい？」

………あれ？

今彼は何て言ったの？

「ちょっとあんたそれどういう事よー！」

ヴァリエールがそう彼に詰め寄るが、私だって意味がわからない

「……………どういう事？」

私は思わず彼に尋ねた

「ん？」

……………ああ、昼に他の使い魔達に聞いたんだよ  
タバサって奴が竜を使い魔にしたって

……………お前の事だろ？」

「（コク）」

……………でも他の使い魔が？」

「使い魔だって生き物だ

こっちが話しかければ答えてくれるし、反応だってしてくれる  
ただ、俺達は奴らの言葉がわからないだけ」

「なんでわからないのに、あんたはわかるのよ！  
バカじゃないの？」

「んー、なんていうか、わかるっつーより感じるんだよ」

余計にわからない

そんな漠然としたもので細かい所までわかるだろうか？

「それでなんで私だとわかったの？」

「ああ、それは地面に名前を書かせた」

なんて、彼はとんでもない事を言った

「まあ、んな細かい事はいいじゃんか  
それより、タバサは俺の条件引き受けてくれるのか？」

確かに細かい事だけど、軽く流してはいけないと思う

だけど、そこを突っ込んで聞いて協力してもらえなくなるのはもつ  
とマズイ

「……………わかった」

だから、私はこう答えた

……………後でシルフィードに聞こう

第11章     そして使い魔は新たなスキルを手に入れた（後書き）

今話はどうでしたでしょうか？

まあ、感想でタバサのキャラが違うんじゃないかと言われ、そこら辺を解消する為の回ですね

以下戯れ言

睡眠学習って怖いですね

なんせ、授業がまったくわからなくなりますし

## 第12章　そしてLUCKは285（前書き）

前言通り連続投稿！

まあ、明日もそうかと言われるとごめんなさいなのですが……

## 第12章      そしてLUCKは285

「あつ、そういや武器屋行きたいんだけど、近くあったりするか？」

とりあえずの問題が片付き、今はルイズの部屋でまったりお茶ムードになった俺達三人

そんな中、ふと思いついたので二人に聞いてみる

「はあ？急にどうしたのよ？」

あんた武器なんて持つてるじゃない」

「あれ、言つてなかったっけ？」

俺、武器とか集めんのが趣味なんよ

で、この世界特有の武器とかないかなって、ふと思いついたから聞いてみたんだけど、どうだ？」

「そう言われてもねえ……」

どっちにしる虚無の曜日じゃないと無理よ」

虚無の曜日？

「なんだそりゃ？」

「簡単に言つと学院が休みになる日よ

基本的にその日じゃないと、買い物になんて行けないわ」

「そんな日があるのか？」



こつちじゃそもそも曜日なんて概念すらなかったしな

「ええそうよ

じゃあ、どうする？

次の虚無の曜日にでも街に行ってみる？」

「んー、そうだな

じゃあ、その虚無の曜日とやらになったら行くか  
二人共、特に予定とかなかったか？」

「大丈夫」

「っていうか、なんでご主人様に断らずに決めてるのよ」

「ダメだったか？」

「……まあ、いいわよ

次からは気を付けなさい」

溜め息をつきながらそう言うルイズ

「はいはい

じゃあ、二人共その日は頼む」

その日はそれでお開きとなった

~~~~~数日後~~~~~

今日は虚無の曜日です
つまり買い物の日なのです

「……で、なんでキュルケがいるのよっ!!」

ルイズが怒ってる

どうやらそこまでキュルケが嫌いらしい

ちなみに面子は俺、ルイズ、タバサ、キュルケ、そしてタバサの使
い魔の竜

……思ってたよりも小さい竜だが子供だろうか？

「なんでって、昨日の夜に今日の予定聞かれたから答えただけ
そしたらついてくるになった」

「そんなに邪険にしなくてもいいんじゃない？」

「うっさい！牛のくせに生意気にも人間の買い物についてきて」

「……あら、貧乳が何か言ってるわね」

「……………アレ？」

いつの間に剣呑な空気になった？

「私より胸の大きい奴を皆殺せば私が巨乳になるわ」

怖っ！？

ルイズさん？その発想はマズイですよ？

「それじゃ女性のほとんどがいなくなるじゃない」

「……………死なす！」

……………マズイ

ルイズの目が据わってきた

「はいはいストップストップ
さっさと街行こうぜ？」

流石に仲裁に入る

「……………そうね」

「……………ま、私は別についていければいいし」

……………ふう

なんで俺が仲裁なんてしないといけないんだよ……………

俺、そんなキャラじゃなかっただろ……………

まあ、そんなこんながあったが、無事に街に着いた

小さい竜だとは思ったが、俺達四人を乗せるには問題なかった

ただ、スピードはラーミアの方が速い印象を受けた

……そんな事はおいておいて、街の様子を見てみると、前の世界同様それなりの活気があった

つまりそれは人や物の流通が多く、俺の探しているような珍しい物もあるかもしれないという事だ

だが、問題がある

いくら俺が欲しい物を見付けたとしても、俺にはこの世界の金がない

「ちょっとナハト？」

「ぱーっとするのはいいけど、財布にだけは気を付けなさいよ」

そんな事を考えていると、ルイズからそんな事を言われた

「大丈夫だろ」

「あら、それは間違いよダーリン」

俺の返事にキュルケが絡んできた

「ん？どゆ事？」

「それと誰がダーリンだ」

「何もスリするのは平民に限らないって事よ

メイジだってスリをするのはいてもおかしくはないの

あと、ダーリンはダーリンよ」

「は？」

メイジって貴族だろ？

貴族がそんなちんけな犯罪するのか？」

まあ、権力使った犯罪なら平気でやりそうだがな……

「メイジの全てが貴族ってわけじゃないの
メイジの中には没落した貴族だっているわ

つまり、必ずしも貴族〓メイジというわけじゃないの」

……ふーん

「あつ、そうだ

金で思い出したんだが、俺って自分の金持っていないじゃんかで、これから買いに行くのは俺の買い物なんだから、俺の金を使うの筋だと思っただよ」

「正論ね

でも、今は別にご主人様に甘えてもいいんじゃない？」

これはルイズ

「ダーリンの欲しい物は私がぜーんぶ買ってあげるわ！」

こっちはキュルケ

「……私も」

タバサまでもか……

「いや、でもそのぐらいやりたいんだよ」

「でも、あんたどうやって稼ぐの？」

「そんな時間はないのよ？」

確かに

真っ当に稼ぐには金がかかるだろう

それこそ街の外に魔物がいて、その魔物を倒したら金が入るなんて事をしないと……

あるいは自分のアイテムを売るなんて選択肢もあるが、レートが合わないとめんどくさい事になりそうなので却下

となると……

「なあ、誰かカジノの場所知らないか？」

……

……

……

そして今カジノの前にいる

中にはどんなゲームがあるかわからないが、LUCK255+聖なる守りの俺なら大抵のゲームで勝てるだろう

と、移動中に装備した聖なる守りを触りながら考える

「それにしてもよくカジノがあるなんてわかったわね」

ルイズがそうやってきた

「難しい話じゃない

これだけ人と物が行き来してるなら、娯楽施設を作ればそれが儲けになる

で、人間が好む娯楽ってのは大抵金か色だ」

「へえ……」

じゃ、ダーリン行きましょ」

キュルケが俺の腕に腕を絡ませカジノに入っていく

「あつ、ちよつと人の使い魔勝手に連れて行かないでよ！」

「……………」

ルイズとタバサも俺達に続く

中に入ると、ガードマンらしき男達に杖と武器を預けるように言われた

おそらく無用な争いを避ける処置なのだが、困った事に俺の携帯してる武器を全部預けようとすれば、大変な事になる

だから俺は吹雪の剣とルビスの剣と破壊の鉄球と王者の剣と隼の剣と……以下略を預けた

その時のガードマンのルイズ達の顔は凄い事になっていた

特にガードマンなんて途中で俺が武器を出すのを止めようとしたぐらいだ

……まあ、そんな経緯もあつたが無事にゲームエリアに入る事ができた

「ルイズ、とりあえず数エキューだけ貸してくれ
後で色つけて返すから」

「????」

よくわからないがとりあえず貸してくれるルイズ

「じゃあ、やりますか!」

そう言つて俺は最初のターゲットを漁りにいくのだった

第12章　そしてLUCKは285（後書き）

（偽）次回予告

ゲームを漁るナハト

そしてナハトは一つのゲームに目をつけた

そのゲームは負けると魂を奪われる闇のゲームだった……

次回、第13章　そして闇は牙を剥く

第13章　そしてここでも出禁になった（前書き）

書き直しました

以下、既に読んだ人向け

ええー…感想であまりにもアレ過ぎという言葉が多かった為、少し下げってみました

内容はあまり弄ってないので、読み直さなくてもいいかもしれませんが
ん

第13章　そしてここでも出禁になった

俺はルイズから借りた金をチップに替えた

丁度チップ10枚になったそれを手に持ち、最初のターゲットをルーレットにした

「ルーレットはカジノ側が有利」

珍しくタバサが喋ったかと思えば、そんな事を言う

「いいから黙って見てろって」

そう言つて俺はテーブルに着く

「さあ、まだまだ受け付けてるよー！
張った張った！」

……なんか色々違うね？

普通なら最初は様子見としてその卓流れを観るものなのだが、LUCK285の俺はそんな事しない

「赤の7にチップ10」

俺は全チップを1点賭けした

「ちよっ！？あんた!?!」

「はあっ!？」

「……!？」

もちろん驚いているのは連れの三人

俺は三人に黙って見てるとアイコンタクトして再び卓に目を移す

周りから見ればチップ10枚なんて大した額じゃないのだ

……まあ、手持ちのチップを全部1点賭けなんて普通は考えられないだろうけどな

そしてルーレットが回される……

コロコロ………カタン……

入った穴は……

「赤の7番!赤の7番です」

まあ、当然だな

「なっ!？」

あんた当たった……?」

ルイズは驚きと戸惑っている

「ダーリンすごい!」

キュルケは相変わらずだ

「……………」

タバサも無表情ではあるが、驚いているようだ

「さあ、まだまだこれからだ」

俺は配当の720枚のチップを受け取り、そう呟いた

~~~~~

SIDE〜タバサ〜

私は今までこんな強運な人を見た事がない

……いや、強運どころかこれは天に愛されてると言ってもいいぐらいだ

なんせ、最初のアレからずっと数字と色の1点に全チップ賭けを繰り返し、その全てに当てているのだ

そして彼は今3連勝して卓を離れた

ちなみに今のチップは3732480枚

最初の373248倍ものチップ数になっていた

今は重くて持ち運べないと言って、カートにチップを入れている

「あのディーラーの目付きが変わった

多分これ以上やってたらイカサマされて全部パアになってたかもしれないねえ」

彼はそう言うが、まだまだやるといった目をしている

「じゃあ、次はポーカーでもやるか」

「あ、あんたまだやるの!？」

「まあ、どうせまた勝てるだろうし」

……彼は本当に勝てそうだから怖い

そしてポーカーのスペースに着くといきなり卓の中に入ってカードをもらう

このポーカーのルールは普通にジョーカー1枚を含めた53枚のカードを用いて、5枚の手札から役を作るタイプのもので複雑なルールはない

カードのチェンジは1回までで、できた手札で客とディーラーの勝負となる

……だというのに彼は駆け引きなんて知らないといった風にチップをベッドしていく

しかもチラッと見えた手札にはそこそこ強い役があったのに、それを崩してだ

「オープン」

ディーラーの声でコールしていた客達はカードを見せていく

彼の手札は……

「……ブタ」

案の定役なしだ

今まで稼いだチップから考えれば大した出費ではないが、何故彼は役を崩した？何故無駄にベッドした？

「（俺のイメージを植え付けさせるんだよ）」

彼は私達にそう言った

イメージ？

よくわからなかったが、彼のベッドして負けるパターンを見ていく  
そして丁度10回負けた後、11回目になった所でようやくその意味を理解した

……………彼はギャンブルというものを知り過ぎている……………

彼の作戦に私はう思ってしまう程だった

通常ポーカー等の心理戦の絡むゲームは、相手のクセを読み、そこから揺さぶりかけて勝っていくものだ

だから、彼は自分はまだこのゲームに強くないように見せていたのだ

「ベット」

彼は配られたカードを見ずに、当然カードのチェンジもなしでそう言った

もちろん周りは怪訝な顔をするが、ディーラーにとってみれば金ツルなのでそのまま始める

「オープン」

そしてオープンされた手札を見て皆の目は見開かれる

彼の手札は……

「ストレートフラッシュだ」

もちろんこの中で彼の手札に勝てる役の人はいなかった……

……

……



……

「いや、稼いだね」

「あんたはやり過ぎよ」

最終的にチップの数は400万枚を超えたあたりでオーナーが出てきて土下座をしたのでカジノを出る事になった

エキュー換算して8000万エキューを超えた

……オーナー滅茶苦茶泣いてたけど、首吊ないか心配だ

「じゃあ、ほい

ルイズにこれ返す」

そう言つて彼はルイズに100万エキューを袋……というかケースに詰めて渡す

……返すつてまさか……？

「最初に金借りたる？

んで、ちゃんと色付けて返すつて約束しただろ？」

「……………え？」

その額は色じゃない

「これ少ないけど、お前らにも今日付き合ってもらってるお礼って事で」

そう言っただけ渡されるカバン

「ええ」と……ちなみに中身は何かしら？」

キルケがひきつって尋ねた

「10万エキュー程度だよ  
さ、武器屋行こうぜ」

そう彼は何でもない事のように言ったが、カジノを丸々一っ半日程で潰し、その金を軽々しく配っているのだ

私は彼を本気で怖くなっていた

~~~~~

SIDE ナハト

……多分あのカジノ潰れたな

自分でやっというてアレだが、流石にやり過ぎたとは思った

まあ、運が悪かったと思って諦めてほしい

俺達はルイズの案内の元、武器屋まで来た

さて俺の満足するような品はあるのかなね……

~~~~~

SIDE ~? ? ? ~

某日某所

彼女は再び魔物の群れに囲まれていた

だが、今回は前の時の少女のような印象はなく、ただ一人の武人

そして、少女は前のようにイタズラに狂気を放つのではなく、自分の目標にただ突き進むような目をしていた

また、今回は魔物のレベルも違っていた

前回の魔物がレベル10程度とすれば、今少女を囲っている魔物のレベルは40といったところだろう

前よりもさらに禍々しい殺気を放ち、今にでも少女に飛び掛かるかのようだ

「今はもつとにかく時間が惜しい」

彼女の右手には触れるモノ全てを破壊する鉄球……破壊の鉄球が握られていた

「1分1秒たりともムダにはできない」

そして彼女は左手を魔物達に突き出し……

「さっさと私の経験値イケニエとなれ……………イオナズン　！！」

少女は前方からの魔物に大爆発呪文を唱え、それを合図にしたかのように四方から迫る魔物を破壊の鉄球で薙いでいく

ものの数分とかからずに辺りは『魔物だったモノ』で埋め着くされた

「……………あんまり経験値が入ってない」

だが、少女はその結果を不満のようだ

「はぐれでも狩りに行くかな……………」

少女の呟きは誰に聞かれるともなく、空気の中に溶けていった

……………だが、今の彼女はもう既に憧れであり目標であり、そして……初恋の彼と同等に近い能力チカラを持っていたのだが、それに彼女はまだ気付いていなかった

何故なら彼は……………

ナハトは彼女にとっての永遠の王子様なのだから

### 第13章　そしてここでも出禁になった（後書き）

このぐらいでどうでしょうか？

多分前よりかはよくなったような気がしない事もないかと思われた  
ります

ちなみに作者はエキュールGとして考え、1チップ＝20エキュール  
として換算しています

番外章   そして彼女は伝説と出逢った〜前編〜（前書き）

ああ〜  
…

第13章はまあ、色々すみませんです

この章は番外章となっており、ナハトの子供の頃の話です

ここであの謎の少女の名前が明らかになります

番外章　そして彼女は伝説と出逢った　前編

俺は夢を見ていた

もう8年近くも前の頃だ

俺がまだ10才になってすぐ……あの頃は俺にケンカを売ってきた  
バカ共をシメて、親分気分に浸ってた

そんな、懐かしい頃の夢だ

……

……

……

「最近盗賊の動きが活発になってきたらしいのよ」

「まあ！

オルテガさんがいなくなっここも物騒になっちゃったわね……」

近所のおばさん達のそんな会話が聞こえる

『オルテガ』



俺が産まれてすぐに魔王討伐の旅に出て、未だ帰ってこない俺の父親  
俺は奴の顔なんて覚えてないし、帰ってこなくても別にいいと思っ  
てる

マザコンでも強がりでも何でもなく、本気でそう思ってる

なんで俺が顔も知らない親父の事を思う必要がある？

そう思いながら、おばさん達の会横を切っていつも遊んでいる広場  
に行く

「じゃあ、今日は何やる？」

俺はいつものように皆に聞く

この場合、大抵やる事はイタズラだ

イタズラといってもやり過ぎないように気を付けないと、説教される

だから、俺達はそのギリギリでイタズラするようにしている

「昨日新しい空き地見付けたから、そこで遊ばない？」

「いいんじゃないか？」

じゃあ、ボールでも持っていくか」

そうして俺達は町を出てしばらくの所にある空き地にやってきた

「さて……………何やんの？」

「さあ？」

「何でもいいよ」

……相変わらず行き当たりばったりの連中だ

「じゃあ、ボール当て鬼ごっこでよくね？」

誰かがそう言つて、今日はボール当て鬼ごっこになった

「くらえ！消える魔球！」

「ナハトのはマジで消えるから止めれ！」

……ちっ

ホントに消えるワケじゃなくて、ボールが速過ぎて誰も反応できないだけなのに

……とまあ、こんな感じでいつものように遊んでいた時、

「た、助けてーっ！！」

一人の少女が空き地に……というより俺達に走ってきた

どうやら助けてほしいようだが、何から逃げてるのかと少女の後方を見てみると、そこにいたのは剣や斧を持った男達だった

野盗か？

それを確認した俺達は二手に別れた

「作戦OOEだ！」

作戦OOEとは

俺を

罠に

エスケープしろ

だ

これは街の外で遊ぶ時に決めたもので、何かあってから逃げるのは間に合わない

だから、俺達は少しでも危険のある場所で遊ぶ時はその危険に対処できるように、予め避難方法を考えていたのだ

ちなみになんで俺が罠役になるのかは、俺が一番逃げたりとかできるからだ

もちろん場合によっては俺以外が罠になる事もある

そして今回は俺ともう何人かを罠として野盗達を足止めし、残りの何人かで女の子をエスケープさせる

つまり、

一方は女の子を連れて城に

一方は野盗達の時間稼ぎに

俺はもちろん後者だ

「おいガキ共

俺ら刃物持つてんのよ、刃物

だからさっさとあの女の子こっちに渡してくれりゃ、痛い目みないで済むのよ」

「理由はわからんが、小さい女の子を数人がかりで追い回すようなロリコンの言う事は信用しない事にしてるんだ」

「そつだそつだ」

「あの女の子とは俺がフラグ立てるんだ！」

俺に続いて他の皆も同じ意見のようだ

……若干わけわからん事言ってる奴もいたが、まあ、やる事は同じだからいいか

「はあ……しよーがねえ

おい、やるぞ」

「おう」

野盗達も俺達が引く気がないとわかったのだろう

それぞれ得物を構えた

こっちは子供のみの5人

対して、あつちは3人とはいえ武器を持った野盗

こっちが圧倒的に不利である

でも俺は負ける気がしなかった

何故なら奴らは俺達の事を舐めている

こっちはもう一方の奴ら城に着くまで時間を稼げばいいのだ

そして俺はそれだけの時間を稼げるカードを持っている

「おいロリコン共！」

「誰がロリコンだ！」

俺達はただあの女の子を好事家達に売って稼ぐ商売しとんじゃ！  
ロリコンはその好事家達だろうが！」

……あんまり変わんねえじゃねえか

「うるせえよ

大の大人が数人がかりで少女追っ掛け回してるの見たら、あんたら  
がロリコンじゃねえか」

「黙れクソガキ共！」

俺達はどっちかってえと、大人の魅力溢れる女豹のような女性が好きなんだよ！」

「あ、あのアニキ？」

俺はどっちかというツルペタ幼女が好きなんだけど……」

まだ10才前後のガキの前で自分達の性癖を暴露する大人達

……正直ドン引きだった……

「ま、まあ、人の嗜好はそれぞれって事でいいじゃないですか」

しかも俺の隣にいた友人にフォローされる始末

………最悪だ

「つーか、あんたらがこうやって性癖暴露してる間にも、俺の連れがあの子連れてアリアハンの城に向かってるんだが、いいのか？」

俺がそう親切にも教えてやると

「なっ！？」

まさか時間稼ぎか！？

侮れねえガキ共だ……

おい、こいつらさっさと片付けて行くぞ」

「へい！」

もちろんこうなるのもわかってて教えてやったのだ

「まあ、慌てるな早漏共  
そんなあんたらにいい事教えてやるから」

そう言つて今にも飛び掛かりそうだった野盗達を押し留める

「あんたらも知つてるとは思うが、アリアハンの勇者といえばオル  
テガだ」

「ああ？」

野盗達は意味がわからないといった様子

「まあ最後まで聞いていけつて  
で、その勇者オルテガには一人の息子がいる」

「で、お前がそのガキとでも言うのか？」

「まあ、そうなんだが、それだけじゃない  
あんたらがロリコンの好事家達にあの少女を売るよりも、アリアハ  
ンの勇者の息子を人質にしてアリアハンの王から身代金を要求した  
方がメリットあるんじゃないのか？」

つまり俺という餌をぶら下げて時間を稼ぐ

あの手の輩は刹那的な利益しか考えないから、目の前により旨そう  
な餌を見せれば興味は自然とそっちに向く

で、その間に女の子の保護と城からの大人の兵士を待てばいい

問題はその待つ間、俺が連中から逃げきらなければいけない事だ

「なるほどな……」

確かに今から追い掛けても捕まらないだろうな……

じゃあ、そうさせてもらうか」

……よし、釣れた

「お前らも城に向かえ！」

「えっ、いやでもナハトさん置いてなんていけないッスよ！」

「俺一人の方が連中より逃げ回れるんだよ

それにもしかしたら女の子追っていくかもしれないだろ？

お前らにはそんな時のフォローをしてほしい」

俺がそう言つと、納得してくれたのか、大きく頷いた

「わかった！」

じゃあ、ナハトさんも気を付けて！」

……こうして俺、ナハトと野盗達の鬼ごっこが始まった

~~~~~

SIDE ????

私は逃げていた

いつものように村の近くで花摘をして、食べられそうな薬草を探していた時、突然後ろから体を掴まれた

何が起こったのかわからず、呆然としていた

だけど、すぐにこれが人拐いなのだと気付いて、腕を振りほどこうともがいた

でも、いくらもがいても相手は大人の男

こっちはまだ10才にもなっていない少女

腕力で勝てるわけがない

「ちっ、大人しくしてろ」

当然男達から逃げられずにそのまま何処かに連れていかれそうになった時、かすかに人の声が聞こえてきた

きつと聞こえたのは何かの奇跡のようなものだ

そのぐらいかすかで、意識してても聞こえないような声だった

「助けてえええーっ!!」

私はあらん限りの声で助けを求めた

男達はいきなり大きな声を出した私に一瞬隙を見せた

私はその一瞬弛んだ腕に噛みつき、拘束を逃れる

そのままかすかに人の声が聞こえた方向に走った

数百メートル程走った先に10人近くの男の子達がボールを使って遊んでいた

「た、助けてーっ!!」

そう叫んだ

今度こそあの男の子達に向かって……

……

……

……

「はっ!？」

「おお、目が覚めましたか」

気が付くと知らない天井、知らないベッドの上にいた

そして傍らには白衣の男性

きつと彼は医者さんなんだろうと、まだ覚醒しきつてない頭で思った

そして思い出す

「あ、あの……男の子達は？」

私の為に頑張ってくれた男の子達の事を

助けを求めた私が言うのもおかしい話だが、彼らは私と大して年齢が変わらなかった

私は助かる為とはいえ、そんな彼らを巻き込んでしまった

今更ながらに胸に罪悪感が込み上げてきた

「ああ、あのヤンチャ坊主共ならケガ一つなしでピンピンするよ……いつそケガの一つでもしてくれた方が大人しくなっただろうにね」

医者さんはそう言うが、私としてはとにかく安心した

「ああ、それとお嬢ちゃん」

「はい？」

「あんた覚悟しといた方がいいよ」

医者さんはいきなりそんな事を言ってきた

「えっ、何ですか？」

だが、私の質問は答えられる事はなかった

何故なら……

「起きたのかっ!？」

さっき助けてくれた少年達の中で、多分リーダーみたいな男の子が入ってきたからだ

「これこれ

ここは一応病室なんだから静かにしておくれよ」

「うつせえよ

カエルみてえな顔してるくせに」

言われてみると確かにカエルっぽい顔をしていた

「……………クスッ」

少し笑ってしまった

「てめえ笑ってる場合じゃねえぞ？

これからてめえの説教が始まるんだから」

……………えっ？

彼が何を言ってるのかわからなかった

「王様に聞いたぞ

てめえ、一人で村の外にいて、野盗に捕まったそうじゃんか」

城に逃げてきた時、ここアリアハンの王様が直接事情を聞いてきたので話した

多分それを聞いたのだろう

「え、ええ……」

「バカじゃねえのか！

いいか、いくら村の近くだろうと、魔物も出るかもしれないし、今回みたいには野盗に襲われるかもしれないんだぞ！？
その事を少しでも考えたのか？」

「え、ええつと……」

「そのぐらいちょっと考えればわかるだろうが！
なんでそんな事も考えらんねえ！」

言ってる事はわかったけど、なんでこんなに怒られるのかはわからなかった

「えつ、ええ！？

な、なんでそれで私が起こられてるの？」

「なんでもクソもねえよ」

私が少年に尋ねるとごく当たり前のように言われた

「危ない事をして周りに迷惑をかけた
それだけで皆に謝らないといけないだろうが！」

今思えば彼の言葉や理論は目茶苦茶だったと思う

でも、何故か当時の私にはそれがとても嬉しくて嬉しくて……

「……グスッ……ご、ごべんばさい……」

私は泣きながら謝っていた

……それが、当時まだお互いに名前も名乗っておらず、ただ激情に
任せた言葉一つで私の感情を動かし、そして私の今後の人生をも変
えた勇者の息子ナハトと、地図にすら載っていない村出身のしがな
い村少女こと私……サクラの出会いであった

番外章　そして彼女は伝説と出逢った／前編／（後書き）

という事で名前は『サクラ』になりました

決定理由は音的にいいカンジだったからです

この名前を出してくれたさん、ありがとうございます

では、後編に続きます

番外章　そして彼女は伝説と出逢った〜後編〜（前書き）

後編です

前編のあとがきの編集方法がわからず、ここで改めて書かせて頂きます

彼女の名前、サクラを考えてくださったシンゴさん、ありがとうございます

では、後編どうぞ

番外章　そして彼女は伝説と出逢った　後編

~~~~~

SIDE　サクラ

「で、お前なんて名前よ？」

彼は私が泣き止むのを待ってそう聞いてきた

「……サ、サクラ……です」

「サクラか

俺はナハト

一応あいつらのリーダー的なカンジ」

あいつらっていうのは多分他の男の子達の事だろう

「よし、じゃあ、サクラ」

「は、はい！」

いきなり名前を呼ばれて焦った声が出た

「お前今日から俺らの仲間になれ」

「はい？」

今度のは意味がわからないといった返事

「どういう事ですか？」

「どうもこうもねえよ

今度から外に出掛けたり遊んだりする時は俺らも一緒だっつってんの  
もちろん逆の時でも誘うからそのつもりでいろよ？」

いきなりの事でいくつもハテナが浮かんできたが、とりあえず一番  
聞きたい事を言ってみる

「どうして？」

「だーから！お前の頭の中身は空っぽなんですかー？ちゃんと中  
身詰まってますかー？」

「なっ！？」

それは流石に失礼ですよ！」

私は反論してみるが、彼の態度が変わる事はない

「お前、今日あんな事があつたんだぞ？」

今日はたまたま近くに俺らがいたからいいけど、次も近くに誰か  
いるとは限らねえだろ」

…… ああ……つまり彼は私の事を心配してくれてるんだ

そうわかれば、私は緊張していた肩を下ろし、彼にお礼の言葉を言  
った

「今日の事もそうだけど、ありがとうございます  
じゃあ、私もナハトさんの仲間に入れさせてもらっね」

「……………バーカ  
仲間ってのは言葉で言ってなるもんじゃねえよ」

そう顔を反らして照れ隠しのように言った

それから私はナハトさんのグループに入って、色んな所で遊んだ  
町や村近くの空き地だったり、お城に入ってイタズラしたり……

どれもこれも今までの私の生活からじゃ考えられないような経験だった

そして何をやるにしても常に仲間内で一番だった彼に私が惹かれていくのは自然の事だった

そしてある日、彼は勇者オルテガの息子だという事がわかった

オルテガといえば、この大陸で知らない人がいないくらいの有名人で、その息子がナハトさんだった

私はその事を知っても、大した感想は浮かばなかった

彼ならそのぐらいの血筋であっても、不思議じゃないと思っていたから

……でも現実には残酷だった

私は気にしてないし、彼も気にしなくていいと思っていた勇者の血筋……

彼が16才の誕生日にオルテガに変わって魔王を倒す旅に出る事になつていたのを知ったのは彼が16才になる前日の事だった……

「あつ、そういえば俺明日から旅に出るから、この面子で遊べるのはこれでラストになるわ」

……えっ？

「ああ、そういや明日だっけ？  
つまんなくなるな……」

「討伐するまで帰ってくるんじゃないぞ！」

皆は何を言ってるの？

「え、ちょ、ちょっと待って  
皆何言ってるの？」

「ああ、そういやサクラには言ってなかったっけ？  
つか、皆親とかから聞かされてるモンだと思ってたわ」

「聞いてないよ！

ねえ、一体どういう事なの？」

私の言葉の真剣さを感じとったのか、ナハトさんは一つ息を吐き出し、頭の後ろを片手でかきながら言った

「や、まあ、別に大した事じゃないから

要するに俺は勇者オルテガの後釜で、16才になったらナハトから『勇者ナハト』に生まれ変わるみたいなの？

まあ、なんつーかそんなカンジなんよ」

そんなっ！？

「そんなのおかしいじゃない！

なんでナハトさんがそんな事しなくちゃいけないんですかっ！

他にも優秀な戦士とか魔法使いはいるじゃないですか

どうしてナハトさんがそんな事しなくちゃいけないんですか……

私はまだナハトさんと皆と遊んでいたいのに……」

わかってる

これが私のワガママで、どうにもできない事だっていうのはわかってる

でも、頭では理解していても心が納得しない

「まあ、気持ちは嬉しいし、それはここにいる皆が同じ気持ちだってでもな、俺は籠の中で平穏な生活してって、その内使えなくなる羽なんかよりも、危険だらけで常に周りに気を張っていきやいけないって、でも自由に大空を羽ばたけるような羽が欲しいんだ」

そう言った彼の目は多分今までで一番輝いていた

「……………」それに……………」

そう彼は続けた

「それに男なら強くなりたいたいじゃねえか  
誰よりも、何よりも……………」な？

だからチョーシこいてる魔王つてのを俺がサクッと潰して世界一になつて帰ってくるから、そしたらまた皆で遊ぼうぜ？」

私はそれ以上何も言えなかった

ただただ彼が眩しくて、視線を下に向けるしかなかった

……………

SIDE ～ ナハト ～

15才最後の夜

そしてただの村人でいられる最後の夜

俺は考え事をしていた

これからの冒険の事ではない

サクラの事だ

昼間にはサクラにああ言ったが、それは理由の半分程でしかない

残りの半分はサクラが俺に依存し過ぎてる感があったからだ

あの日以来、サクラは俺らと遊ぶようになったが、同時に俺から離れなくなっていた

いや、それは少し言い方に語弊があるな

離れないんじゃないかと、俺に全て従っているような感じだ

何をするにしても俺の意見を一番に考え、常に俺の斜め後ろで待機していた

そしていつしかサクラは俺に依存するようになっていた

別にそれが悪い事だとは言わない……言わないが、それによって確実にサクラの行動範囲が狭くなった

しかも、良くも悪くも俺のせいだ

俺はできればサクラには自分の足で歩いていつてほしい

偉そうな事言っておきながら、俺はまだ籠の中の鳥で、外の世界を知らない

そんな俺についてきても、サクラは自分で羽ばたき方を知らないまま成長してしまう

俺は何だかんだ言いながら、結局はサクラに俺から自立してほしいのだと思う

誰への説明かはわからないが、サクラが俺に好意を持っているのはわかってるつもりだ

だけど俺はサクラの想いに応えられない

理由は俺がサクラを好きではないからだ

あ、いやまあ、友人としては好きではあるが、俺に頼り、俺に依存しているような女を俺は恋愛の対象としては見れない

俺はあくまで誰とでも対等でありたいのだ

それはサクラもあのバカ連中も王達も魔物も魔王でもだ

だから、俺はサクラを恋愛の対象としては見れないし、むしろ今からでも自立してほしいのだ

なのにあの昼間の件の後、俺はサクラにパーティーに入れてくれと頼まれた

もちろん俺の回答は却下の一択だったが、それにサクラは納得しなかった

サクラはしばらく色々言ってきたが、やがて諦めたのか今日は一緒に遊ばずに帰っていった



俺はその時時間が解決してくれるだろうと踏んでいたが、今になり不安が込み上げてきた

去り際のサクラの瞳が気になっていた

あのキラキラ輝いていた瞳……

今日最後に見たそれは黒く濁ったライトグリーンだった

「嫌な予感だけはよく当たるからな……」

そうベッドの上で呟くのだった

事実、後日ナハトが商人を必要とする時にその予感は当たるのだった

..... t o b e c o n t i n u e d

番外章　そして彼女は伝説と出逢った〜後編〜（後書き）

続くかはわかりません（苦笑）

でもとりあえずはこれでナハトとサクラの出会い編は終わりです

## 第14章　そして元伝説は伝説と出会った（前書き）

最近主人公の職業が勇者だったのかわからなくなってきた……

## 第14章　そして元伝説は伝説と出会った

「へい、らっしや……き、貴族の方ですかっ!？  
ウ、ウチは真つ当な商売させてもらってますぜ……?」

店に入るとこっち……正確にはルイズ達を見て狼狽える武器屋の店主  
「客よ」

それに対してルイズは短くそう答えて俺に振り向く

店主が何か言ってるがガンシカトだった

「あんたに任せていいんでしょ?」

「ああ、問題ない」

そう言っただけで俺も頷く

そして至るところにある武器を眺めながら店主の所に行く

「おい、とりあえずここで一番いい武器ってのはどれだ?」

「へい、ちょっとお待ちを」

そう言っただけで店主は奥に引っ込んでいった

「ちょっとあんた任せとけって言ったのに、どうして即刻聞くのよ

「!?」

「いいか、ルイズ  
世の中にはシャーカーと呼ばれる人種がいる」

「シャーカー?」

俺とルイズの会話に色々物色していたキュルケとタバサも参加してくる

俺は三人にアッサラムを思い出しながら話し始める

「シャーカーってのはつまり簡単に言えばぼったくりで商売するよ  
うな連中の事だ」

「つまりこの店主がそうだって言っのかしら?」

キュルケが聞いてくる

「そうとは言っていない」

ただ、俺は昔そのシャーカーの被害に遭った事がある

俺はそれからは新しい町の武器屋では必ず自分の目で目利きしてから  
買い物するようにしてきた

まあ、言ってみればこれは習慣のようなものだ」

……………あの時は俺も若かったな……………

まさか鉄の斧だけであんなにとられるなんてな……………

「だから、俺はここが普通のレートのお店なら普通に買い物して普通

に済ます予定だぜ?」

「もし普通のレートじゃなかったら?」

タバサが聞いてくる

「いい質問だ、タバサ

とりあえず俺の持つてる中でもかなり値の張る物を無理矢理売り付けて店を潰す」

『……………』

さっきのカジノでの一件があるから冗談だと笑い飛ばせない三人

まあ、事実半分本気だったしな

そんな話をしてたら奥から店主が戻ってきた

「お待たせしました!

こいつがこの店一番の剣でっさ

これはかのゲルマニアの……」

「おい、店主

俺はこの店で一番のモノを持ってこいって言ったんだぜ?

なんだこれは?

こいつはただの装飾剣じゃないのか?」

講釈たれ始めた店主を無視して言う

俺がそう言うのも、奴の見せてきた剣は派手なだけで決していいモ

ノだとは思えない

俺の世界で言えば黄金の爪みたいな感じだった

見た目派手なのに大した攻撃力もないとか

「俺は一番『いいやつ』と言ったんだぞ

一番『高そうなやつ』だなんて言ってない」

しかも実際あんまり高いとは思えないパチモンくせえし

「え、あ、いや、それは……」

「それとも何か？

店主にとってはこれが一番いい武器だとしても言うのか？

それか俺が武器の価値も何も知らない奴だと思ったのか？

ああん？言ってみろよコラ」

俺は言い訳しようとした店主に被せるように言った

自分でやっというてなんだが、ほとんどチンピラみたいだな、俺

「ちょ、ナハト！？」

ルイズが俺を止めようとするが、そんな事には構わない

とりあえずやる事だけはやる

後悔とか反省とか説教は後でやればいいと思う

「ケケケ……おいヒヨツ」のくせにわかってんじゃねえか」

すると、背後からそんな声が聞こえてきた

俺達四人は一斉に後ろを振り向くが誰もいない

「やいデル公！

てめ、お客様になんて口の聞き方だ！」

店主がそう叫ぶが俺は逆に店主に言ってやった

「ああ？

てめえこそ何言っただコノヤロウ

客を騙して商売しようとしやがっというてよお？」

「す、すみません……」

そうして店主を黙らせて、今度は声のした方に進む

「今の声はてめえか？」

俺は一振りの剣を手取る

中々に大きい剣だ

「おうともさ！

……ん？お？……おお！！

お前さん使い手か！」

なんか勝手に喋りだして勝手に自己完結したぞ？



「使い手つてのは知らねえが、俺は相当強いぞ?」

「へえ、インテリジェンスソードなんて珍しいわね」

いつの間にか背中にぴったりくっついてきたキュルケが呟く

「インテリジェンスソード?

なんだそりゃ?」

「誰が最初に創ったのかはわからないけど、魔法によって自我を持った道具よ」

ふーん、剣だからソードね

「おいヒヨッコ、俺を買っていけ!」

……中々に図々しい剣だったが、まあ、そこら辺は後々言っていけばいいか

「だが、断る」

俺はインテリジェンスソードにそう言った

「やいこのやろう!」

俺様を買わないとはどういう了見だ!」

別に買う以外にも物を手に入れる事はできる

「ちよっとお前黙ってる

……おいクソ店主！」

「ひい！？

な、なな何でしょう？」

完璧逃げ腰になっていた

「このインテリジェンスソード俺にくれ」

「へ、へえ

そいつは100エキューに……いえ、ダンナには50エキューで結構です」

「へえ、安いじゃない」

そう言つて財布を出したルイズを止める

俺は首を振つて店主に言う

「おいもう一回言わないとわからないのか？

誰も買うなんて一言も言つてないだろ？

俺が言つたのは『くれ』だ

別に買つてやつてもいいが、そしたら俺勢い余つて役所まで行つちやうかかもしれねえな」……

しかもそのままこの店の商売方法もゲロっちやうかかもしれねえな」……」

俺がそう独り言を呟くと店主は快く俺にインテリジェンスソード……デルフリンガー改めデルフを譲ってくれた

「あんたホントに勇者なんて職業だったの？  
さっきまでのあんたはどう控え目に見てもチンピラか盗賊とかにしか見えなかったわよ」

店を出た後、そうルイズが俺に言ってきた

「まあ、正義の勇者ってよりもチンピラ勇者のが色々盗みやすかったのは事実だったしな」

「盗んだのっ!？」

「正義の勇者だと罪悪感キツかったとは思っな」

「普通は誰でも罪悪感感じるわよっ!？」

「勇者って肩書きだけで大概の事は何も言われないしな」

「しかも常習っ!？」

「城にあった宝箱とかも貰えたし」

「それも奪ったの間違いじゃないのっ!？」

「つーか、生意気な事に場所によっては何も入れないなんて引っかけまで出てきてさ……  
めっちゃムカついたし」

「とうとう逆ギレしたっ!？」

「……………あんた達、仲良いわね……………」

俺とルイズの漫才的なやり取りを見て、キュルケがそんな感想をもちた

「まあ、なんせルイズが主で使い手が俺だからな」

「その言い回しは危ないからダメ」

……タバサに怒られた

まあ、そんな感じで俺は喋る剣を手に入れた

価値はまだ知らない

## 第14章　そして元伝説は伝説と出会った（後書き）

まさかの金を払わない客になりました

まあ、彼がもしダーマで転職できるとしたら間違いなく特殊職業としてチンピラとかヤクザが出てきそうですね……

## 第15章　そして皆と特訓する（前書き）

最近粘りつくような湿気と闘っています

じわりとした汗が中々に不快感指数を上げてくれます

早く梅雨終わって夏にならないかな……

まあ、夏になったらなっただ、暑いから早く冬になれと言いつうな  
んですけど……

## 第15章　そして皆と特訓する

~~~~~

SIDE ルイズ

まだ出会って数日だけど、それでも彼の事はよくわからない

本人曰く、魔法（呪文と言つらしい）は使えるけどメイジじゃなく、どちらかといえば武器を使う戦闘の方が得意だという

それにカジノでの一件、そしてさっきの武器屋の一件

勇者だったと言ってるが、本当にそうなのだろうか？

控え目に言っても勇者には見えない

それでもナハトのスペックが高い事は事実だ

魔法はあの夜に見せてもらった爆発魔法（実はそれで少し励みになったのは秘密だ）に、瞬間移動魔法

それにドットとはいえ、ギーシュのゴーレムを瞬殺するだけの戦闘力

そして契約した次の日から掃除洗濯をそつなくこなす家事スキル

使い魔としては文句ない

人間性も特に問題はなく（ただし茶目つ気が過ぎる事は多々ある）、
本当にスペックだけは完璧超人なのだ

それなのに、そこまで今までの生活でわかってるのに彼の事はよく
わからない

「……ねえ、なんでこんな事になってるのかしら？」

時間は夜、場所は前にナハトが爆発魔法で大惨事を巻き起こした広
場……は流石にあの騒ぎの後なので、宝物庫の裏にある広場

「ん？そりゃ鍛練に決まってるじゃん
それに新しい武器が手に入ったんだから性能の確認をするのは当然
の事だろ？」

わからない

本当に彼の言ってる事はたまに違う言葉なんじゃないかと思う

一応私なりにこの今の状況を確認してみる事にした

・武器屋を出た

・帰る前にと、ナハトが役所に行きたいと言った

・役所で手元に10万エキュ程残して手形に変えた（この時、役
人が何人が気絶した）

・そして寮に帰宅

・ナハトが鍛練したいと言って広場に行く

・私もそれについて行くと、そこに憎きツエルプストーとタバサがいた

・どうやら二人とも一緒に鍛練＋武器の性能の確認をするらしい
今こゝ

「な・ん・で！ツエルプストーがいるのかって聞いているのよ！」

私が！あんたのご主人様がツエルプストーと仲悪いのは知ってるで
しょ！

「……ああ！

お前とキュルケって仲悪いんだっけ？」

そんな事をさらりと言ったのけるナハト

「ねえ、そんなちんくりんなおチビさんは放っておいて、鍛練する
んでしょ？」

「流石は乳に栄養がいつてるツエルプストーは言う事が違うわね
まさか自分から的^{サンドバッグ}になってくれるなんてね」

「まあ、最近の子供は言う事が過激なのね」

「言わせておけばこの牛女は……！」

「まあ、いいじゃねえかよ

今はそんな事よりもさっさとやる事やろっぜ？」

ナハトにそう言われて、彼の方に振り向いた

「…………ええっ!?!」

思わずそんな声が出た

声こそ出していないが、ツエルプストーも驚きの顔をしている

「ん? どうした?」

「どうしたもこうしたもないわよ! どうしたのよ、それ!」

ナハトの後方にあつたはずの雑木林がある一定距離で、一面切り株畑になっていた

「ああ、これか?

これは武器の射程を確認してたんだよ」

そう言つて彼は右手を上げる

彼が手に持っていたのは先程買ったデルフという剣……ではなく、見た事もない武器だった

その武器は持つ部分の先に太い鎖があり、その鎖の先には「冗談のよ
うなゴツイ鉄球が付いていた

「……………」

「……………」

「……………何それ？」

長い沈黙の末、何とかその疑問をぶつける

「これは破壊の鉄球つつつて、こう見えて結構攻撃範囲広いんだぜ？」

こう見えても何も、見るからに範囲広そうじゃないの！

「まあ、威力に関しては実践しないとわからねえけどな」

そう言つてこっちを見るナハト………つていうかもしれない

「もしかして私達で試すつもり！？」

「冗談だよ」

……にしてもやっぱりおかしいな」

………そういう冗談は笑えないから今後は止めてほしい

「何がおかしいのよ？」

そもそもあんたの存在自体がおかしいのよ！

何でそんなバカでかい武器を軽々と片手で振り回せるのよ！

「いや、なんか攻撃範囲が若干広くなってる

他の武器でもデルフを使つても、やっぱり若干だけと範囲も威力も

強くなってる」

「は？」

言ってる意味がよくわからないわよ
わかるように説明しなさい」

「つまりだな、武器にはそれぞれ攻撃できる範囲があるわけだ」

「そんなの魔法にもあるわよ」

「いやいや、最後まで人の話聞けよ

武器を扱う人や使い方次第で武器の射程も多少は変わるんだが、今
俺はいつも使ってる他の剣と同じようにデルフを振るった

そしたら想定してたよりも多くの木が刈れた

デルフにそんな特殊な機構は見付からないし、不思議に思って他にも
吹雪の剣とか破壊の鉄球とかで試してみたら、全部想定以上の射
程だった」

「それで何か問題でもあるのかしら？」

ツエルプストーが興味深そうに聞いていく

「問題所が大問題だ！

戦闘において最も重要なのは速さと間合いだ
どんな強力な力も相手に触れられなければ、そんなもんだの威嚇
にすらならねえ

だから俺は新しい武器は必ず試しをして、その武器の正確な間合い
と、振った時の速度をみる」

つまりどういう事？

私はその辺の事が全くわからなかった

「結論としては俺に何かしらの影響が加わっていて、それによって俺の予想よりも武器の射程が上がったって事」

「え？それっていい事なんじゃないの？

何か問題あるの？」

「……………ルイズさんよ……………」

なんかナハト達から暖かい目を向けられた

「ここで問題になってるのは、俺に影響を与えている何かだ

もしこれが無害なモノなら俺はそれを計算して今まで通りに武器を振るえばいい

だが、有害なモノだった場合は最悪、俺が戦闘できなくなるかもしれない」

「大変じゃない！！」

「ここにきてようやく事の重大さを気付いたか」

ナハトはそう言って呆れの溜め息をついた

「まあ、どっちにしろ今すぐにはどうにもできないから、今日はそんな事よりも予定通り魔法の練習しようぜ」

そう言ってナハトは何かを取り出した

……でも、そんな事って……

「それは？」

タバサがその腕輪のような物について尋ねる

「こいつか？」

こいつは女神の腕輪っつー結構貴重なアイテムで、これを装備して数歩歩くだけでMP……まあ、魔法使うのに必要な精神的なものを回復してくれるんよ」

ナハトの世界にはそんな便利なアイテムまであるの？

「ただし、こいつは繰り返し使える分、回復量が少ないのが欠点だね」

そう言っつて、ナハトはまたも袋（本当にあの中はどうなっているのだろう？）から瞳のような模様が縦にいくつも並んだ帽子を取り出した

「……んで、これは不思議な帽子とって、これを被れば使う精神的なものを軽減できるアイテムだ

つまり、これで精神力を気にする必要なく魔法の練習ができるわけだ」

でも、それは魔法を使える人にとってはでしょう？

じゃあ、魔法の使えない爆発しか起こらない私はどうすればいいの？

爆発魔法の練習でもするの？

私はそんな気持ちを込めてナハトを目で問いかけた

「ん？……ああ、ルイズにはまた別メニューがあるから、俺と一緒にきてくれ

じゃあ、タバサとキュルケはそのアイテム使っていていいから、思うがままに練習してくれ」

そう言って私を二人から離れた所に連れてくる

「で、私はどんな練習をすればいいのかしら？」

「その前にルイズには確認したい事が何点がある」

「なによ」

「ルイズはどんな魔法を使っても爆発魔法になるんだよね？」

「……そうよ」

なんでそんな嫌な事をきいてくるのよ……

「そう不機嫌になんたって

俺のいた世界にいた魔法使いも種類があつて、使える魔法もそれぞれ違ってたんだ

まあ、例外もいたけど、ここでは省略な」

そんな事を言ってきたが、まだ話の意味がわからない

「もうちょつとわかりやすく言って」

「つまり、お前は普通の魔法使い……こっちだとメイジだっけ？
とにかくお前は必ずしも普通のメイジになる必要はないって事
爆発魔法専門のメイジだっていいじゃないか
それにこと攻撃に関してみれば火よりも爆発のが強力じゃんか」

ナハトにそう言われ、確かにそうだと思った

「しかもどういうわけかお前の爆発は当たる直前までは視認もできない

これだけの要素が揃ってんだから爆発魔法専門ってもいいと思った
んだが、ルイズは今のを踏まえてどう思うよ？」

今までどんな魔法も爆発し、失敗してきた

でも、それが実は失敗して爆発したんじゃないくて、成功が爆発だったら？

そう考えると、私の中にあつた自分の魔法に対する嫌な気持ちが少しずつ晴れていく気がした

だから、もしナハトのやり方で本当に『ゼロ』と呼ばれなくなるのなら

……私は……

「……私は……」

爆発魔法として魔法を成功させたいと思った

第15章　そして皆と特訓する（後書き）

次回、フーケ登場！

何やらせようかな

第16章

そして使い魔は追いかけた（前書き）

そろそろタイトルの『そして』シリーズに限界を感じてきた今日の
この頃

第16章　そして使い魔は追いかけた

さて、ルイズ達にはああ言ったけど、これについては早く何とかしないとマズイな……

俺はルイズがトイレに行くと言って抜けた時間を使って考える

確かに現状俺にとって有害な事は何一つない

むしろ何もやらないのに間合いを増やせた事に喜ぶべきだろう

だが、俺はそれに樂觀してはいけない

どんな些細な違和感も積み重なれば大きなひずみになる

そうなってからだと遅いのだ

……とは言いつつも、おおよその見当ぐらいならついているわけだが……

「おい、デルフ」

俺は今日新しく手に入れた喋る剣に声をかける

見た目はお世辞にも立派と言えない錆び付いた大きな剣

鍔に近い部品をカタカタ鳴らして呼び掛けに答える

「なんだい相棒？」

「お前の言ってた使い手つてのはもしかしてこの左手と関係してるのか？」

俺は左手甲にあるルーンをデルフに見せる（見えてるかはわからないが）

「なんでい、そんな事も知らなかったのか？
相棒のそのルーンはガンダールヴの印だ」

ガンダールヴ……？

「知らないな
何だそれは？」

「神の左手さね」

……余計わからなくなった

「ますますわからん……
害はあるのか？」

「害なんてあるはずないだろう
なんせそいつは相棒が主人を守る為に必要な力を与えてくれるものだ」

守るのに必要な力を与える？

「もしかして、それってもしかして俺が武器を持つと効果があると

か？」

「そうだね

ガンダールヴってのはあらゆる武器を使いこなし、魔法詠唱中の主を守るもんだからね」

やっぱり少し他の使い魔とは違うな

使い魔になって人語を解したりするといった事はルイズに聞いたが、武器を使いこなすなんて情報は知らない

まあ、武器を使うって事は少なくとも人形に近い姿じゃないといけないから、前例が少ないのかもしれない

そして一つ気になった事がある

他の使い魔は特に特別な呼び方がないのに俺はガンダールヴって特別な呼び方がある

つまりこれは俺が特別という事ともう一つ

『ルイズも実は他と違う特別な何かなのかもしれない』

という事だ

「デルフ」

「今度は何だい？」

「ガンダールヴが使い魔の時、そのメイジは何か特別なもんがある

のか？」

「あるよ」

あっさりとデルフは言った

「教えてくれるか？」

もう俺の興味は最初の俺の体に関する事から、ガンダールヴ、そしてルイズの事に移っていた

「あの貴族の娘っ子は担い手だよ」

またわからない単語が出てきた

「担い手ってのは？」

「『虚無』の事さね」

虚無って何だ？

そう質問をしようとした時、ルイズが戻ってきた

何となくこの話題はルイズ達には聞かれたらいけないような気がした

「ごめんね

じゃあ、早速練習しましょう」

ルイズの魔法は爆発しかない

俺はそれが虚無と関係あるような気がした

「よしやるか

じゃあ、とりあえずこいつに向けて魔法を撃ってみてくれ」

そう言つて俺は魔法の盾を建物の壁に立て掛けた

「……本当に今でもその袋の構造が知りたいわよ」

「気にしたら負けだ」

そしてルイズの魔法特訓が始まった

「まずは自分がどれだけ魔法を撃てるのかを調べる
あの盾狙つて自分が限界だと思つまで撃つてくれ」

「その盾は？」

「魔法の威力を軽減する効果がある盾だ
まあ、こんなのいくつもあるから気にしないで撃ちまくっていいぞ
？」

「いくつもあるって……」

まあ、いいわ

どうせ爆発するなら何でもいいわよね

……
ファイアーボール」

ボンッ！

ルイズがおそらく火関係の魔法を唱える……が、残念ながら爆発し

か起こらない

……しかも建物の壁が

「……ルイズ、お前って奴は……」

「ち、ちち違うのよ!？」

これはちよつとした手違いつてもので、決して狙いが逸れたとかそういう事じゃないのよ!」

ルイズには墓穴を掘るとい言葉勉強してほしい

「まあ、手違いだろうが何だろうが俺の知った事じゃないが、アレはあのままでいいのか?」

俺が指を差した方向をルイズが見る

そこにはルイズの魔法によって壁にヒビが入っていた

「……………ま、まあ、誰かが気付いて何とかしてくれるわよ……………多分きつと」

随分と他人任せだった……

さて、じゃあ、アレどうしようかと考え始めた時、それはやってきた

「なっ、何よあれ!」

ルイズが驚きの声を上げる

それは動く石像を上回る程の巨体で、まるで俺達の事なんて眼中にないかのように現れた

「ゴーレムよ！」

ゴーレムの巨体に気付いたのかキュルケがそう言いながらやってきた
そしてすぐに魔法を唱えた

「ファイアーボール」

キュルケの放った魔法はさっきのルイズのそれと違ってしっかり目標に当たった

だが効いているようには見えなかった

「フーケ」

一緒にやってきたタバサが呟く

「フーケ？」

「今巷を騒がせてる盗人よ」

ルイズが答える

言われてゴーレムを見るとその答えがよくわかった

ゴーレムの上には全身を黒いローブで覆った何者かがいた

大胆にもそのゴーレムは壁をその大きな腕で殴りつけた

「随分大胆な盗人だな」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！」

そうルイズが言ってゴーレムに杖を向ける

「ファイアーボール」

そしてルイズもそう唱えるが見当違いの場所に着弾爆発する

そうこうしてる内にゴーレムは壁を破壊し、ゴーレムの上に乗っていた何者かが壁の穴に入っていく

「あの位置は……宝物庫!？」

「お宝盗み放題だな」

「いいから捕まえるわよ」

「手遅れだって」

「何がよ!？」

「だってもう何か持ってでてきたし」

そう、もうフーケは宝物庫から何かお宝を持ってゴーレムの上に乗っていた

「あんたの魔法ならあのぐらい何とかできるでしょ？」

きつとあの時のイオラの事を言ってるんだろうが、あれは今は使えない

「できるけど使えない」

「何だよ！」

ルイズが突っ掛かってくるが俺は冷静に言う

「今はキュルケがいる」

できるだけ呪文が使える事はバラしたくない

……まあ、もうタバサとシエスタにはバレちまったんだが

「そんな事言ってる間に逃げちゃうでしょうが！」

「んな事わかってるよ

でも、別に今捕まえなくてもいいだろ？」

「……………どういう事？」

「だから、俺が今から後尾行して捕まえとくから、お前はキュルケとタバサ連れて誰か人呼んでこい」

「あんたがフーケを？」

無理に決まってるでしょ！

相手はトライアングル…もしかしたらスクエアクラスのメイジなの

よ？

あんたが強いのはわかってるけど、流石にスクエアには勝てないわよ」

「なんだそのトライアングルとかスクエアって？」

「系統魔法を足せる数よ

トライアングルなら三つ、スクエアなら四つ足せるのよ
ちなみにあんたがこないだぶっ飛ばしたギーシュは一つしか足せないドット」

「……ほう……じゃあ、俺がフーケを捕まえてきたら俺に対する態度を改善しろよ？」

「……本当に勝てるの？」

「そのスクエアってのがどのぐらい凄いのかはまだちょっとわからないが、数百人単位いないと俺には勝てないぜ？」

「じゃあ、私も行くわ！」

「なんでそこでお前まで行く事になってるんだよ」

「使い魔が敵と闘うのに主人たる私が行かないわけはいかないでしょ？」

……意味わからん

「却下だ」

「なんでよ!」

「場合によっては俺はフーケを殺すから」

「……………え?」

それまでポンポン言葉のキャッチボールをしていたのに、俺の放った一言でそれが止まる

「いいかルイズ

俺も勇者だった頃は盗みはした

だけどな、俺がその辺の盗人と違うのは、その盗んだ物を使って世界を救ってる事だ

つまり俺は色々盗んだが、それによって盗まれた奴らの世界を魔王から助けた、いわば盗んだ分以上のモノを返してやったんだ
盗み自体が許されない行為だったとしても、結果俺が一番割に合わない立場だったから周りは何も言ってこなかった

だから、俺は俺とは逆の自分の快樂の為だけに人を殺し、あるいは盗みをする連中は許さない
場合によっては殺す事もいとわない」

……カンダタは、まあ、案外悪い奴じゃなかったからな
ちなみにもうフーケのゴーレムは見えなくなっていた

「俺が人を殺す所を見たいんならついてきてもいい
だけど、それが無理なら止めとけ」

俺はそこまで言って、ルイズの様子を見る

「……………」

ルイズは何を言えずに俯いているだけ

俺はそのまま踵を返し、フーケを追う事にした

第16章　そして使い魔は追いかけた（後書き）

フーケちょっぴりでしたね……

次回には会話部分も入るのでフーケファンの皆さん、もう少々お待ちくださいませ

第17章　そして盗賊は勇者と組んだ（前書き）

マチルダの口調ってこんな感じでよかったっけかな……？

第17章　そして盗賊は勇者と組んだ

俺は見えなくなったフーケを追った

ルーラみたいな魔法もアイテムもないらしいから、そんなに遠くには行っていないと思う

30分程走った辺りで馬に乗ったフーケを発見した

俺はフーケを確認すると消え去り草を食べて姿を消した

そのまま気付かれないように尾行する

~~~~~

SIDEフーケ

よしよし……これでようやくあの変態セクハラ爺とも、しつこく食事に誘ってくる禿げオヤジともおさらばだ

……まあ、あのハゲは少しは役に立ったけど

でもいくら宝物庫が魔法には強く物理的には脆いと言っても、そんなに強い構造だったからやっぱりハゲもそんなには使えなかったわね

「じゃあ、お宝さんとご対面といきましょうか」

あたしは予め確保していた小屋に着くと、そう言って『炎の杖』と呼ばれているお宝を見る為に包みを外していった

見た目はドラゴンを象った像が杖の先についている以外はわりと普通の何処にでもあるような杖だった

「どの辺が炎の杖なんだろうね  
まさかドラゴンの口から火が出るとかなのかしら？」

振ったり色々試してみるが全くわからない

「……………はあゝ…  
困ったねえ……………」

使用法がわからないと売れないってのに、全く見当がつかないなんてさ……………」

今月はまだ足りるにしても来月はテファに送る分が足りないじゃないのさ……………」

何をしてても効果ない炎の杖に業を煮やし、使えそうな人間を探すしかないと考えた

「……………魔法学院なら誰かしら使えるのもいるでしょう」

そう呟いて、炎の杖を机において椅子から立った瞬間、

「悪いが、そいつを使えるのは俺しかないぜ？」

背後からそう聞こえてきた

「だ、誰っ！？」

咄嗟に杖を抜き声のした方に向けるが、誰もそこにはいない

もちろんこの辺りには人気がないのは確認済みだから、誰かが様子を見にくるなんてほとんどありえない

……………カタッ

「！――」

またもや背後で物音がしたので後ろ……………つまり机の方を振り向く

「なっ……………！？」

が、そこには信じられない事に炎の杖が宙に浮いていた

そしてその周りに段々と人の形が浮き上がってきた

「どうした？」

何か有り得ないものでも見たような顔してるぞ？」

そして透けていた体は次第にしっかりと実体を持っていた

そして完全に実体を持った姿は17か18才程の少年だった

「お、お前は誰だ!？」

あたしは今までにない程の焦りと危機感を感じていた

分身を作りだす魔法なら知ってるが、自身の姿を消す魔法なんて聞いた事がない

仮にあつたとしても風のスクエアクラスの魔法であるのは明確

となると、トライアングルであるあたしには正面からやり合うのは分が悪い

そもそも彼は人であるのかも怪しい

「ん?……ああ、そんなに警戒すんなって

別に今すぐ危害加えようってんじゃないんだから

ちよつち巷を騒がせてる盗賊フーケとお話したいと思っただけさね」

そう彼は言つて、あたしの丁度対面にある椅子に座る

「まだあたしの質問に答えてもらってないのだけど?」

「俺が何者かつて?

そんな大層な者じゃないけど、強いて名乗るなら、ルイズの……ラ・ヴァリエールの使い魔やつてる」

ヴァリエール?

ヴァリエールっていえば二年の落ちこぼれじゃなかったかい？

確かサモンサーヴァントで平民を召喚したと聞いたけど、彼がその平民か？

「そーいうフーケ、お前はどっかで見た事あるぞ？  
確か学院長の秘書的な女じゃなかったか？」

「あら、知ってるのかしら？」

「たまたま見掛けただけだ  
それよりも盗賊が学院長秘書なんてね……  
一体どんな理由なのか聞いてもいいかな？」

彼の口調はあくまで穏やかだが、有無を言わさぬ迫力があつた  
だが、こつちにも『土くれのフーケ』としてのプライドがある

こんな子供一人に圧されるわけにはいかない

「さあ、何でもいいんじゃない？  
別にあんたにそんな事教える義理も義務もないだろ？」

あたしはこの時少し余裕が出てきていた

相手がメイジではなく平民の少年であつた事、そして彼は剣を持っているがこの距離からなら確実に魔法の方が速く攻撃できるという事に

だから、最初のあの何もない所からいきなり現れた事なんて忘れて

いた

「はぁ……おいフーケ

俺は話せと命令してんだ

あんま手間かけせんじゃねえぞ？」

「あら？」

あんたこそ今の立場わかってるのかしら？

平民ごときのあんたがメイジたるあたしに命令なんて、命が惜しくないのかしら？」

「……これだから貴族とか威張ってる奴は嫌いなんだよ」

あんたの方がよっぽど威張ってるわよ

そう思い、少しお灸を据えてやろうかと魔法を唱えようとした時、彼は右の掌をあたしに向けた

「そこから絶対動くなよ？」

……………  
「ライデイン」

彼のその言葉の直後、何かが目の前を上から下へ轟音と共に駆け抜けた

「……………え？」

何が起きたのかよくわからなかった

わからなかったが、その何かによってあたしの杖は先端からおよそ半分がなくなっていて、杖を持っていた右手には鋭い痺れが走った

「……………え？」

そしてようやく我に返った時、あまりの痺れにもう使えなくなった杖を落とした

……………今あたしには何が起こったの？

~~~~~

S I D E 〱 ナハト 〱

フーケが早く喋らなくてめんどくせえからライディンかましてとりあえず黙らせた

反省も後悔もしていない

今フーケは俺の対面の椅子に座って俯いている

俺はフーケが落ち着いたのを待ってもう一回問い掛けた

「もう落ち着いたな？」

じゃあ、俺の質問に答える

そしたら俺もお前が今疑問に思ってる事を答えてやる」

「……………わかったよ」

俯きながらもそう返事をするフーケ

「まずは何が目的でこいつを盗んだんだ？」

あつ、一応言っておくがこの期に及んでウソつくと、どうなるか保証しねえぞ？」

俺は『雷の杖』を手に持って言った

「そんな事わかってるさ」

あたしにはあんたぐらいの年の妹みたいな娘がいてね、彼女はとある事情で人前に入る事ができなくて、ちよいと人里離れた所で暮らしてるのさ

で、そこにはその妹とは別に何らかの事情で帰る家のない子供達も住んでいるんだけど、さっきも言った通り一番年上の妹は人前にできなくて、他の子供達はまだ働けるだけの年齢じゃない
だから、あたしが外でこつやって稼いで仕送りしてるって事さ」

「事情はわかったが、お前貴族じゃないのか？
だったらこんな事しなくてもそれなりの収入があるんじゃないのか？」

少なくともルイズは結構小遣いもらってた気がしなくもなかったよ
うな気がする

「貴族といってもあんたの主みたく金持ち貴族もいれば貧乏貴族もいるのさ」

……それにあたしはもう貴族じゃないしね」

まるで俺の気持ちを読んだかのようにそう言うフーケ

「もう貴族じゃない？」

「あんたは自分の国の王に家族を差し出せと言われて差し出すかい？」

つまりそれを断ったから貴族の名を剥奪されたのだ

「……そうか

じゃあ、もう一ついいか？」

「構わないさ

どうせこっちには答えるしか選択肢なんてないんだろっからね」

と、少し自嘲するように呟くフーケ

「もし盗みなんて後ろめたい事しなくても、その妹さん達に今まで以上の仕送りができるとしたらどうする？」

「それは犯罪的な事は全くしないって事かい？」

「おう」

するとフーケは少し考え、やがて俺の目を見て言った

「……その話、詳しく聞こうじゃない」

「わかった

じゃあ、まずは俺の自己紹介をしようか
お前も聞きたかった事だろ？」

「そうだね

じゃあ、あんたは一体何者なんだい？」

「俺の名前はナハト、年は17才

そして俺はこの世界の人間じゃない」

「……どういう事だい？」

「俺は前にいた世界からこっちの世界に召喚された……っつーか、まあ、とりあえずこっちの世界にきた

証拠はさっきの呪文：魔法で十分だろ？」

「さっきのつて、あのあたしの杖を半分持ってたやつかい？
あれは何なんだい？」

「あれは俺の世界の呪文で、ライデインという呪文だ
属性は雷、効果範囲はそんなに広くないが、それなりに攻撃力のある
雷の魔法なんてこっちにはないだろ？」

「確かに雷に似た魔法はあるけど、雷の魔法はないね……」

「それに俺の世界の呪文は杖とか媒体を必要としない
さっきもそうだったろ？」

「……そういえばそうだったね
じゃあ、あんたは元の世界では魔法使いだったのかい？」

「んにゃ

俺の職業は一応勇者だったよ」

「勇者？」

勇者ってドラゴンとかと闘ったりしたりするやつかい？」

「まあ、こっちの勇者がどういうもんかは知らないが、多分それであってる

で、ここで言いたい事は俺の世界なら魔法使いじゃなくても魔法は使えるという事」

「へえ……」

で、あんたの事はわかったけど、さっき言ってた金を稼ぐ方法ってのは何だい？」

「労働力としてお前を買う」

俺はそう短く言った

「……は？」

「俺が望む時に望む働きをしてくれて事

まあ、そんなに難しい事は頼まないつもりだから」

「……つまりあたしを買う、と？」

「まあ、それだとニュアンス的に誤解しか生まないような言い方だけだな」

「それならあたしはこの話なかった事にしてもらおうよ

あたしにはあたしのプライドってもんがあるんだ

そんな勇者だか何だか知らないけど、高々少年風情に……」

「契約金は10万エキューだ」

「……え？」

「10万エキューでお前の労働力を買う
もう一回誤解のないように言っておくが、俺が買うのはあくまでお
前の労働力だ
元々体なんかに興味はない」

「つか、女には基本的に恐怖しか湧かないからな、誰かさんのせいで

「そうはつきり言われると女としての自信をなくしそうだね」

「まあ、そんなに気落ちすんなって
それにちゃんとした理由もあるからこそその契約だ」

「どんな理由だい？
それによつては考えなくもないよ」

「まず、俺はこの世界の人間じゃない事を秘密にしてる
そしてその秘密を知っているのはお前を含めて四人だけだ
だが、この四人の中で大人なのはフーケ、あんたしかいない
そしてもう一つ、俺はこの貴族絶対主義の封建制度が嫌いだ
だからこの社会を変えていくんだが、残念ながら俺は世間的には平
民で、しかもまだ子供とされる
そんな時にあんたに動いてほしい」

「確かにあたしも今の社会は好きじゃないけどさ、あんまりそうい
う事やっちゃうと、あんたにも矛先がいくんじゃないの？」

「だからそんな革命的な事じゃなくて、今平民向けの商売って少ないだろ？」

だから、少しでも平民向けの商業……売る側も買う側のも発展させていくんだよ」

「ああ、なるほどね

それなら政府も困る所か、大助かりだね
でもそんな事本当にできるのかい？」

「ああ、もちろん

その為にはあんたの協力が必要になってくるけどな？」

この時には、もうフーケの顔に先程までの暗いものはなくなっていた

「それこそもちろんだとも

……で、意地汚いと思われるかもしれないけど、契約金ってのはいつ払ってもらえるんだい？」

フーケはそう少し恥ずかしそうに言った

「いつでもいいぞ？」

……ほら、これ持って役所行ってヴァリエールの使い魔のナハトの使いつて言えばいつでも払ってもらえるから」

そう言つて俺は袋から本人証明書と小切手を取り出す

そして小切手にサインと10万エキューと書いてフーケに渡す

「……………今更なんだが、何で稼いだ金なんだい？」

あんたまだこっちに来てそんなに日が経ってないだろう?」

フーケが若干引きながら問い掛けてきた

「んー?これか?

これは今日街に行った時にカジノで荒稼ぎしたやつ
どーせはした金なんだから遠慮しないで使った方がいいだろう?」

「……一体どれだけ稼いだのさ?」

呆れながらにそう聞いてきたフーケに俺はさも当然とばかりに答えた

「カジノのオーナーに泣いて謝られるぐらい」

「……あんたやりすぎだよ……」

「まあ、金はいくらあっても困らないからな
じゃあ、とりあえず契約成立って事でいいよな?」

「そうね」

「じゃあ、あんたのホントの名前を教えてくださいかい?
フーケってのはどうせ偽名だろ?」

「……マチルダ……マチルダ・オブ・サウスゴータ
でも、学院ではロングビルと呼んでちょうだい」

おそらくマチルダってのは貴族だった時の名前なんだろう

「……わかった

これからよろしくな、マチルダ

じゃあ、これからフーケには『世間的に死んでもらう』から、ちょっと待っててくれ

んで、これが終わったら一緒に学院に戻ろうぜ」

そう言って俺は雷の杖を持ってマチルダと小屋の外に出た

そして小屋に向かって雷の杖を振るう

するとたちまち小屋は炎に包まれ、勢いよく燃え始めた

「……どうやったらそうなるんだい？」

マチルダがそう呟く

「んー、俺の世界の武器だから、俺じゃないと使えないんだと思うぞ？」

さて、それよりも戻りながらシナリオ説明するぞ？」

そう言って俺はマチルダと共に学院に戻り始めた

もう夜は明けかけていた

第18章　そして使い魔はぶっ飛ばした（前書き）

今回は原作全く関係ない、オリジナル展開です

第18章 そして使い魔はぶっ飛ばした

「さてじゃあ、『残念ながらフーケが死んでしまいました』のシナリオだけど……」

「……そのネーミングはどうなんだい？」

俺は帰りの道中、マチルダに今後の打ち合わせを話し始める

「とりあえず俺の予定してたのはシナリオの工程は7つで

1、フーケに追い付く

2、フーケが小屋に入っていく

3、一瞬の隙を突いて杖を取り上げフーケを捕獲

4、事情聴取

5、フーケの言い分があまりにも勝手だった為、『雷の杖』を持って小屋に火を放つ

6、帰り道で騒ぎを聞き付け、フーケを探しにきたマチルダとばったり合流

7、そのまま事情を話してマチルダと共に学院に戻る

……こんな感じでどうだ？」

「まあ、とりあえずはそれでいいわね

……それにしてもこれって雷の杖っていうのね」

「まあ、効果としてはベギラマだからどっちかというと、『閃光の杖』ってのが妥当だな」

なのに何故か雷の杖って名前だし、こっちだと炎の杖だもんな

不思議なもんだ

「ベギラマ？」

「ん？……ああ、俺の世界の呪文だよ
炎よりも閃光系の呪文なんだけど、まあ、効果はさっきの通り、あの
程度の範囲を炎が包むって感じだ」

「……あんたの世界にはこんなのが日常的に使われてるものなのかい？」

「いや、流石使える人は限られるよ
それに元々この手の杖ってか、武器も珍しいものだし」

そこまで話しているとマチルダが急に立ち止まる

「どした？」

「シッ！」

「……あれ見なさい」

静かにするようにジェスチャーをして、先の方を指差す

俺は言われたように静かにし、指差された前方を目を凝らして見てみる

「……ありや馬車か？」

「そうさね」

……しかもありやカンダータのグループだね
面倒な連中と出会ったもんだ」

何やら聞き慣れた名前が聞こえてきたぞ？

「カンダタ？」

「いや、カンダータ

あたしがいるからあんまり知名度はないけど、中々の悪名持つ連中
さ」

「具体的にはどんな事やってるんだ？」

「人拐い

んで、拐った連中を奴隷として売る」

フーケは俺の問い掛けにさもあっさりそう答えた

その言葉を聞いて、俺はふとあの時の事を思い出した

サクラが拐われそうになった時の事を

「特に若い女はゲスな貴族によく売れるからね

平民の女がいくらいなくなっただって、貴族には逆らえないから、結
局泣き寝入りさ

連中にとってみればいい商売さ

男も若ければ労働力になる事だし」

名前はカンダタに似てるが、やってる事はカンダタ以上にゲスだった

「……おい、学院帰る前にやる事ができた」

俺はマチルダに怒気を抑えずに言った

「正氣かい？」

確かにあたしから見てもゲスな連中だけど、連中もそれなりのバックボーンがあるからある程度好き勝手やってるのさ

もし連中に手を出したら、バックの貴族達が何を仕出かすかわからないよ？」

「なら、そのバックボーンごと消せばいい

……マチルダ、一ついい事教えといてやろう

俺はああいうゲスが一番許せねえんだよ

もちろん一緒になつてる貴族達もだ」

そう言った時にはもう俺の手にデルフが握られていた

「ふう……おい、相棒

扱いがあんまりじゃないか？

もつと俺に会話の機会をくれてもいいんじゃないのか？」

「へえ……インテリジェンスソードかい？

珍しい物持つてるじゃないか」

「まあ、アイテム収集が趣味ですから……

それとデルフ

別にお前を蔑ろにしていたわけじゃないからな？

単純に出番がなかったただけだ」

「それはそれでヒデエゼ相棒」

デルフの言葉で少し場の空気が弛んだ

「まあ、今はそんな事はどうでもいいんだよ
それよりもデルフ、初仕事だ」

「何と戦うんだ？」

「戦うんじゃない
ゲス野郎供を殺すんだ」

「殺すとはまた物騒だねえ」

言葉でこそそんな事を言ってるデルフだが、口調はかなりあつげら
かんとしている

「うるせえ
いいからいくぞ」

「ちょ、ちよつとナハト！？
もしかして正面からいくつもりかい？」

「そうだが？」

「いやいやいやいや
あんたが鬼強いのはわかるけど、流石に連中に正面からケンカ売
るのはどうかと思うよ？
それこそあたしにやっみたいに搦め手で……」

「なんでゲス野郎供相手に搦め手なんて使う必要がある？」

それとも何か？

俺じゃ、連中に正面からじゃ勝てないとしても？」

「そこまでは言わないけど、流石に怪我とかしちまうだろ？」

マチルダが俺の身を心配して言ってくれてるのはわかる

だが、所詮人間程度に手間取っているのであれば、俺は神竜はおろかバラモスにすら勝てなかっただろう

「俺の心配はいいから、ちょっとここで待っていてくれや」

俺はそう言って今度こそ飛び出した

まあ、飛び出したと言っても、ガンダールヴの力を解放し、星降る腕輪を装備してる俺ははぐれメタルのそれを凌ぐ

そして俺は走りながら拳大の小石を拾って馬車の車輪を狙って投げると動いていた馬車は急に四つある車輪の内の一つを破壊され、バランスを崩す

俺は馬車が止まるのを確認して、男達の目の前に現れる

男達は全部で五人

「お前らカンダータの一味でいいんだよな？」

一応形だけの確認をとっておく

「て、てめえは誰だ！」

いきなり色んな事が起きて混乱していた男達だったが、目の前にいる俺が只者じゃないと感じとったのか、すぐに立ち直って俺に逆に問い掛けてきた

「まずは俺の質問に答えるクス野郎
てめえらカンダータの一味でいいんだよね？」

再び俺は同じ質問をする

「だ、だったらどうした！
それよりてめえこそ一体何処のドイツだ？」

だが、連中は俺が剣を持つてゐる事を見て平民だと思ったのだろう
未だ動揺は残っていたが、さっきよりも幾分威勢がよくなった

まあ、そんな事はどうでもいい

連中がカンダータの一味という言葉質がとれた

だったら俺がやる事は一つ

「死ねクス野郎」

俺は一番近くにいたクスの首をデルフで跳ねた

「俺が何者かだって？
通りすがりの勇者だよ」

そう言つて、続いてもう一人を下から縦に真つ二つにする勢いで切る

「て、てめえこれ以上こつちに来るんじゃないやねえ！

こつちには貴族様が後ろについてるんだぞ！

今謝るなら許してやらない事もないぞ？」

事がここに及んで、ようやく連中も危機感を感じたのだろう

俺に震えながらそんな事を言つてきた

呆れた

この期に及んでまだそんな事を言うか……

「じゃあ、その貴族様とやらとカンデータを連れてこいよ

……纏めて潰してやるからよ」

俺はそう言つて足下に転がるクズだったものに掌を向ける

「ライディン」

クズだったものは突如降ってきた雷によって丸焦げになる

「……………」

「……………」

「……………」

その光景を見た残りの三人は茫然自失としていた

「お前らのバックにどんな貴族様がついてるかわからねえが、何の予備動作なしで魔法撃てる俺に勝てるようなら連れて来いよ」

見ると、連中は皆ガタガタ震えていた

その目には抵抗の意思は感じられない

「き、貴族様だったか!？」

お、俺達はボスに脅されて仕方無くやってただけでさ……」

おまけに自分が殺されそうになると命乞い

……まさにクズ野郎だな

俺は感情のままにこいつらを殺してやろうと思ったが、それは手段であって目的ではない

あくまで俺はこのクズ共とそのバックにいるゲス貴族の処刑が目的であり、ここでクズ共を処刑してしまえばバックボーンを突き止められなくなる

「……あゝあ……」

本当に殺しちまったんだね」

そうこうしてる内にマチルダが追い付いた

「なんだマチルダ

結局追い掛けてきたのか」

「まあ、そりゃ流れというやつさ
……で、こいつらどうするのさ？」

「感情だけで言えば殺したい

だが、そんな事をすればバックにいる貴族の事もカンダータの事も
わからなくなっちまう

だから今理性がそれになんとかブレーキをかけてる状態だ
だからできればこっちはマチルダにお願いしていいか？

俺がこっちだと、ちよつとした拍子にプチつとやっちまいそうだから」

「別に構わないけど、あんたは何やるんだい？」

「俺は馬車の中にいる奴らに事情を聞くさ
じゃあ、悪いけどそっちはよろしくな」
そう言っただけ俺は馬車の方に歩いていった

第18章　そして使い魔はぶっ飛ばした（後書き）

如何でしょうか？

ファンタジー系では奴隷とかやっぱり必要だと思って（作者の偏見？）、今回のお話でした

ゼロ魔にそういった要素を出してもいいかな？とは思いましたが、まあ、作者が書きたかったので許してほしいです

まあ、まだ奴隷にするか、拐われただけの状況かは決めてないのですが（苦笑）

希望があれば参考にしたいかと思えます

第19章　そして使い魔は再会する（前書き）

暑くてヤヴァイです

具体的には溶けます

比喩無しで溶けます

読者の皆様も熱中症等には注意してください

もう……もう二度とあの惨劇は繰り返してはならないのです……

第19章　そして使い魔は再会する

~~~~~

SIDEマチルダ

にしてもどうしてくれようかね、こいつら

正直、聞く事聞いたら用なしだから役所につき出すんだとは思っただけど……

「なあ、あんた達

今からあたしの質問にちゃんと答えてくれないと、またさっきのあいつにあんた達の相手をしてもらうから、ちゃんと答えてくれよ？」

あたしがそう言つと、面白いくらいに首を縦に振る

どうやらナハトの事がトラウマになってるみたいだね

「じゃあ、まずは……」

あたしはカンデータのアジトやバックにいる貴族の事を聞いていった

「な、なんでてめえがいるんだよ！？ぎゃーっ！？こつちくんない！近付くなっ！」

そしてその途中でナハトの悲鳴が聞こえた

あたしは慌ててナハトのいる馬車の方に向かった

「ど、どうしたんだい!？」

そこで見たのはナハトに裸同然の、申し訳程度に布切れを纏った少女がナハトに抱き付いているというものだった

~~~~~

SIDE 〱 サクラ 〱

ついに……

ついにここまで来た!

私はついにここまで来たんだ!

あの日、商人としてナハトさんにお別れをした日に言われた、

『てめえ、自分で決断できるようになんねえと、二度とパーティに入れてやんねえからな』

という言葉に私は最初悲しみに何もできなくなつた

でも、そこから逆に考えてみた

ナハトさんから自立して、自分で色々考えられるようになれば、ナハトさんの個人的なパートナーになれる、と

（サクラの個人的な見解であり、ナハトの意図していた意味とは異なります）

それから私は死に物狂いで自分の能力を上げた

まずは商人仲間からの伝で魔法の鍵を入手

でも、その魔法の鍵は出来が悪く、一回の使用で壊れてしまう物だった

だから、その一回を無駄にしない為に、転職できるようになったら
ダーマ神殿でまずは魔法使いに転職した

何故なら、魔法使いの呪文の中に アバカム というものがある

これは例外を除く全ての鍵を開ける事ができる呪文

これによって、ダーマ神殿に入る為に一々魔法の鍵を使用しないで済む

そして魔法使いの全呪文を覚えたら、盗賊に転職……と順々に必要な職業に転職していった

最後には遊び人から賢者に転職し、あとはひたすらにレベルアップに努めた

本来なら相当な時間がかかるものを、私は毎日の戦闘に効率化を計

った

その結果、かなり早い段階ではぐれメタルのいる地域に行く事ができた

そうしたら、後はひたすらはぐれ狩りをしていた

そうこうしている内にレベルは99になり、ステータスも木の実や種を使ってほぼカンスト状態までもってきた

そして船もラーミアもない世界を時に海を泳ぎ、時に高い山々を口ツククライミングで登って、とうとう神竜の元までやってきた

「あなたが神竜でいいのよね？」

私はやっと着いた事に少しの安堵と、これから始まる本番の前に緊張している気持ちをごちゃ混ぜにしつつ、目の前のドラゴンに問い掛けた

「確かにワシが神竜じゃ

おぬしは何か願い事があってここに来たのじゃろ？
ワシに勝てたら何でも一つ願いを叶えてやろう」

「ホントに何でも叶えてくれるんだね？」

私は確認をとる

「ああ、ただし、初回は35ターン以内で…」

私は確認をしたら、もう神竜の話は聞いてなかった

神竜が話してる途中で駆け出す

まずは神竜の目眩ましの為にイオナズンを唱える

そして私を見失った一瞬の隙を突いて、神竜の体に破壊の鉄球を巻き付け、空中にいた神竜を地面に文字通り引きずり下ろす

その勢いのまま神竜の目にドラゴンキラーを突き刺す

「ぎゃあああああ、っ!!」

神竜の断末魔のような叫びにも一瞥もくれずに、ヒヤダルコでドラゴンキラーごと凍らせる

そして幾分凍ってきた所で、ようやく私は神竜に話しかける

「ねえ、神竜？」

いくらあなたでも、このままこんなされ続けてたら死んじゃうでしょう？

私の望みを叶えてくれるなら、すぐにこの拘束を解いてあげるよ？」

だが、神竜はこっちの話を聞く事はおろか、拘束を解こうと必死になって暴れていた

流石にこのまま暴れ続けられると、拘束が解けるのも時間の問題だったので、私は自分にバイキルトをかけ、剥き出しの神竜の歯を力を込めて殴った

歯というのは意外に痛覚神経が通っていて、痛いものだ

神竜も例外ではなかったようで、その痛みにより一時暴れるのを一層強くしたが、しばらくするとぐったりとした

「もう一回だけ言うわよ？」

私の願いを叶えてくれるわよね？」

「……お、おぬしは一体何者なんだ？」

神竜はまだ元気があるのか、そんな事を言ってきた

「私？」

私はね、あなたに愛しい人をこの世界から消された、ただの美少女よ」

「自分で美少女とは……これは目を潰されて正解だったのかもしれない！」

生意気にもそんな皮肉を言ってくる神竜

確かにこないきなり不意打ちに近いやり方で拘束されてはそんな皮肉も口にしたくなるだろう

でも、今神竜の目の前にいるのは愛しい人の為ならば、どんな事でも平気でやるような少女なのだ

「……ふーん」

だから、目に刺しっぱなしのドラゴンキラーを決る事なんて、何とも思わないのだ

「えいつ」

「ぐっ……！？」

神竜のサクラとは対照的な声が漏れる

「私だって本当はこんな事したくないんだよ？」

神竜が早く私をナハトの所に飛ばしてくれればいいの」

「ナ、ナハト……？」

その名に神竜は覚えがあつた

というか、つい数日前までは毎日ここに通っていた勇者というより盗賊とかの方がしつくりくるような少年だ

「そう

覚えてるでしょう？」

あなたがどこか異世界に飛ばしちゃったナハト

私が愛してやまないナハト

私の永遠のパートナーになるナハト」

神竜にはこの少女の言ってる事が後半半分はわからなかったが、これ以上刺激しない為に何も言わなかった

だが、少女が最初に言っていた人物がナハトだとわかれば解決は容易だった

「ナハトが探し人なら最初からそう言え

なればワシも最初から協力的になつたじやろうに」

「あれ？」

私言つてなかつたっけ？

……まあ、いいよ、そんな事

で、私をナハトの所に連れて行つてくれるの？」

「それは構わないが、条件がある」

「条件？」

「うむ

ワシにも神同士の付き合いというものがある

ナハトに続いておぬしまで無条件で送つてしまつては、流石にあつちの神に悪い

……よつて、おぬしには縛りを二つ付ける

一つ、おぬしはあつちの世界で殺生をしてはならん

例外として、実力が伯仲していて尚且つ、相手がおぬしに殺意を持つている場合は可とする

二つ、あつちの世界に行った時、ナハトと会うまでは自らの意志で行動してはならん

その代わりにナハトとはすぐに会えるようにしてやるから少しは我慢してくれという事じゃ」

「条件はわかつた

もちろんその条件も飲むわ

だから、早く私をナハトのいる世界に飛ばして」

もう私の我慢も限界だつた

きつと欲しいものが後少しの所で手に入らなくなった時の焦燥感みたいなものだろうと思った

「……その前にこの拘束を解いてくれ
流石のワシもこの状態からでは何もできんなのだな」

「それもそうね」

私はそう言つてドラゴンキラーを抜き、神竜の体に巻き付いていた破壊の鉄球を取り除く

すると、神竜がブツブツと何かの呪文を唱え始め、神竜の傷がみるみる癒えていった

もちろんドラゴンキラーで刺された目もだ

「へえ、便利なものね」

「戦闘の度に回復しておかないと、次に来た挑戦者が有利になるではないか」

「まあ、確かにそうよね
じゃあ、早速私をナハトのいる世界に飛ばしてくれるかしら？」

「わかったわかった
最後に一つ聞いてもいいか？」

「何よ？
手短にしてよね？」

私は早く、もうそれは今すぐにもナハトに会いたい

「もうナハトの関係者はここにはこないよな？」

と、神竜は若干怯えながら言ってきた

「来ないんじゃないかしら？」

何でそんな事聞くの？」

逆に問い返すと神竜は凄じい嫌そうな顔をして言った

「……いや、もしかまだナハトの関係者が来るようならここを封鎖する事を考えなければいけなかったからな」

「えっ、なんで？」

「おぬし達のように数万回以上もここにやって来たり、不意討ちにこちらの動きを封じて脅すように願う事を言ってくる輩がいるからに決まっているからであろうが！」

どうやら神竜にとって私やナハトは迷惑極まりない挑戦者だったようだ

「そういう事なら安心していいと思うよ」

神竜は諦めたと言わんばかりの溜め息をはいて、また呪文を唱え始める

「最後にもう一回言っておくが、ちゃんと約束を守るのだぞ」

神竜がしつこいぐらいに確認してくる

「わかってるわよ」

そう言った直後、私の体は白い光に包まれた

.....

.....

.....

「で、こっちに來たらいつの間にかこの馬車の中にこんな格好でいたというわけなのです」

私はここに来るまでの経緯を愛しのナハトに抱きついたまま説明した

「.....まあ、どうせ神竜のせいだとは思ったから、その辺の下りはわりとどうでもいいんだが.....」

ナハトはそううんざりしたように言う

「なんで俺に抱きついたまま説明すんの？その必要ないよね？つか、離れろ！」

「きゃっ」

ナハトに乱暴されちゃった（乱暴に振り払われちゃったの意味）

「あ、あのおく、ナハト？
彼女知り合いなのかい？」

と、ちよつと幸せ気分浸っていたら、さつきから視界の端にチヨ口チヨ口映つてた女が私のナハトに話しかけてきた

「まあ、一応旧知の仲ではある
非常に嘆かわ…じゃない…非常に残念…でもなかった…非常に嬉しい事にな」

「……………ナハト、本音駄々漏れだよ
辛かったら私に愚痴でも何でも言つてきていいんだからね？」

「……………ありがとう」

何よあの女

私のナハトに色目使っちゃって（実際は使ってません）

「貴女、私のナハトとどういう関係？」

正妻としてここはしっかりと立場を教えてあげなければならない

「俺はお前のじゃねえ」

「細かい事はいいでしょ
で、貴女はナハトとはどういったご関係ですか？
場合によっては相応の事をしますので、あしからず」

「いや大した仲じゃないさ

ついさっき契約したばかりのビジネスパートナーって所さ」

ふーん……

「そう

私はナハトの妻でサクラっていいいます」

「だから誰が妻だ！

つか、いい加減その辺治してくれよ、頼むから」

「はあ… ナハトは困り顔も素敵」

だが、どうやらナハトの願いがサクラに届くのはまだまだ先になりそうだった

第19章　そして使い魔は再会する（後書き）

バイトに学校に卒研に執筆にゲームにネット巡回に……

いやいや、体も時間もいくらあっても足りないですよ

えっ？

削れる要素があるんじゃないかって？

そんな事はないですよ

第20章　そして最強コンビは誕生した（前書き）

やーもう文章量の調整が難しい

暑いから誰か作者に吹雪の剣を貸してください

え？ヒヤダルコ？

知りませんよ、そんなの

ただの氷でしょ？

第20章　そして最強コンビは誕生した

あのままあそこで話しても（主にサクラのせいで）先に進まないという事になり、とりあえず学院に戻る事になった

ちなみにカンダータグループの生き残りは学院に着いた時に、学院長が王宮の役員達に引き渡す手続きをして、連絡を受けてやってきた役員達に連行されていた

できれば俺が連中を尋問して、バックの貴族事纏めてギガデインかましてやりたかったが、まあ、餅は餅屋って事なんだろう

そして現在場所は学院長室、時刻は多分昼過ぎ、登場人物は俺、サクラ、マチルダ、ルイズ、タバサ、キュルケ、そしてこの部屋の主たる学院長とその他教師達

どうやらルイズ達はあの後学院長達に事情を説明し、俺が帰ってくるまで待つてもらったようだ

「では、説明してもらえるかね？」

学院長が俺に向かって言う

「どっから言えばいいんだ？」

「そうじゃの、じゃあ、フーケを追った辺りから頼もつかな
その前までの事は彼女達に聞いておるからの」

「りょーかい

んじゃ、ルイズ達に人を呼びに行ってもらって俺はフーケを追っかけて……」

俺は予めマチルダと決めていたシナリオを話した

………

………

………

「……んで、ロングビルと帰ってくる時にカンダータっつー人拐いと出会して、一戦交えたらたまたま知り合いがいて、連れてきたって感じた」

ちなみに他にも何人が同じように誘拐されてた人はいたが、そっちはそっちで面倒くさい事になっているので、割愛させてもらう

まあ、今は一旦王宮の方に保護されているから心配はいらないだろう

「……ふむ……報告ご苦労

しかし、今の話だとお主が一人でフーケを殺して、カンダータの一味を取り押さえたという風に聞こえるのだが？」

俺の話を聞いて頷いたジジイだったが、そんな事を言ってきた

……まあ、この世界の常識だと平民（と思われる）である俺には

不可能な事だろう

だが、ジジイの目には他の連中みたいな疑いの色の他にもっと違うニュアンスが読み取れた

「まあ、そういうことだ

疑うならフーケがいた小屋を見に行くといい

尤も、もうすでに燃え尽きて灰しか残ってないかもしれないけどな」

俺が黒い笑みを浮かべてそう言うと、その場にいた俺の素を知らない教師陣は何か恐ろしいものでも見るかのような目を向けてきた

「にわかには信じられんのう」

ジジイがそう言うと、他の教師陣も次々に色々言ってきた

「信じようが信じまいがそれはそちらの問題だろ？」

俺はホントの事しか言っていないんだから

何ならあんたら自身でホントかどうか体験してみるか？」

俺は冗談ではあるが、デルフの柄に手を伸ばす仕草をする

「ちよつとナハト！？」

ルイズが驚きの声を上げる

他にも俺と顔見知りの連中は声こそ出してなかったが、同じように驚きの表情を浮かべている

サクラだけニコニコしていた

「冗談だよ」

その一言で緊張の高まった部屋の空気が弛緩していく

だが、俺は見逃さなかった

俺が柄に手を伸ばした時、ジジイも最初に召喚された時にいたハゲも自分の杖に手を伸ばしていた事に

きつとこいつらはそれなりに戦場を潜ってきた猛者なのだろう

「……ふう……」

そういう質の悪い冗談は止めてくれ」

俺が冗談だと言った事で安心したジジイがそう言う

「いや、あんたらが先に失礼な事言っただからだろう？

つまり自業自得というワケだ

で、そろそろ本題に入ってもいいか？」

「本題？」

ジジイが聞いてくる

「ああ、本題だ

できればここだけの話にしておきたいんだが、いいか？」

「ふむ

その本題にもよるが、まあ、聞いてみよう」

「何、大した事じゃない

フーケを捕まえて宝を取り戻し、且つ、ついではいえカンダータの一味を捕まえた俺に対する報奨

とりあえずこれには10万エキューで手を打ってやる」

俺がそう言つと、この場にいたサクラとカジノの一件を知らない連中はとんでもない顔をした

「な、ななななんて額を提示してるんだ！

平民のくせに、黙って聞いていれば付け上がりやがつて！

学院長！こんな奴の言つ事、聞く必要がありません！」

教師の一人が激昂してそんな事を言つた

そして周りの教師陣もそれに吊られるように次々に同じような事を言い出した

平民のくせに、だと？

ルイズがその言葉にあちゃーって顔をし、マチルダが抑えてのジェスチャーをするが、もちろん俺は抑えるつもりはない

俺は吹雪の剣を抜いて、今喋った奴に向かって振るう

「なっ！？」

その声は誰が上げたものだろうか

見れば、俺を平民とバカにしたバカは胸元から下が氷付けになって

いた

「な、何だこれっ!？」

驚きに動揺しているバカの元に俺はツカツカ歩いていく

すると、俺とバカの間にはいた何人かの教師達がモーゼのように左右に割れていく

そして俺が目の前まで来ると、バカは何も言わなくなり、恐怖を堪えるような目で俺を見てきた

俺はジジイの方に向き、今しがた使用した吹雪の剣を柄を横にして軽く振りながら言った

「こいつは吹雪の剣といってな、魔法が使えない者でも使い方さえわかれば誰にでも疑似魔法が使える代物だ

フーケに盗まれた杖もこいつと同じようなもんだ

もつと言つと、サクラは色んな種類のアイテムを身体中に仕込んであるらしいから、ホントに魔法使いみたいに魔法使えるぞ」

後々面倒な勘違い（呪文が使えるのはホントだが）されない為に、俺は今後の事を考えて俺とサクラの事をそう説明しとく

まずは平民（と思われる）である俺が何故、魔法のようなものを使えるのかを説明しなければならない

「もちろん疑似だから、基本的に一種類しか使えない者

……まあ、バカな事を言うバカにはそれでも丁度いいがな」

そう言つて再びバカの方に振り返る

「おいこら、なんで俺がこんな事したかわかるか？」

俺の問い掛けにバカは泣きながら首をブンブンと横に振る

見た目から推定して俺の二倍以上の年齢だろうに情けない

「俺はてめえみたいに自分の権力使つて理不尽な事を言う奴が大嫌いなんだよ

だからといって、ただそれだけでこんな事したわけじゃないぞ？

俺は別にお前らの思想とかまで口出しするつもりはない

……つもりはないが、それを口に出して行動しやがるのはいただけねえ

そりゃ、あんた御貴族様がいらつしやるからこつちも生活できるのでしょうよ

でもな、そんなんちよつとした事で融通を利かせたり、軽いパシリ程度ならやつてやるのも吝かじゃないけど、やれ敬え、やれ崇めろ、仕舞いには平民のくせに生意気言つな、だああ？

ああ！？てめ、コラ！このまま体殴つて解体ぞ、ええコラコノヤロウ！？」

「ちよつ、ちよつとナハト！？ストップストップ！」

段々言葉に熱が入ってきた俺を見て流石にヤバイと思つたのかルイズが止めに入る

「さ、流石に皆ドン引きしてるから、ね？」

まあ、俺もこの場でやらかすなんて考えてないからここで止める

そして俺はもう一回ジジイの方を向いて勇者にあるまじき笑みを浮かべる

「さて、10万エキューなんて大金払えるならともかく、どうせ払えないんだろ？」

「……うむ」

「そこで交渉だ」

「交渉、とな？」

「ああ、10万エキューに比べれば大した事じゃない
まずは今回の手柄の半分以上をルイズ達にあげる事
理由は後で説明するから今は何も言わないでいてくれ
ルイズ達もだ」

何かを言いそうになったルイズにそう言って釘を刺す

「次に俺とサクラとルイズとジジイの四人だけで話し合いの場を設けてもらう

これはこの場が片付いたらすぐにだ
この二つだけだ

ほら、10万払うより楽なもんだろ？」

「その話し合いというのがちと怖いが、他に選択肢はないんじゃない？」

「まあ、他の選択肢は俺がガキのように駄々捏ねて、この場で暴れ

まくるってのしかねえな」

俺はそう言ってもう一回吹雪の剣をちらつかせる

「……では今の提案を飲もう」

ジジイが苦渋の選択といった風に頷く

「学院長!？」

周りの教師陣は驚きの声を上げるが、先程のバカの事を恐れて何も言わなくなる

「じゃが、聞いてもよいか？」

何故手柄をヴァリエール嬢達に譲るのじゃ？」

その質問にルイズ達も頷きながら俺の言葉を待っていた

「大した事じゃないさ

一つ、使い魔の功績は主人の功績なんだろ？」

俺は別に功績とかそんなんには興味ないから別にいいんだよ

もう一つはあいつみたいに『平民のくせに生意気だ』なんて言われるのが嫌だからな」

俺はそう言いながら未だに氷付けのバカを親指でクイツと指差す

「まあ、尤も？」

そんなバカがいたら今みたいに制裁加えていいんなら、話は変わるぞ？」

「……それは勘弁してくれ」

ジジイが疲れたように言う

「なんだ、それはそれで寂しいじゃないか」

俺はクククと笑いながら言った

「じゃあ、まあ、話は戻るが、今俺の言った事に異論はないな？

……よし、サクラ」

そこでようやくサクラを呼ぶ

「はい、何ですか？」

「軽くメラとかであのバカの氷を溶かしてやってくれ」

「はい

……メラゾー……」

「何唱えようとしてんだよ！？」

軽くつつつたる」

サクラはいきなりメラ系最上級呪文を唱えようとしやがった

「だって、ナハトに逆らう輩は消しちゃった方が世界の為になるんだよ？

本当はイオナズンでこちら一体巻き込んでよかったぐらいだよ？」

恐ろしい事をサラッと笑顔で言うサクラ

「……いや、もうホント頼むからこれ以上場を掻き回さないでくれよ……」

そう俺がげんなりしながら言つと渋々ながらメラで氷を溶かすサクラ

「おお！

そういえば今日はフリッグの舞踏会じゃった

ほれ、早く帰って目一杯のおめかししてくるんじゃぞ」

一応一通り話は終わり、ジジイのこの言葉をもつてこの場は解散する事になった

そして最後に、ここであつた『話し合い』の事は他言無用という事を皆に言い聞かせた

そしてここに残つたのは俺とサクラとルイズとジジイの四人

「おいジジイ

あの杖を何処で手に入れた？」

俺は皆の気配が部屋から遠ざかつたのを確認して言つた

本来ならアレは俺やサクラと同じようにこの世界ではイレギュラーなものだ

それがここにあるという事は何かしらの外的要因があるわけだ

俺とサクラではその要因が神竜だつたように

「……あれはな、ワシの命の恩人の形見なんじゃ

もう何十年も昔、ワシがまだ冒険者であつた頃、ワシはとある森でワイバーンに襲われたんじや

その時、彼がワイバーンの後ろからこの杖を向けて何事か呟き、ワイバーンの注意を引いてくれたのじや

そしてそのままワイバーンと揉みくちやになりワイバーンと刺し違えるかのように……」

ジジイはそのまま顔を伏せる

「……………」

なあ、そいつは何も言っていなかったのか？」

「いや、話す間もなくじゃったからのう」

ワイバーンって事は一応竜属だろ？

どのくらい強いかわからないが、そこそこ強いのはわかる

いくら何十年も昔の事とはいえ、過去にそんな強い奴がいて、行方不明になったなんて話は聞いた事がない

これじゃ、どんな要因でこっちに飛ばされたのかわからない

「一応他にも身に付けていた物があるがどうする？」

「じゃあ、後で見せてくれ

……で、まだ本題を話してなかったな

あんたもなんとなく気付いてるかもしれないが、俺はこの世界の間人じゃなくて異世界からきた

もちろんサクラもあんたの恩人とやらも多分な」

俺はいきなり本題をジジイに伝えた

ジジイは一瞬驚いた顔をしたが、あまり驚いているようには見えなかった

「これはまた面白い冗談を言うのう」

「惚けんなよジジイ

俺がこの世界の常識じゃ考えられないぐらいは思ってたんだろ？
じやなきや、さっきの吹雪の剣使った時にもっと驚いた顔してるはずだぜ？」

俺は惚けるジジイにそう言う

「えっ！？

その娘もあんたと同じ出身だったの？」

ルイズが空気を読まずにそんな事を言ってくる

……今はその話じゃないだろう

「ルイズ後でその話はしてやるから空気読んで黙ってる？」

で、俺が言いたいのは俺もサクラも呪文：こつちでいう魔法が使えるんだが、これは他言無用でお願いしたい」

「だったら言わなければよくないかの？」

確かにジジイの言う通りだろう

だが、俺は今からジジイにわかりかし無茶な交渉をしようとしている

だから、こつちもある程度腹割って話すのが筋だと思ったのだ

「これから個人的にジジイと交渉するから、これはその前払いだと思ってくれていい」

「……ワシ、おぬしと話すの嫌になってきたんじゃが……」

そりゃ嫌になるだろうよ

俺だってこんなに交渉吹っ掛けてくる奴なんか相手にしたくない

「まあ、そう言うな

今回はわりかし無茶と言っても、手続きとかが面倒なだけで、内容に関してはそつちのが有利なぐらいだぞ？」

「……ほう

では、その内容とは？」

「まずはサクラをこの学院のメイドかなんかとして雇ってほしい
今こいつは俺と違ってここは部外者だ
だから、何かしらの仕事でも与えてこここの関係者にしてほしい」

ジジイは今の言葉の裏にある意味をしばらく探り、結局俺に聞く事にした

「……それによるメリットとデメリットは何じゃ？」

「デメリットは手続きだな

元々こつちにいない人間に仕事を与えるんだ

それなりに面倒なもんだろ？

で、気になってるメリットだが、こっちはシンプルだ

サクラという強力な警備員を破格の条件で雇える

フーケの件があったばっかだら警備員の増強はそっちにはかなりのメリットだろ？」

「……じゃが、ワシは彼女の強さを知らん

いくらおぬしが強いと言っても、ワシや他の教師達は納得せんぞ？」

つまりサクラの強さが証明できれば問題クリアでサクラを雇うつか？

「わかった

じゃあ、今日……は舞踏会で無理なんだな

明日の夜にまたこの面子で集まってほしい

そこで俺とサクラが模擬戦やるから、それを見て決めてくれ
ただ、今日はせめて宿舎を使わせてやってくれ」

俺は俺のできる限りの譲歩案を出した

「……そこまで彼女の实力は高いのか？」

その言葉の裏には、それだけで信用させられるのかという意味があるのだろう

俺はもちろん

「つーか、魔法に関してはこの世界でもトップクラスのレパトリ
ー持ってると思うぜ？」

そう答えた

「わかった

では、今日はもうここはお開きでよいな？

というか、そろそろ終わりにしないと、舞踏会の準備ができんのじや」

そうジジイが言ってこの場はお開きとなった

サクラは手続きと案内をずっとしていたジジイに任せて、今俺はルイズと一緒に部屋に戻ってる最中

「ねえ、聞いてもいいかしら」

それまで無言だったのにルイズが話しかけてきた

「んー？」

俺は目の前の小さな背中に相槌を打つ

「本当にフーケを殺したの？」

その声音から、それがウソだと信じたいという気持ちが伝わってきた
ホントは殺してないし、ルイズには今後マチルダ（フーケ）と共に一緒に仕事をしてもらうかもしれないから、教えてもいいかもしれない

だが、もし教えてしまえばその理由を話す必要がある、場合によってはマチルダ「フーケだとバレてしまうかもしれない

そうなれば、ルイズはきっとマチルダとは犯罪者として接するだろう
まだ数日とはいえ、ルイズと過ごしてきたからわかる

ルイズは良くも悪くも純粹で、正しい事が絶対だと思ってる娘なのだ
それが悪いとは言わないが、世の中には必要悪というものがある

それにマチルダは今ももう盗みなんてしなくても仕送りできるぐらいの金（俺）がある

だから今後フーケは現れない

それでもルイズはマチルダの事を認めないだろう

俺はそこまで考えてもう部屋の前まで来ていたのに気付く

ルイズはそこで立ち止まり、振り返って俺の答えを待っていた

俺は少し考え

「……ご想像にお任せするよ

ただ、世界には平気な顔して人を殺せる奴もいるという事は覚えて
おいた方がいい」

結局曖昧な答えを言ってお茶を濁したのだった

第20章　そして最強コンビは誕生した（後書き）

あー……

そろそろアルビオンだ……

つまりウェールズだ……

ウェールズの生死はどうしよ……

第21章　そして使い魔は踊るのですた（前書き）

どもコンニチワ！

友人がリア充してるのを隣で見えていて劣等感を感じている作者、そばつゆです

とりあえずここで一区切りはついた感じ……かな？

第21章　そして使い魔は踊るのです

俺は今厨房にいる

もうホールでは舞踏会は始まっている

俺が何故ルイズ達と一緒にホールにいるのではなく、厨房にいるか
と言えば、シエスタの手伝いをする為だ

今回は表向きでは俺の功績ではなく、ルイズ達の功績になってるから俺がでしゃばってもいい事はないだろう

まあ、これからここで働く事になるだろうサクラの挨拶も兼ねてなんだがな

ちなみにサクラは今ホールでシエスタと共に給仕の仕事をしているだろう

「今更だが、本当に手伝ってもらっていいのか？」

追加オーダーを作ってるマルトーがそう話しかけてきた

「俺が好きでやってるからいいんだよ
それに後で少しだけ顔出すつもりだし」

俺は帰ってくる大量の皿を洗いながら答える

ちなみにルイズ達に必ず後で顔を出すように言われたからである

でなければ優雅な舞踏会なんてやってられるか

こちららバカが酔ってバカな事やってるのでも肴にして、下品にゲラゲラ笑いながら安い酒煽る方が好きな無法者（元勇者）だぜ？

きつちりとした格好なんざ窮屈でしょうがねえ

それもあるって、どうせヒマ潰すならシエスタでも手伝わかって事で今に至る

そしてしばらく皿洗いをしていると、またもマルトーが話しかけてきた

「おい我らが剣
もうこっちはいいから舞踏会行つてきな」

言われて時計を見ると、結構な時間が経っていた

……我らが剣というのはこの厨房内での俺の呼び名だ

大変不本意ながらな！

「そうか

じゃあ、悪いが俺はここで抜けるわ」

「おう！

また今度はゆっくりしてつてくれや」

俺はそれに片手で応えて厨房を後にした

そしてホールに入る前に袋から『お洒落なスーツ』を取り出して、物陰で着替える

ホールに入ると、ここの生徒達が思い思いに踊ったり、食事したりしていた

俺はホールを見渡し、目的の人物を見付けるとテキトーにバイキング形式のメシを皿に盛りながら歩いていった

「……チッス……モグモグ……待た……モグモグ……せたな……モグモグ」

俺は片手を上げつつ、食うものは食いながら挨拶する

……このサラダうめえ

「……ねえ、ただでさえ遅れて来てるんだから、少しはそれらしい態度をとりなさいよ！

そして話しか食べるかのどっちかにしなさい！

私の使い魔として恥ずかしくないの！？」

「……モグモグ……」

「そこで咀嚼を選ぶなーっ！」

……うるさい奴だ

食事中は静かにするのがマナーだろ

「ひよひひゅうはひすゆかに……モグモグ……」

「……だから、食べながら喋るなーっ!」

……やれやれうるさいご主人だ

「ぜえ……ぜえ……」

俺は口の中のものを飲み込み、肩で息をしているルイズの肩に手を置く

「……な……なによ……?」

まだ息の整っていないルイズは若干苦しそうに俺を見上げる

「少しは落ち着け」

「……誰のせいだと思ってるのよ……」

今度こそルイズは項垂れた

「それよりもダーリン素敵な格好じゃない
よく似合っていてよ、ジェントルマン」

俺とルイズの漫才が終わって、キュルケがそう話しかけてきた

「普段着が楽でよかったんだが、まあ、郷に入りては郷に従うのが
ルールってもんだろ?」

そして俺とキュルケが話してる横でタバサが一心不乱に何かのサラ

ダを食べていた

後で少し分けてもらおう

「で、俺に舞踏会に参加しろってのはどんな用事があつてだ？

俺はどつちかつてーと、こういうキツチリとした場合は苦手なんだが」

「どんな用事も何も一緒に踊りたいと思つたのよ」

項垂れていたルイズがそう言う

「え？何それ？

俺と踊りたいって、どんなギャグだよ

「ーか、貴族なら貴族同士で踊ってりゃいいじゃねえか」

「……………んた……………たい……………」

ルイズが俯いて何かボソボソ言いだした

「あ？

聞こえねえよ

言いたい事あんなら、ツラ上げてはつきり言えや」

俺がそう言うつとルイズはキツと顔を上げ、りんごのように真っ赤になりながら、さっきと同じくらいの声で言った

「あんたと踊りたいって言つたのよ！

こんな事ご主人様の口から言わせないでよ、このバカ！」

しかも何故か罵倒付き

……何故だ？

「なんで俺なんかと踊りたいんだよ？
物好きなやつचनाあ……」

俺がそう呟くように言うと、さらに顔を真っ赤して言った

「べ、べべべ別にあんたにお礼だとか、そういう意味じゃないんだからね！？」

ご主人様からのご褒美なんだから！
か、勘違いしないでよねっ！？」

……なんかめっちゃ滅茶苦茶な言い訳しだしたぞ？

「なあ、キュルケ

これってもしかして俺踊った方がいい流れなのか？」

「なんでそこでツエルプストーに聞くのよっ！」

ギャース力騒いでるルイズはとりあえず無視

するとキュルケは珍しく色目を使うような微笑ではない、慈愛の意味を込めた笑みを一瞬ルイズに向け、そのまま俺の方を向いて言った

「踊ってあげなさいな

これも紳士の務めよ」

めんどくせえ……

「わーっ たよ

だからそんな優しい笑顔すんな
俺に慈愛の笑みを向けんな

……じゃあ、お姫様？

俺と踊りやがってくれないでしょうか？」

俺はできる限り紳士っぽい言葉（これでも精一杯）に気を付け、右
手を差し出す

「……………ぷっ

何よ、その言葉遣い……

あんた紳士には程遠いわよ」

そう笑いながらルイズは俺の手をとった

~~~~~

SIDE〜デルフ〜

知ってるかい？

俺っち今何処にいるかを

笑っちゃうよな

この回どこにも出番ないと思ったら、実は貴族の娘っ子の部屋で放  
置プレイ

一応重要アイテムの一つなのに

知ってるか？

原作って所だと俺っち今頃ちゃんと皆がいる場でセリフあったらしいぜ？

しかもその原作だと俺っちの相棒は文字通りの意味での相棒で、何をするにもいつも一緒らしい

……なのに俺っちの相棒は俺っちを喋る面白道具としてしか見ていない……

俺っちグレちゃいそうだ……

というか……

「誰か相手してくれーっ！」

デルフの叫びは、誰もいない寮の中によく響いた



第21章　そして使い魔は踊るのです（後書き）

とまあ、こんな感じで一巻部分は終了です

どうでしたでしょうか？

## 第22章　そして皆はドン引きした（前書き）

もう一方の作品も仕上げないといけないのに、全くネタが浮かんでこない……

誰かオラに文才を分けてくれ！

はい、戯れ言でした

## 第22章　そして皆はドン引きした

楽しい事の後には辛い事が待っている

人生とは山あり谷あり、そうやって上手くバランスが取れているものだ

まあ、舞踏会が俺にとって楽しい事だったかどうかはこの際無視するとして

つまり何が言いたいかと言うとだな……

今俺は約束の時間、約束の裏庭でサクラと向かい合っている

もちろん昨日約束したサクラの実力を見せるという意味で、手合わせする為だ

だが正直やる気が起きない

何故なら全呪文をマスターした賢者なんて、バケモノ以外何者でもない

勇者が勝ってる要素なんて、ギガデインと装備品の強さだけだ

しかも、今回はあくまで実力を確認させる意味の手合わせなので、ガチの装備品はなしだ

だから俺が装備してるのなんて、吹雪の剣と星降る腕輪ぐらいだ

後はいつもの服装

サクラも簡単な服に賢者の杖……そして何故かガーターベルト

……あれ？

「サクラ、装飾品を何故ガーターベルト？」

「だってこれならナハトもメロメロになってくれると思って」

……俺はもう何も言わなかった

ちなみに今この場にいるのはジジイとマチルダ、そしてルイズ達だ

俺らが呪文を使えるのを知ってる面子だ

「今この場には風と水を使って結界をしておる

ここにいない他の教師達にも人払いをしてもらっておる」

そうジジイが言うが、やってる内に熱くなり過ぎたらギガデインとかイオナズンとかメラゾーマとかが飛び出すだろう

もしそうなたら結界とやらは耐えられるかどうか……

俺はそう思わずにはいられなかった

~~~~~

SIDE〜キュルケ〜

私は今夢でも見ているのだろうか？

いや、あるいは魅せられているのかもしれない

だってそうでもなければ、平民だと思っていた彼や彼が連れてきた女の子が魔法を使っている事が説明できない

……というか、そもそも目の前の光景がもうすでに現実とは思えない

「メラゾーマ　！！」

サクラが何やら手を出して唱えると、私の見た事ないぐらい巨大な炎がナハトを襲う

たったあれだけの詠唱で、しかも杖とか媒体無しであんな炎を生み出すサクラに、私は驚きを隠せない

「……んな単調なのに、当たるかってーの！！」

だが、驚くのはナハトの行動もで、あの炎に対して何の躊躇もなく剣を振るい、炎を拡散させた

「……っか、メラゾーマとか食らい飽きたわ！」

そう言っただけはナハトからサクラに突っ込んでいった

「スカラ スカラ スカラ スカラ」

するとサクラはナハトが懐に入る前にまた何かの魔法を高速で唱えた
その直後、ナハトの剣がサクラの胸を襲う

「危ないっ」

思わず私は目を瞑った

でも、すぐに目を開け、そしてその目に映る光景を疑った

「……………えっ!？」

なんとナハトの剣はサクラの胸を捉えているが、体はおろか服すら
破っていないかった

「……………だから賢者と戦るのは嫌なんだよ」

ナハトはそう言って、右手を剣から離し……

「ライデイン !！」

ナハトがそう唱えた瞬間、サクラの頭上から雷が落ちた

「……………っ!？」

マホカント
」

流石にサクラも慌てたがそれも一瞬で、すぐに次の魔法を唱えた

すると、サクラに当たったはずの雷が何かに弾かれ、逆にナハトを襲った

「ちっ！？」

ナハトは避けようとしたが、避けきれずその雷を食らってしまう

と、そこで一つ気付いた

何故かこの中で私しかナハト達の魔法に驚いていないのだ

いや、少し言い方を変える必要がある

正確には魔法の威力には驚いているが、魔法そのものを使ってる事には驚いてない

「ちょっとルイズ！

なんでナハト達は魔法使えるのよ！？

私、そんな事聞いてないんだけどっ！？」

隣にいたルイズにそう問いただと

「あれ？

あんた知らなかったっけ？

あいつもあの女も異世界からこっちの世界に来たのよ」

そんな事を言ってきた

何それ、初めて聞いたんだけど

「初めて聞いたんだけど、それちょっとどういう事!？」

「どうもこれも今見てる通りじゃない

ナハトもあのサクラって女も異世界の魔法を使いこなす超エリート
って事よ

……このご主人様を差し置いてねっ!！」

彼はどれだけ凄いのだろう

ギーシュの時にとてつもなく凄い平民だと思ったのだけど、実際は
平民ではなく、それどころか私達の誰よりも魔法のできる人だった
のだ

彼の事を教えられてなかったのは少し不満だったけど、きっとそれ
なりの理由があつたのだろう

なんせ、異世界から来たと言っても普通は信じられないし、おまけ
に私達以上に魔法が使えるなんて、頭の固いトリステインの貴族達
に知れたら何をされるかわからないだろうし

「……おいサクラ、スカラ使ってマホカンはちょっと自重が必要
なんでないか？」

反射した雷をもろに受けたナハトはそうサクラに言った

「だって初めての痛みはナハトの逞しいこん棒を突っ込まれた時に
とっておきたいんだもの……キャッ」

えっ？

もう二人はそんな仲なの？

「『キヤツ』じゃねえよ

そんな言い方したら周りが変な誤解しちゃうじゃねえか、コノヤロウ」

あつ、やっぱり違うわよね

「ぶーぶー

ここで既成事実作っておけば外堀埋められてラッキーかなって思ってたんだもん」

「だから『だもん』じゃねえっ!？」

「つか、そんな消極的じゃなくて積極的な呪文使わないと、お前の凄さがわからなくて雇ってもらえねえぞ？」

「じゃあ、ちょっと思い付いたの使ってみようかな」

「思い付いた呪文？」

「うん

あのね、私カンデータとかいうのに捕まってたでしょ？」

そういえばナハトがそう言ってたわね

「その時に、一緒に捕まってた人の中にラインってクラスのメイジの娘がいてね、色々教えてもらったの魔法と魔法は重ね合わせて強くなるって」

「……つまりはあれか？」

俺らの呪文でも同じ事ができると?」

「そうそう

新しい可能性だよねっ
」

言ってる事は少ししかわからなかったけど、つまり新しい魔法をこの場で即興的に作るって事？

そんな難しい事ができるの？

「……ほう、面白いじゃんか
やってみな？

成功したらジジイも文句無しで雇うだろ？」

そう後半は学院長に問い掛けた

「うむ

……まあ、今までのでも十分雇うレベルなのじゃがな……」

だが、学院長の言葉は聞かれてなかった

「じゃまあ、やってみろよ

俺が全力で受け止めてやる」

「じゃあ、いくよ

……右手に……メラゾーマ……左手に……マヒヤド……合成！
」

サクラはさつき見たスクエア以上はある炎の魔法と、それとは真逆の冷氣……水？の魔法を両の手にそれぞれ作り、その二つを合わせた

そして合わせた熱気と冷気の塊をナハトに弓を射るように構える

「最悪ちゃんとザオリクしてあげるから」

「えっ？」

「メドローア　！！」

それは私……いや私達の常識では考えられない魔法だった

少なくともこの世界では、エルフですら圧倒する……威力と魔力が込められていた

私が考えられたのはそこまでだった

何故なら、その直後この裏庭一体は更地になってしまい、私達は当人達を除き、全員気絶してしまったから

第22章　そして皆はドン引きした（後書き）

まあ、メドロアとかやっちゃった感じかないですね、わかります

でも、彼らならできると思ってたんですよ

第23章　そして使い魔達は自重を覚えた（前書き）

書いてく内に区切りがつかなくなっていた……

とりあえずここで一旦区切ります

第23章　そして使い魔達は自重を覚えた

「お主らは少し自重というものを覚えてくれ……」

これはジジイを含め、おそらくこの学院全ての気持ちだろう

今俺達が立っていた裏庭……

ここには小さいながらも木々があり、休憩できるようにベンチもいくつかあったのだ

だが、今は見る影もない

それもこれもさっきサクラが放った　メドローア　なる合成呪文のせいで綺麗さっぱり更地になってしまったのだ

俺以外に人的被害がなかったのが不思議でしようがない

……いや、その呪文の衝撃で俺以外も飛ばされたりして打撲なりはしたのだが、気絶してる内にベホマズンでケガらしいケガは治しておいたから、一応俺以外にも人的被害はあったのだが、これはまあ、言わない方がいいだろう

ちなみに俺はそのメドローアの直撃を受ける直前に王者の剣で防ぎ、体も無理矢理反らしはした……が、結果はメドローアの直撃はなんとか反らしはしたが、その代償として王者の剣が刃が根元からもつていかれ、使い物にならなくなった

おそらくバギクロスすら打てなくなっただろう

………さよなら、伝説の剣一号………

そして現在俺とサクラは裏庭で二人正座をしてジジイ達の説教を受けている

「コルベール君達が説明してくれなければ人が集まってきたもつと大事になっていたのじゃぞ！
わかっておるのか！」

まあ、流石に人払いしてようがあんだけの事が起きれば意味ないわな
まあ、夜遅くだったから、元々人も少なかったのも幸いして、あんまり人は集まらなかったみたいだったが

それでもまあ、頑張ってくれた教師達よ、ありがとう

そして空が明るみ始めてきてようやく解放された俺達

流石に今回の事は全面的に俺というかサクラが悪いから、説教も甘んじて受けた

そしてお互い部屋に戻る最中にサクラが笑顔で言ってきた

「眠いから、ラナルータして夜にしちゃおっか」

………お前という奴は………

「………頼むからお前は少し自重してくれ」

徹夜で説教という事もあり、もう今日一日の気力を全て使ったかのような疲労感が、サクラの一言でさらに削られた

.....

.....

.....

その後、起きたルイズ達には色々言いくるめて部屋に帰ってもらった

あの時はジジイも説教もあったから不満そうにしていたルイズ達もとりあえず部屋に帰ったが、きつとこれから詳しい説明をしないといけないと思うと若干鬱になる

そんな気持ちだというのにもうルイズの部屋の前に来てしまった

俺は扉を開け、一言……

「ただい……………でええっ!？」

言う前に逆に驚いてしまった

なんと部屋には当然のようにキュルケとタバサ、そしてマチルダがいたのだ

「……………皆さんお揃いのようで」

恐る恐るそう口にすると、ルイズが素晴らしい笑顔で言った

「ええ、皆あんたに話があるみたいだから、折角だし皆で待つ事にしたの」

……俺怖い……超怖い……

「学院長がね、あんな事があつた後だから、今日はお休みしてもいいと言ってくれたの

ふふっ…学院長って優しいわね

私達にこんなにあつぷり時間をくれたのだから」

まだルイズは笑顔だ

けどさっきよりも空気が禍々しくなつたような……

「今日のはあんたもお仕事お休みでいいから最後までちゃんと話してね？」

……俺の二日目の徹夜が決まつた瞬間だつた

~~~~~

SIDE〜オスマン〜

もう本当に彼らには自重してほしい

特にあのサクラと名乗った少女

彼女はあまりにも危険過ぎる

即興で作った魔法で更地を作ってしまうなんて、普通に考えれば有り得ない事だ

だが、彼女はどうかナハト君には逆らわないようなので、ナハト君が手綱を握っていてくれる事が条件ならこれ以上ない警備員になるじやろう

まあ、フーケのような者も今後は現れないと思いたいが

「すまんがロングビル君、何かお茶を入れきてはもらえんかの」

.....

「む？

ロングビル君！」

.....

「はあ、ロングビル君がいないと寂しいのう  
いったい何処にいるのか」

その頃のロングビル改めマチルダは、ルイズの部屋でナハトに拷問という事情聴取をしていたのだった

~~~~~

SIDE ナハト

「……つ、疲れた……」

流石に完徹二日は堪えた……

しかもその分の洗濯物や掃除は溜まっていたわけだから、皆から解放された後はそれらを始末しなければならなかった

結局なんだかんだやってる内に完徹三日になってしまった

今ならアルミラージ程度のラリホーとかでも余裕で効くぜ……

と、そんな俺は今何処にいるのかというと、本当ならどつか日の当たる場所で爆睡したいのだが、何故だかルイズと共に教室にいる

……ホントなんでこんなトコいるんだ？

「なあ、ルイズさんよ

俺は今完徹三日で死ぬ程眠いのですが、何故ここにいなきゃならんのでしょうか？」

俺は眠い頭を振り絞ってルイズに尋ねた

「あんたは少し常識と倫理を学びなさい」

だが、ルイズの答えは冷たいものだった

……つまり俺にここで他の連中と色々勉強しろと？

マジかよ……

「あの……さっき言った通り、俺マジ完徹三日で死にそうなんだけど、それでもダメッスか？」

「ダメ」

俺にしてはかなり下手に出ているのだが、ルイズは無情にもばっさり切り捨てた

俺はもうそれで諦め、床に座りながら退屈な授業とやらに目を向ける

「では最強の系統とは何かな、ミス・ツエルプストー？」

前の教壇ではどっかで見た教師が何やら高説を垂れていた

名指しされたキュルケは席を立ち、チラチラと俺の方を見て言った

「それは………は無しですよね？」

途中ゴニョゴニョ言ってる、よく聞こえなかったが、あの教師はわかったようだ

「……まあ、そいつは例外だな
それ以外でだ」

「じゃあ、虚無じゃないの？」

「それも伝説上のだろう？
現実の話をしているんだ」

「それなら『火』ですわ、ミスター・ギトー」

「それは違うな、いいかい諸君
最強の系統とは『風』だ

例えば、風の攻撃魔法は目に見えない
つまり、それだけで他の系統を凌駕しているのだよ
防御にしてもそうだ

強力な風の前にはどんな炎も無力となる

……なんなら、私に向けて自慢の炎を撃つても構わんよ、ミス・ツ
エルプストー？」

……あのおっさんバカじゃねえのか？

俺はおっさんのあまりに短絡的な考えにそんな感想を持った

「……火傷しても知りませんよ？」

おっさんの挑発にキュルケは好戦的な笑みを浮かべる

そしてキュルケは杖を抜き、魔法を唱える

「ファイアーボール」

キュルケの杖からいつか見た炎の玉がおっさんに向かって飛んでいく

メラに限りなく近いメラミといったところか

「ふむ……そあら！」

おっさんは杖を軽く振り、その炎を難なく弾き返す

俺は溜め息をつき、ダルい体にムチ打ってキュルケの前に出る

キュルケは弾き返された自分の炎に反応できない様子

まあ、別にキュルケを庇う理由も必要もなかったんだが、このおっさんのあまりのバカな発言には一言言っておきたかったからだ

他に理由はない

ホントにただそれだけだ

……ダメだ

眠くて上手く思考できない

俺は目の前に迫った炎の玉を手で払うようにかき消した

「おいおっさん

あんまわけわかんねえ事言ってるじゃねえぞコラ

おっさんとキュルケじゃレベルが違っただろうが

てめえのやってる事は俺がああ氷漬けされたバカをボッコにするのと何も変わらねえぞ

てめえも男なら弱い者イジメして悦んでんじゃねえよ」

俺はここまで言っけてキュルケの方を向く

「お前もちよつと考えりゃわかるだろうが

あの手の大人は自分の力を誇示したくでしょうがねえグズなんだから、少しは考えて抑えろつて」

「き、貴様っ！

平民のくせに無礼だぞ！」

背中からおっさんの声が聞こえ、振り返る

「ああ？なんか言ったかおいコラ！？」

生憎、眠さでホントに何を言ってるか聞こえなかったんだ

口調が悪いのは元から悪いのに加え、眠いから余計に悪くなっている

「あつ、いや、何でもない

……ただ、生徒ではないんだから少し静かにしてくれないか、と言っただんだ」

汗を流しながらそんな事を言っおっさん

しばらく俺はおっさんを睨み付けていたが、突然教室の扉が開け放ち乱入してきた者によって、その空気は霧散した

「今日の授業は中止ですぞ！」

その乱入者はハゲ頭にカツラを被ったハゲだった

「ミスター・コルベール
今は授業中ですよ？」

「だから、その授業が中止になったのです

なんと恐れ多くも、我がトリステインがハルケギニアに誇るアンリ
エツタ姫殿下がゲルマニアへの訪問の帰りに我がトリステイン魔法
学院に寄るとの知らせがありました

よって我々ではできる限りのもてなしをする為に、今から授業を中
止して準備に取り掛かる事になったのです」

似合わないカツラをしたハゲが興奮を抑えきれないように言う

ようはアレだろ？

なんか王族の偉い人が来るから皆で歓迎の準備をしようって

どうでもいい、超どうでもいい

俺はそんな事よりも、早く寝たいんだ

だけどやっぱり俺の願いは聞き入れられないんだろうな

俺はいつそ開き直った方が楽なんじゃないかと思ったのだった

第23章　そして使い魔達は自重を覚えた（後書き）

メドローアの件は……まあ、オリハルコンぐらいやっちゃっただろう
と思ったのですよ

第24章

そして使い魔は怒鳴り付けた（前書き）

やっブ……

途中までとあるキャラを忘れてた……

第24章　そして使い魔は怒鳴り付けた

「じゃあな、マルト―
世話になった」

俺はすっかり夜になった時間、厨房を後にした

あのハゲの乱入後、なんやかんやあって、学院前で姫殿下とやらを
迎えた

まあ、簡単な挨拶をただけだったからそれ自体はすぐに終わり、
教室に戻ろうって時に俺はトヘ口スを使って厨房まで逃げた

完徹三日で、ろくにメシも食ってなかったから厨房で賄いをもらい、
そのまま仮眠をとった

夜になってシエスタが起こしてくれたのでそろそろ帰るか……で今
に至る

ちなみにサクラはもう厨房でも馴染み、上手くやってるようだった
シエスタとも仲良いようで、俺としては意外とあっさり友達ができ
たようなので、何かこう嬉しいものがあつた

「……ああ？」

と、そろそろ部屋の近くってトコで黒いフードとマントを着けたい
かにも怪しい人物がルイズの部屋に入って行くのが見えた

この時間はルイズも部屋にいても鍵を掛けるから、知ってる人間な
んだろうけど……

「流石にあの格好は怪し過ぎだろ……」

むしろ誰かにアピールしてるようにしか見えないぐらいだ

やれやれ……また面倒事が……

内心とは裏腹に顔がにやけてるのを自覚しながら、いつものように
最後の鍵で部屋の解錠をして中に入る

「つつす」

俺は何も気付いていませんよー的な空気でも通りに部屋に入った

だが、中にいた奴にとってみればそれは普通ではなかったらしく、
こつちを振り返り驚いていた

「あんた誰よ？」

俺は思ったままの事を口にした

でも最近何処かで見たような……？

「ちょっとナハト！

あんた姫様になんて無礼な口きいてるのよ！
というかあんた今まで何処にいたのよ！」

……姫様？

……ああ、昼間の姫殿下とか呼ばれてた奴か

どうでもよかったし眠かったから顔とかかなり曖昧だったわ

「んなのどうでもいいじゃん

それより、姫殿下ってこんなトコにいていいのか？

どうやらお忍びみたいだけど、事と次第によっちゃ人呼んでくるぞ
？」

黒殿下の方を見ながら言った

「ええ、実はルイズにお願いがあつて来たの

……もしかしてあなたルイズの恋人さん？」

「ぶっ！？」

ルイズが吹き出す

「いや、違う

何の因果か俺はルイズの使い魔やってる

名前はナハトだ

そういうあんたの名前をこっちは聞いてないんだが？」

「あら、ごめんなさい

私はルイズのお友達のアリエッタ

人が使い魔なんて随分変わってるのね」

印象は悪くない

普通にいい王族って感じた

ルイズもいいとこのお嬢らしいからお友達だと言われてもそれほど違和感はない

ルイズも学院の連中相手とはまた違った信頼の目をしてる事から、それなりに信用してもいいと判断しよう

問題は最初に『ルイズにお願い』があるとやってきた事

王族のトップみたいな奴が友人とはいえ、パンピーにお願いをしにわざわざお忍びでやってきた

思い出話をしてるルイズ達の間に入る

「なあ、旧交を温め合ってるトコ悪いんだが、要件は早めにお願いでいいかい？

今この場を第三者が見たら、場合によっちゃこっちの首が飛ぶような状況なんだ」

「ちよつとナハト！

だからあんた姫様になんて口の利き方してるのよ！」

「いいのよルイズ

彼は使い魔として当然の事をしているのだもの

……ごめんなさい、使い魔さん

久しぶりに心から信頼できるお友達と会えて嬉しかったの

……でもルイズが羨ましいわね

自由でこんなにあなたを心配してくれる殿方が身近にいてくれて

お城だと皆私の事お姫様としか見てくれないから、いつも息がつま
つちゃう……

まるで籠の中の鳥ね……

同じ鳥なら大空を羽ばたいてる鳥がよかったわ」

「姫様、そんな事言わないで下さいませ

私達はお友達ではありませんか

だから、いつでもどんな些細な事でも相談してください
私でも愚痴を聞くぐらいならできますから」

…… またルイズと姫さんは自分達の世界に入ってしまった

…… いいからさっさと要件言ってくれよ、頼むから

「ああ、お二人が仲良いのはわかったから、ぱっぱとその『お願い』とやらを言ってくれ」

俺がそう言つと姫さんはハッとした顔をしてボソボソと呟くように
話し始めた

「本当はお友達のあなたに頼むような事じゃないのかもしれないけど、私にはもう頼れるのがあなたしかないの」

「何でも仰ってください」

「実はゲルマニアに嫁ぐ事になったの」

キュルケの出身だっけ？

「まあ！

あの野蛮な成り上がりの国にですか！？
一体どうして？」

「所謂政略結婚というものです

私は何の因果かトリステインの王族として産まれました
だから最初から恋愛結婚なんて諦めてます

だからゲルマニアに嫁ぐ事はいいいのです

……ですが、礼儀知らずなアルビオンの貴族達はその事を快く思っ
てません

そして私がゲルマニアに嫁ぎにいく前にトリステインとゲルマニア
を仲違いさせる物を探しています」

「まあ、ではもしそんな不安材料が見付ければ……」

「ええ、トリステインとゲルマニアの同盟は反古

我がトリステインは一国である強大なアルビオンを相手にしなければ
なりません」

「んで、その不安材料ってのはなんだ？」

あまりに遠回しなのでストレートに聞く

「私が以前したためた一通の手紙です……」

それがアルビオンの貴族に見付かり、ゲルマニアの皇帝に渡されれ
ば……」

手紙、ねえ……

「なあ、姫さんよ

そいつはもしかしてラブレターとかじゃないのか？」

その三角関係でゲルマニアに渡って困る手紙なんてラブレターが裏でアルビオンと組んで、ゲルマニアを叩くための密書の二つぐらいじゃねえのか？

そう思つて鎌かけたんだが……

「ち、違いますっ！」

姫さんは否定

ただし顔面真っ赤で説得力なし

……やれやれ面倒な姫さんだ事

「じゃあ、その手紙は何処にあんだ？」

まあ、この話が出る時点で大体予想はつくが、まあ、一応な

「それが今手元にないのです
今はアルビオンに……」

「じゃあ、もうすでにアルビオンの貴族達の手には!?」

「いいえ

手紙を持っているのは反乱勢力ではなく、王族派のウェールズ王子が……

ですが、王族派はもうすでに虫の息

ああ！なんて不幸な私でしょう

きつとすぐに反乱勢がウェールズ王子を捕らえ、手紙を見付けてし

まうでしょう！

そうすれば……もう……」

姫さんは大袈裟なジエスチャーと共にベッドに倒れる

「姫様！

私ならその使命、慎んでお受けします

姫様は大事なお友達

そのお友達の助けをさせてくださいまし」

……こいつ何もわかってねえ

俺はルイズのバカな発言を聞いて頭が痛くなった

「ああ、ルイズ！

でもこれは危険な使命……

それでもいいの？」

それでもいいの？じゃねえよ

お前もルイズもバカなのか？

「……おい、おいコラ姫さんよ

あんたまさかルイズにその手紙を戦争してる国行つて、ウェールズ
つて奴からもらってこい、なんて言つつもりか？」

「ナハト！うつさい！」

ルイズが怒鳴るが、それこそうるせえだ

「いいからルイズは黙ってる

……いいか姫さん

あんたの落ち度なのに、あんたはあんたの言うお友達に戦争してる
危ない国に行つてこいつつてんだ

自分は危険のない場所にいてだ

わかつてんのか？

あんたは大事なお友達を死地に向かわせてんだよ！」

「そ、それは……」

さつきまで悲劇のヒロイン演じてた姫さんは今は本気で泣きそうな
顔になっている

「言い訳なんか聞きたくない

俺が言つてんのはわかつてて『お願い』しに来たのかつて事だ

別に俺はいいんだぜ？

俺はどんな戦場にほつぽり出されても生きて生還できる自信がある
から

でもよ、ルイズはそうはいかねえだろ？

あんたも知ってるだろうが、未だにこいつは落ちこぼれ扱いされて
んだから」

俺はそう言いながらルイズの頭に手を置く

俺は熱で頭が上手く回らない時みたいに、思った事が口からすぐ出
てきた

「それに何より気に入らねえのが、リスクもないのにリターン求め
てるトコだ

リターンの為にはリスクを負え

一人安全な場所で俺達の帰りを待ってんじゃないくて、あんたも一緒に来るとかやってみろ！」

「ちょっとナハト！」

あんた流石にそれは無理に決まってんでしょうが！」

「無理も何もリスクもねえのにリターン求める方が悪いんじゃないかよ

それとも姫さんはアレか？

命のリスクの代わりに一晩一緒に寝てでもくれんのか？」

「なっ！？」

「ね、寝るっ！？」

ルイズと姫さんは仲良く真っ赤になった

「なんだ、お姫様と言っても『寝る』の意味ぐらいわかってたか？
じゃあ、丁度いいな

今すぐその野暮ったいマント脱いで尻でも振ってくれや」

俺はできるだけ下品になるように言った

「こ、こここのバカ犬は！ひ、姫様に向かってなんて事を言うのよ！！

あ、ああ謝りなさい！！」

案の定ルイズがいい感じで怒ってくれてる

姫さんはさっき以上に真っ赤になっている

「ルイズはまだ黙ってる

今俺は姫さんと話してんだよ

……で、姫さんはナニしてくれるんだ？

友達と一緒に死地に向かうか？

それともやつぱり俺とやるか？

さあ、どっちを選ぶよ？」

真っ赤だった姫さんはだんだん真っ青になり、そして最終的に真っ白になった

「ん？選べねえのか？

だったら役立たずが戦場に立つのより、俺が楽しめる方を選ぶとするか」

そう言っただけ俺はベッドにいる姫さんを押し倒し、仰向けの姫さんの上に四つん這いになる

「な、なななな……っ！！！！？」

ルイズが何か言ってるがシカトする

「さあ、このままだとあんたやられちゃうぜ？

いいのか？」

実質最後忠告をすると姫さんの目に涙が浮かび……そして滝のように流れ出す

姫さんは必死に涙が流れないように手で擦ったりしているが、意味ない行動だ

俺は姫さんの上体を起こし、怒鳴り付けた

「泣くんじゃねえ！」

泣いてりや事件が解決するワケじゃねえんだよ！

前を見てリスクとリターンを計算しろ！

『リスクは負えません、でもリターンは欲しいです』は通用しねえんだよ！

姫殿下なんだろ？

国のトップに立つ人間がそんな甘い考えで政できると思ってんじゃねえ！

わかったのか！？」

姫さんは泣きながら首を何度も上下に振った

俺はそれを見て、もう姫さんは大丈夫だろうと思った

「じゃあ、ほれ……これで涙拭えよ」

俺は袋から適当な布を取り出し姫さんに渡す

そして拭っている姫さんを見ながらルイズに言った

「……ちよつと席外す

姫さんの事は任せた」

俺はそのまま部屋の扉を開けた

「ああ！？」

だが、扉を開けて見た光景は寮の廊下ではなく、何故かそこにいた

ギーシュだった

第24章　そして使い魔は怒鳴り付けた（後書き）

ナハトには憎まれ役をやってもらいました

そしてそれを一生懸命書いてる内に彼を忘れてしまいました

ギーシュのファンの皆さん

すみませんでした

第25章　そして天空へ（前書き）

ども

昨日まで風邪を引いていた作者です

皆さんも体調には十分気を付けてくださいね

あつ、ケータイを今無料補償とかで新しい同じ機種に取り替えたのですが、設定が変わってフォントとか細かいトコが変わってしまってるかもしれません、あまりお気になさらないようお願いします

ではでは

第25章　そして天空へ

扉を開けてなんかいたギーシュを無言で部屋に引きずり込む

扉を閉め、カギをかけて今度こそギーシュに向き直る

「おい、おめえどっから聞いてた？」

場合によっちゃ、最悪の事態を想定しなきゃいけないが……

そう思ってた俺の心配をよそにギーシュは……

「姫殿下！その任務、この私、ギーシュ・ド・グラモンにもお供させてください！」

どうやらギーシュは口外するつもりどころか協力するつもりらしいが、はてさてクライアントの姫さんはどういう反応をしてるのやら

……

そう思ってた姫さんを見ると……

「まあ！

もしかしてグラモン元帥の？」

「はい、息子でございます」

「お父様も立派で勇敢な貴族でしたが、貴方もその血を受け継いでいるんですね

ではお願いしますわ、ギーシュさん」

と、姫さんがギーシュの名前を呼ぶと、ギーシュは石化した

表情を見るに多分喜びが最絶頂に達したのだろう

「では姫様

明日の朝、アルビオンに向けて出発する事にします」

「ウェールズ皇太子はアルビオンのニューカッスル付近に陣を敷いてると聞き及んでます」

「前に姉達と旅行で行った事があるので、地理には明るいかと思います」

ルイズと姫さんが明日の打ち合わせをしている

俺はその光景を離れた所から見て思いを馳せる

そのアルビオンってのが何処にあるかわからんが、最悪到着した時には手紙は既に反乱勢の手元でし た った の も 考 え ら れ る

……ふむ、やっぱり俺がルーラで行くのが一番早いんだが、何しろ場所がわからん

ルイズにキメラの翼を使わせてもいいが、周りの目がある

堅実に徒歩ないし馬が賢明か……

つまりまだ見ぬウェールズとやらには俺が到着するまで耐えてもら

わないといけない

戦力差がどのくらいだか知らないが、頑張っしてほしいもんだ

「母君からいただいた『水のルビー』です
お金が心配なら売り払っても構いません」

そんな事を考えていると姫さんがルイズに何やら指輪をわたす

「この任務にはトリステインの未来がかかってます
母君の指輪がアルビオンに吹く猛き風からあなたがたを守りますよ
うに」

そう祈りを込めて

一通り話が済んだのを見計らって姫さんに声をかける

「おい姫さん、用事が終わったんなら送っていくから帰れ」

「あつ、だったら僕にその役目を……」

「うるせえ、雑魚は黙ってろ」

「つか、お前じゃあ姫さんに何かあつたら責任とれねえだろうが」

ギーシュが余計な事を言いかけたので釘を差して黙らせる

「じゃあ、聞くが君なら責任が取れるのかい？」

「はあ？取れるワケねえだろ」

「……だけど、俺はそんな状況にならねえ自信があるから」

……なあ、ルイズ

このナルシスト、しつかり見張っててくれ
そしたらその間に姫さん送っていくから」

俺がそう言つとルイズは心得たとばかりにギーシュを引き受けてくれた

こういう時、相棒って言っただろうなとふとどうでもいい事を思った

「じゃあ、姫さん行くぞ」

俺は姫さんの手を引いて部屋の外に出て、周りに誰もいない事を確認した

「誰もいないな

……じゃあ、悪いけどもう少しこの手を離さないでいてくれよ？

……リミット」

俺は脱出呪文を唱えた

「……えっ？」

姫さんは目を見開いて驚いている

そりゃそうだろう

ルイズの部屋の前から気付いたら女子寮の前にいるのだ

何も知らない奴からすれば驚き以外の何物でもないだろう

「驚いたか？」

ここだけの話、俺は異世界から来たんですよ、今のは俺の世界の呪文」

俺はまだ呆けてる姫さんに自慢するように言った

「もちろんルイズは知ってるぞ？」

あんたに教えたのは少しお話ししたい事があったからなんだが、ちよつとだけ時間いいか？」

俺は正気に戻ってきた姫さんに言う

「……え、ええ……いいですけど」

俺は姫さんの答えを聞くと同時にルーラでルイズに召喚された始まりの広場に跳んだ

………

………

………

「……それで、お話しとは何です？」

意外と姫さんは俺の呪文についてあれこれ言及してこなかった

まあ、その方がこつちも早く本題入れるからいいんだが

「ああ、俺もまどろっこしいのは嫌いだからスパツと言っけど、姫さん、ニューカッスル行った事あるか？」

「……？」

幼少の頃ならありますけど……」

よし、これで条件はクリアつと

後は姫さんの気持ち次第だが……

「なあ、姫さんよ

もし今すぐウェールズを助けに行けるとしたらどうする？」

「……………え？」

「何が『え？』だよ

本命は手紙じゃなくてそのウェールズなんだろ？」

「い、いえそういう事じゃ……」

「だあもう！てめえ、めんどくせえな、オイ！

今ここには俺とお前の二人しかいねえだろうが！

だったら姫の顔知ってる奴なんざいねえんだから、てめえの正直な気持ちゲロっちまえばいいだろうが！

くだらねえ縛りで何もできねえんだったら死ね！死んでしまえ！」

この場にルイズやアンリエッタを知る者がいたなら殺されかねない口の悪さだ

「カマトトぶってんじゃねえよ

てめえのホントの気持ちを言えよ

人の一人ぐらい俺が救えないとでも思ってたのか？」

「そんなの助けられるわけないでしょう！

私が今まで何にも考えてなかったとでも思っの！？」

それはアンリエッタとしての叫びだった

……なんだ、ちゃんとと言えるじゃねえか

「んてめえのやってきた事なんざ知らねえよ

でもお前も俺の事何も知らねえだろ？

いいから俺に任せろよ」

俺は姫さんにそう言うと、嬉し泣きかなんか知らないが泣き始めた
姫さんにキメラの翼を渡す

「……これは？」

「具体的にニューカッスルを思い浮かべて、こいつを空に投げてみ
な」

「……？」

……こうかし……え？

……ええーっ！？」

姫さんがキメラの翼投げると、それに連れられるように俺達の体が
飛び上がる

再三驚く姫さんをよそに、俺達はあるという間にニューカッスルとやらに着いた

もちろん驚いてたのは姫さんだけじゃない

ニューカッスルにいた王族派の兵達も驚きに戸惑いを隠せないようだ

「よお、悪いんだけどウエールズって奴呼んでくんねえか？
トリスティンのアンリエッタとそのお供がわざわざ来てやったって
な」

先手はこのぐらいでよろしいですかね？

第25章　そして天空へ（後書き）

さて、久々にナハトの原作ブレイクが始まるぞ！

何処までやらせるか……

第26章　そしてリーサルウェポンは始動する（前書き）

ふと思ったのですが、皆さんはナハト視点中心で、たまに他視点で進んでいくのと、皆の視点が同じぐらいの割合のと、どっちがいいですか？

あと今回見直す時間がなかったので、おかしい部分があるかもしれませんが、その時はそつと教えて頂けると助かります

第26章　そしてリーサルウェポンは始動する

~~~~~

SIDE ～ アンリエッタ ～

第一印象はよくわからない不思議な人だった

次はなんて口が悪いんだろう

……でも今は凄い優しい人

見た事もない異世界の魔法で見る事が叶わなかった希望を見せてくれた

きっと彼の辞書には不可能なんてない

そう思わせるだけの魅力があった

「アン……リエッタ？」

アンリエッタなのか！？」

そして今、私の目の前には人垣を掻き分けて出てきた愛してやまない愛しい人

「ウェールズさまっ！！」

私はもう自分を抑えてられませんでした

気が付くと私はウェールズ様に駆け出しました

~~~~~

SIDE ナハト

くせえくせえ

青春くせえな、おい

俺は姫さんとウェールズが抱擁してる様を見てそんな感想を持った

…… 我ながら達観してるな

だが、そろそろパーティーは終わりだ

これからちよつと現実の話をしなきゃいけない

「お二人さん、ちよつといいかい？」

そろそろ俺と姫さんがここに来た理由を説明しなきゃいけないんでね」

「あれ？」

そういえば彼は誰なんだい？

どうやってここに来たんだい？」

「だからそれを今から説明するって言ってるんだろ！
少しは人の話を聞け、ドアホ」

人の話を聞かないウェールズを怒鳴り付け、近くにあったイスに腰掛ける

「気を悪くしないでくださいまし
口は少し悪いかもしれないけど、とってもいい人だから
それにここまで連れてきてくれたのも彼なのよ」

いらん

そんなフォローはいらん

「そんな事言ってる余裕ねえだろうが
これからこちらとら決める事決めてやる事こなしでいかないといけねえんだ」

俺はそう言っでウェールズの方を向く

「まずは自己紹介だな
初めまして、俺はナハト
トリステインとあるメイジの使い魔やってる
今後長い付き合いになるだろうからよろしくな」

俺は今後の事を見越して挨拶した

「ああ、こちらこそよろしく
僕はウェールズ・テューダー」

……ところで君がアンリエッタをここまで連れて来たそうだけど……」

「ああ、ちよつと信じらんねえかもしれねえけど、俺は異世界から来たんだよ

で、その異世界の呪文を使ってアンリエッタをお前に会わせにここまで来た」

「アンリエッタを僕に？」

「そうですウエルズ様！

トリステインまで亡命してください！」

姫さんがアンリエッタとしてお願いしている

「……すまないが、それはできないよ

僕がトリステインに亡命すれば反乱勢にトリステインを攻める口実を与えてしまう

そうなればアンリエッタ達に被害が及ぶ

だったら、僕はここで皆と共に死ぬ事を選ぶよ」

そう言うウエルズの顔は何処かで見たとような顔だった

……んー、ああ、さっきまでの姫さんと同じような顔してた

「じゃあ、てめえの意見だと、反乱勢がトリステインを攻めなければトリステインに亡命すんのか？」

「え？」

「え？じゃねえよ

亡命するのかしねえのかどっちだって言ってるんだよ」

「だが、そんな事できるわけが……」

俺はウェールズの煮え切らない態度にいい加減キレた

「グダグダうるせえよ、バカヤロウ！

勝手に人のできるできないのルールに線引いてんじゃねえよ！

つか、アレか？ケンカ売ってんのか？

お前ら貴族はただ単に俺を怒らせたいただけか？

だったらそのケンカ買っぞ？」

俺こつちの世界に来てからキレてばっかな気がする……

だが、それがいい事かどうかはともかく、ウェールズ達は俺の案を聞いてくれるようだ

「……では、案を聞いてもいいかい？」

「今回のポイントはウェールズがトリステインに来た際のアルビオンの動きだ

で、ここで逆転の発想をして、アルビオンを逆に動けなくするんだよ」

『……………？』

話を聞いていた皆がそんな顔をした

……………なんだ？

俺の話がわかり難いのか？

「だから、受け身になってんじゃなくて、こっちから一当てして向こうの戦力を削るんだよ

そうすればトリステインに攻め込む元気もなくなるだろ？」

「……そんな……滅茶苦茶な……」

第一、そんな事できる兵力が僕達の何処にあるというんだ！

自慢じゃないがもう僕達に残された兵力は300人しかないんだぞ！？」

それに比べて敵は約五万もの兵力がある
どうやって一当てするんだ！？」

もう冷静になっていられないのか、感情的になって反論してくるウエルズ

「そっちの兵なんて使わねえよ
俺が用意する戦力は二人だけだ」

俺の発言に今まで以上に騒がしくなる

「俺とトリステインにいるもう一人の異世界人だ
はつきり言って俺はともかく、奴は対軍として考えればただのリーサルウェポンだ

奴はその気になれば一人でこの世界を制圧するだけの力を持ってる」

もちろんこんな話誰も信じない

そんな事は俺も重々承知だ

だから俺も連中にその答えを見せてやる

「まあ、信じらんないのもわかるが、もう少しだけ黙って待ってる…… 15分あれば戻る…… リレミト」

俺はリレミトでまずはこの王族派の陣を抜け、続けてルーラでトリステイン魔法学院の使用人宿舎に飛ぶ

幸い、俺が前使っていた部屋を目的の人物は使っているらしかったので、色々と手間が省けた

俺は部屋に着くと、机に向かって何か書き物をしていた人物を見付け、声をかける

「よお、サクラ
ちよっくらお前の力を借りたいから一緒に来てくれ」

もちろんサクラが俺の頼みを断る事はないので、一緒にニューカッスルまで来る

「……皆待たせたな
こいつが俺が言っていた一人のリーサルウェポンだ
……サクラ、皆に自己紹介してくれ」

「いいけど、何をお手伝いするのかちゃんと教えてね？」

俺は頷くと、早くしろと促す

「じゃあ、皆さん、初めまして

私、ナハトの彼女で妻のサクラと言います

何をするのかまだよくわかりませんが、よろしく願いますね」

と、サクラは余計なディテールを付けやがった

一々訂正していくのは面倒だったので、要点をスパッと説明する事にした

「サクラ、戯れ言はいいから

とりあえずやってもらいたい事が、こいつらにお前の呪文を見せてやってくれ

できればイオナズン辺りを頼む」

「……まあ、私は別にナハトの役に立てるならいいんだけど、あんまりこういう使い方されるのは美少女として思うところがあるなあ」

何が自分の事を美少女だよ

まあ、外見的にはホントに美少女だし、呼びつけていきなりこんな事させるのは俺のがいけないとは思っけどさ……

「悪いとは思ってから頼むよ

何か一つだけ俺にできる範囲でなら言う事聞いてやるから」

そついう負い目があったからなのかもしれない

この時こんな事を言ったのを俺は後に激しく後悔した

「ホントに!？」

じゃあ、張り切ってやっちゃうぞ〜
何処に向けてやればいいの?」

「んー、じゃあ、悪いけどウェールズさん達よ、ちょっと表出てきてくれ

今からリーサルウェポンこと、サクラがどれだけの戦力なのかを見せてやるから」

そう言うと、ウェールズが先頭になってゾロゾロと表に出ていく

.....

.....

.....

皆が表に出たのを確認してサクラに合図を送る

「よし、じゃあ、もういいぞ

あの辺の廃屋なら壊しちゃっても構わないらしいから」

そう言つて一軒のプレハブ小屋を指す

「はい!

..... それ イオナズン」

言葉の軽さとは裏腹にサクラのイオナズンは期待通りの働き（爆発）
をしてくれた

『な……………っ！?!?!?』

それを見ていたウェールズ達は皆、一様に想像以上の驚きだった

「どうだった？」

期待に添えたかな？」

サクラが子犬のような目で俺の前まで来た

「ああ、完璧だ

……さて、今サクラの放ったのが何の溜め無しでできる最大の呪文だ
もちろん単発じゃなく、最大50発くらいは連続でいける
さあ、これでも反乱勢に対抗できないとも思つか？」

俺はまだ爆発の余韻の残る惨劇を前に呆然としているウェールズ達
に言った

「……………ああ、これなら確かに對抗できるかもしれない
だけど、それで僕達がトリステインに亡命したとして、反乱勢を抑
えるのは力だけじゃないか
一時はそれで抑える事ができたとしても、力での支配はいずれ抑え
きれなくなる」

つまり俺らだけじゃ、連中を一時退けるだけで、根本的な解決にな
らないってか？

まあ、確かにそう言われればそうだとしか言えねえわな

「じゃあ、めんどくせえからお前死ねよ

……ああ、わかってると思うが世間的に死ねって事だからな？」

俺はまた誰かが騒ぐ前に付け足す

「サクラをここに置いていくから、ウェールズの代わりはサクラに
してもらえ

んで、ウェールズは俺と姫さんと一緒に一時トリスティンに避難
その後で今後の身の振りを決めてもらって事でどうだ？」

「そんな僕が皆を置いて一人で逃げるなんてできるわけないだろう
！」

「いいや、私らは賛成するぞ
ウェールズ様さえ生きていればアルビオンは何度でも復活できる」

その言葉に周りの家臣達も賛同の声を上げていく

……いい部下持ってんじゃねえか

「だ、だけど、彼女はどうなるのです？
僕は彼女を囚にするなんて……」

おーおー紳士だねえ

「いや、問題ないだろ
サクラはどうだ、今の話」

「私はいいですよ
ナハトのやりたい事もわかりましたし
その代わり変化の杖貸してくださいね？
モシャスですと自分の魔法が使えなくなりますから」

「ういゝ、りょーかい

……サクラ自身も大丈夫って言ってるし、姿を似せる道具もある
いざとなればあの瞬間移動の呪文をサクラは使える
ほら、問題なくなっただぜ？

後はウェールズ、てめえの気持ち次第だ」

俺はウェールズにドヤ顔を決めて言っただけ

そしてウェールズは観念したかのように、こう言った

「……わかったよ、僕の負けだ
君の案に託すでしょう」

第26章　そしてリーサルウェポンは始動する（後書き）

一応次ぐらいでナハトの暗躍編を終えて、その次ぐらいに活躍編を書きたいと思っています

ただまあ、予定は未定なのでどうなるかわかりませんが……

第27章　そして獅子は子を谷に突き落とす（前書き）

今回で一応予定していた通り、暗躍編が終わります

そして今回も見直しは……

第27章　そして獅子は子を谷に突き落とす

「じゃあ、もう一度始めから今回の流れの説明をするぞ

1、サクラをウェールズの影武者として残し、俺と一緒に姫さんとウェールズはトリステインに飛ぶ

2、トリステインで魔法学院のジジイにサクラの事とウェールズの事を報告

3、ウェールズには変化の杖でとりあえずモブキャラになってもらつて、あっちの俺の信用できる奴に預かってもらう

4、翌朝俺は本来の予定通りルイズ達とここに向かう

5、俺らとサクラが合流し次第、反乱勢力『レコン・キスタ』を攻撃
6、皆無事に撤収

で、注意点としてサクラは俺と合流するまで勝手にレコン・キスタに攻撃を仕掛けるのは禁止

あくまで防衛戦だけだ

しかもできればこの防衛戦もハデなのはしないようにしてほしい

……と、ここまでおK？」

俺は確認の為に今後の予定をもう一度皆に言う

「それとこれももう一回言つとくが、このぐらいのクエストなら俺とサクラの二人いれば十分だ

こんな面倒な事やるのは、俺のご主人様に何の困難も経験してない温室育ちのメイジになってほしくないからだ

つまり俺は俺のワガママでお前らを戦場に残すようなものだ

文句や言いたい事がある奴は今この場で言ってくれ

どんな非難中傷も甘んじて受ける

……ただ一つだけ言わせてくれ

ここは戦場でこれからお前らにしてもらうのは戦闘だ
だけどな、俺は俺の全てをかけてお前を死なせはしない
だから、悪いとは思うがしばらく俺のご主人様の成長の為に我慢し
てくれ」

俺は珍しく……本当に珍しく人に頭を下げた

多分こんな姿をお袋や神竜達が見たらビックリして腰抜かすんじゃないかってぐらいだ

「頭を上げてください、ナハトさん

ナハトさんは僕達を生かしてくれるだけじゃなく、トリステインや
レコン・キスタの事を何とかしようとしてくれたじゃないですか
僕達にはそんな命の恩人を責める事はできませんよ」

最悪、殴られる事も覚悟してたが、意外な事にウェールズのその一
言に他の兵士達も賛同の声を上げる

俺は顔を上げ、ウェールズ達に軽く礼の言葉をかけ、姫さんとウェ
ールズを引き寄せた

「じゃあ、サクラ

ここは任せたぞ

お前の指示に兵の命がかかってる事を忘れるなよ？」

「わかってるよ

……そういうナハトもちゃんと約束忘れないでよね？」

「ああ、この件が終わってからになるけど、それからなら一つだけ
言う事聞いてやる

……じゃあ、姫さん達も行くぞ…… ルーラ」

そして俺達は魔法学院のジジイの部屋の前まで来た

「ここに一応学院長なんて肩書きのジジイがいる
ここでお前の事も説明するからな？」

ウェールズは無言で頷く

「ジジイ、ナハトだ
今時間空いてるよな？」

いきなり扉を開けるなんて事はしない

ちゃんと一声かけるのが礼儀ってもんだろ？

そして俺は最後の鍵を取り出し扉を開ける

「ナ、ナハトさん！？
何やってるんですか！？」

「何って、ただの解錠だよ
このぐらい平気な顔できねえと優柔不断で使えねえ王族になっちま
うぜ？」

そう言っただけ解錠すると、俺はジジイの部屋に入っていく

「なんだいるじゃねえか
なんで呼び掛けに返事しないんだよ？」

部屋に入るとジジイは定位置に座ってこっちを見ていた

「声が聞こえた直後に解錠する音が聞こえたんじゃないぞ？
少しは心の準備をさせい」

ジジイはそう言うのと、ようやく俺の後ろの二人に気付いたようだ

「知ってる顔だろ？

だったら紹介はいらんのだろ

実はルイズがまた厄介事に首突っ込んでるからその手助けをしてほしくてな」

そう言うのと姬さんとウェールズを促す

「初めまして、オールド・オスマン

知ってるかもしれないが、僕はアルビオンから来たウェールズ・テューダー

今のアルビオンはレコン・キスタという反乱勢力との内戦中なのだが、ナハト君に助けられた」

「ま、詳しい事は省くがそんな感じでウェールズをしばらくここで預かってほしい

ここにウェールズがいる事がバレたらレコン・キスタが攻めてくるけど、預かってくれるならその火の粉は俺が火種から消してやる
もちろんウェールズには変装してもらうし、絶対バレない自信がある
……どうだ？」

「ふむ……まあ、お主が保証するのであれば大丈夫なのじゃろう
じゃが、どうやって匿うのじゃ？」

変装と言っても限界があるじゃろ？」

「そこは問題ない
……こいつを使う」

そう言つて俺はサクラに渡したのとは違う変化の杖を取り出す

「んじゃまあ、とりあえずウェールズは目立たないように、おじいさんにでもなつてみるか？」

「え？」

ウェールズが何か言つ前にすでにウェールズはおじいさんになつていた

「どうだ？」

自分が自分じゃない姿でいるのは？」

「ビックリしたな……」

まさかここまでになるとは……」

ウェールズは本当にビックリしたような顔と仕草をしながら言った

「って事はだ

あつちに残つてるサクラも同じぐらいお前に似るって事だ
あつ、でも効果は時間で解けるから3時間に一回は変化の杖使うようにしてくれ

……んで、これからその姿でいる時は偽名を名乗ってもらつ
じゃあ、ウェールズだから『エル』ってのでもいいか？」

「ああ、僕はそれで構わないよ

……そういえば僕は何もしないでいいのかい？」

「いいわけないだろ

そこはジジイと相談して決めろ

じゃあ、ウェールズをしばらく預けるからな

遠慮は無用でこき使ってやってくれ」

「うむ」

俺はジジイが頷くのを見て、姫さんの方を見る

「じゃあ、次は姫さんの番だ

悪いがこの件が終わるまではウェールズに会うのを禁止にしてみよう
で、それ以降も基本的には俺と同伴でしか会ってはいけない

まあ、やる時には一声かけてくれれば少しの間ぐらい二人きりにし
てやるよ」

俺がそうふざけ気味に言うと姫さんは顔を真っ赤にして俯き、ウェ
ールズは絶句

「まあ、それもこれもこの件が終わってからだ
姫さん、送っていくから行くぞ」

そう言つて、俺は姫さんを連れてキメラの翼で姫さんが泊まる部屋
の前まで飛んだ

「ナハトさん、一つ気になったのですけどいいですか？」

すぐに帰る予定だったが、姫さんに呼び止められ、足を止める

「なんだ？」

「なんでルイズを成長させるような事をするのですか？
確かにルイズを為を思つての事なのはわかるんですけど、そのちゃんとした真意を知りたいのです」

姫さんを見ると、さっきまでのウェールズを助けられて喜んでいた笑顔ではなく、友達を心配するアンリエッタの顔になっていた

「……姫さんの望む回答じゃないかもしれないぜ？」

「ナハトさんの真意が聞けるのなら」

俺は右手で頭の後ろを掻きながら姫さんの視線を正面から見据えて言つた

「俺はルイズに使い魔にされた時に言つたんだよ

『俺が使い魔になる以上、てめえは誰よりも優れた魔法使いになれ』
つてね

だから、逆境や困難を経験させて、純粹に魔法だけでなく、精神的にもタフな魔法使いになつてもらわないといけねえ

……まあ、さつき皆に言つたのとあんま変わらねえよ

結局俺はルイズを成長させる為にわざわざ面倒な事やってんだ
じゃなかったら、俺とサクラの二人だけでハルケギニアを統一してるわ」

俺はそう笑いながら言つた

実際、元々対人最強クラスの能力を持っていた俺がガンダールヴの能力を得て、その地位を確固たるものにした

サクラは賢者を極め、しかも新呪文メドローアをも使う

おそらくこれから新呪文を発掘していくだろう

そんな俺とサクラが手を組めば実際にハルケギニア統一なんて楽勝だろう

でもそんなのはつまらない

俺は楽しい事をやりたくてこの世界に来たんだ

だから、落ちこぼれ（ルイズ）を成長させ、誰よりも優れた魔法使いにさせるなんて一見無茶苦茶な事をやるんだ

俺はそう笑みを浮かべた

「それにあのルイズがハルケギニアを代表するぐらいの魔法使いになれば誰もルイズをバカになんてしないだろう？」

俺は肩を竦めて言った

そして今度こそルイズの待つ部屋にルーラで飛ぶのだった

第27章　そして獅子は子を谷に突き落とす（後書き）

次から活躍編だ！

第28章　そして使い魔とロリコンの出会い（前書き）

先日、電車で作者の隣に座った小学生達がゼロ魔の話をしていました
作者はビックリしました

こんな低年齢層にまでゼロ魔は浸透していたのかと

まあ、そんな作者の一言日記的な何かでした

第28章　そして使い魔とロリコンの出会い

俺が部屋に帰ってきたのはもう夜も明けるまで間もないといった時刻
少しだけ仮眠を取るつもりで横になり、夜明けと共に目覚める

「…………だりい…………」

俺はこの怠さを知っている

おそらく熱でも出てるんだろう

感覚からいって、今の体温は38　前後だと思う

まあ、ここ数日の睡眠時間が5時間ちょいで、昨日は色々動き回ったから疲れが出たんだろう

別に俺はこのぐらいの熱は大した事じゃないが、問題は今日から戦闘も視野に入れた遠征があるのだ

この体調でも雑魚なら問題ないが、万が一天の門番クラスの魔物とかが出てきたら流石にマズイ

最悪、俺がガチにならなきゃいけない

この上なく面倒だ

とりあえずルイズ達には知られないようにしねえとな

俺は気持ちを切り替え、ルイズを起こしギーシュとの集合場所に向かった

「あんた昨日遅かったじゃないの
何時頃帰ってきたのよ？」

ルイズが集合場所に行く途中で聞いてきた

「ああ？何時に帰ってこようと俺の勝手だろうが
別に怪しい事してるワケでもあるまいし
お前は俺のお袋か」

俺はいつも通りに返したつもりだったが、熱のせいかいつもより頭が働かない

「なっ！？」

私はあんたの事心配して言っただけだよ
それをそんな言い方ないんじゃないの！？」

「俺を心配だと？」

はっ、笑わせてくれるじゃねえか

俺を心配する前にお前はまず自分のこれからの事考えてろ
今から行くのは観光地でも何でもなく戦場なんだぞ」

俺はそう言っただけで話を打ち切った

いや、そうしないとボロを出しそうだった

俺も熱程度で思考能力が低下するなんて落ちたもんだ

そして俺達はそれっきり無言のまま集合場所の正門前に到着した

正門前にはもうギーシュが来て俺達を待っていた

「遅かったじゃないか」

「別に遅くねえよ

っーか、馬で行くのか？」

俺はニューカッスルに直接行った事はあるが普通にはない

まあ、言ってしまったえばアリアハンからロマリアに旅の扉を使って行った事はあるが、アリアハンから船で行った事はないみたいだな

あれ？違うか？

まあ、どうでもいいな

「そうだね

ラ・ロシエールまでは馬でそこから船つてのが順当だろうっね」

「ふーん」

……船つて事は海でも渡るのか

「あつ、それと一つお願いがあるのだが、いいかい？」

「あ？」

「僕の使い魔を連れていきたいのだよ」

使い魔？

…… ああ、そういやこいつの使い魔は見た事なかったな

「いいんじゃない？

つか、だったら早く連れてこいよ」

「実はもうここにいるんだ」

「どこにもいないじゃないの」

ルイズが言う

俺も辺りを見回すが何も見えない

「ほら、いるよ」

そう言ってギーシュは地面をリズムを付けて、数回踏みつける

すると、地面から巨大なモグラが顔を出す

「ヴェルダンデ！

ああ、僕の可愛いヴェルダンデ！」

現れたモグラに頬擦りするギーシュ

「あんたの使い魔ってジャイアントモールだったの？」

「ああそうだとも

僕のヴェルダンデ

今日もいっぱいどぼはミミズを食べてきたかい？」

「ダメに決まってるでしょう！」

馬で移動するのにそんなの連れていけるわけじゃないじゃない」

「いやいや

ヴェルダンデは地面の中を進むのだが、中々速いものだよ」

「でもラ・ロシエールに着いたら船に乗るのよ？
そこから先は流石に無理なのよ？」

「ああ、それで構わないよ」

どうやらルイズとギーシュの話は済んだようだ

するとモグラがルイズに這い寄っていく

「なによ？」

ルイズは相手が人の使い魔であってもその態度を変えない

「へっ？……ちょ、ちょっと何すんのよっ！？」

だが、そんなルイズの態度は長くは続かなかった

なんとモグラがルイズを襲い始めたのだ

「なんだ、主に似て女好きの使い魔じゃないか」

俺はそう言いながらもルイズとモグラの様子を見る

少なくともモグラはルイズに危害を加えるようには見えない

普通にじやれているようだ

だったら俺が動く必要もあるまい

つか、今はそんな事で動きたくない

「ああ、きつとヴェルダンデは君のその指輪に反応してるんだよ
彼は宝石とか光り物に目がないようだね」

「ちよつと！

そんな事言ってるんなら助けなさいよ！」

ルイズが喚くが、俺はとりあえず動くつもりはない

面倒だし、熱ある体で体力を使いたくない

その時、ルイズとモグラをめがけて風が襲った

俺は無警戒だった事もあり反応が遅れた

「誰だ！？」

だが、すぐに臨戦体勢をとりルイズを庇うように前に出る

そして周り前後左右上下を見渡し、今の魔法らしきものを放った奴
を見付けた

奴は見た事もない魔物に跨がっており、空からこちらにやってきた

「ああ!？」

僕の可愛いヴェルダンデ!

……おい、貴様!

僕の可愛いヴェルダンデに何してくれる!」

そうギーシュが件の男に怒鳴り付ける

「君の使い魔だったのかい?

それはすまなかった

ただこっちとしても婚約者が襲われてるように見えては冷静にはいられなかったのだよ」

婚約者?

ああ、そっぴやルイズはいいところお嬢さんだったな

許嫁とかいても不思議じゃないか

と、そんな事をぼんやりと考えている間にもひげ男はルイズとイチヤついてる

「久しぶりだね、僕の小さなルイズ
相変わらず君は羽根のように軽いね」

「はい、お久しぶりです

あ、あの、恥ずかしいです…ワルド様」

「なあ、お取り込み中悪いんだが、あんた誰だ？」

俺はイチャついてるルイズ達の間割って入る

「ああ、これはすまない

僕は女王陛下下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ
女王陛下より命じられて君達に同行する事になった
よろしく」

姫さんめ……

俺だけじゃ不安なのかあるいはウェールズの恩人だから万が一に備えてなのか……

……まあ、どちらにしろ俺の計画を邪魔してくれなければどうでもいい

「さあ、僕のルイズ

今度は彼らを僕に紹介してくれ」

ワルドはルイズをお姫様抱っこしながら言った

「ぼ、僕はギーシュ・ド・グラモンであります！
先程の無礼の言葉、申し訳ありません！」

急にギーシュが緊張した声になる

なんだ？そんなに凄いい肩書きなのか？

「俺はナハト

一応そのルイズの使い魔やってる

お前が頭を下げるならよろしくしてやってもいい」

まあ、どんな凄い肩書きだろうと俺は態度を変えるつもりはない

体が本調子なら一戦バトって、どっちが上かを教えてやるぐらいだ

半分嘘だけど

「君がルイズの使い魔かい？」

まさか人とは思わなかったな」

……こいつ、嫌味なセリフが嫌味に聞こえないのが逆に凄いな

「僕の婚約者が世話になってるよ」

「ああ、まったくだ

じゃあ、お互い自己紹介も済んだ事だしぱと行こうぜ？」

俺は意外に過ぎてた時間を若干気にしながら言った

なんせ、そろそろ早い人は起きてる時間だ

誰かに見付かったら面倒だ

「よし、では僕はルイズと一緒にグリフォンで行くでしょう」

そう言うなりワールドはそのままルイズを抱えてグリフォン（さっき乗ってた動物らしい）に跨がった

「じゃあ、僕達と一緒に馬だね」

ギーシュキモイ

「で、でもそれじゃあナハトはどうするのです？

彼は私の使い魔です

使い魔とメイジは一心同体

離れて行動するのは……」

ルイズがどうやら使い魔と一緒にとか言ってるようだ

いいよ

俺の事はどうでもいいから許嫁同士仲良くしてくれ

そしてできるだけ俺に面倒かけさせんな

俺としてはそんな気持ちだったんだが、ルイズは未だに渋ってる様子

「君は優しいね、ルイズ

でも僕は君が彼と一緒にいると婚約者を取られたような気分になるんだよ

だから、少しだけ僕のワガママをきいておくれ」

結局ルイズはワルドの説得に折れ、ワルドと二人でグリフォンに跨がった

「じゃあ、俺らもばちばち行くか

地理には疎いんで、先頭は任せたぞ」

そう言って一行はまずラ・ロシエールに向かって出発したのだった

第28章　そして使い魔とロリコンの出会い（後書き）

と、いう事でナハトとロリコンの出会いでした

次回でロリコンはその本能をとり爆発させる（また根拠のない事を……）ので、よろしくお願いします

第29章

そして使い魔達は襲われる（前書き）

お久しぶりです

作者はこの気温にやられ気味であります

皆さんも熱中症等には注意してください

第29章　そして使い魔達は襲われる

~~~~~

SIDE アンリエッタ

ナハトさん達がアルビオンに向けて出発していくのをウェールズ様とオスマン氏と共に学院長室から見送る

「行ってしまいましたね」

「なあに、彼らの事なら心配あるまい」

確かにナハトさんがいるなら何も心配する事などないだろう

でも、それでもやはり大切なお友達を戦場に送ってしまったのは事実

「……アンリエッタ

気持ちわかるが、あまり深刻になり過ぎないでくれよ」

ウェールズ様は優しい言葉をかけてくれるけど、私にはあの時のナハトさんの言葉が耳から離れてくれない

『リスクを犯さずリターンを求めるな』

ナハトさんは世間知らずの私に厳しい口調と態度で現実というものを教えてくれた

私は一生この言葉を忘れないだろう

ナハトさんはウェールズ様とは違った意味で私の中で存在が大きくなっていた

「……………どうか、皆さん無事で帰ってきてくださいまし……………」

~~~~~

SIDE ～ナハト～

……………ウザイ

何がウザイのかって？

聞くまでもないだろう

馬の俺らの前方を飛んでいるルイズ達だ

それなりに距離があるのに、こっちまでわかるぐらいイチャイチャしてやがる

俺は別にルイズが何処の誰とイチャつこうが結婚しようがどうでもいいが、これが任務だって事をわかってるのか？

いくら俺が事前に任務を安全にできるように手回したからって、

あの浮かれっぷりはいただけない

戦場に行くつつー意識が全く感じられない

「おや？おやおや？

まさか君、主人の婚約者に嫉妬しているのかい？」

……しかも何を勘違いしたのかギーシュの勘違い発言もまたウザイ

「そんな風に見えるなら目と脳を取り替える事をオススメするぞ」

「主人との叶わぬ恋に想いを馳せる……ね
いいじゃないか、ドラマチックで」

とりあえずウザーシュの馬に近付き、ウザーシュをどついて馬から
落とす

「……どいつもこいつもバカばっかだ……」

俺はそう呟き、ルイズ達を追いつけた

~~~~~

SIDE〜ルイズ〜

「ちょっとペース速くない？」

下を見るとナハト達はへばっていた

……いや、ナハトだけはケロリとした顔のまま、バテてる馬に鞭を打っていた

馬ですらへばるのにとんでもない体力ね

「だが、ラ・ロシエールまでは止まらずに行きたいんだが……」

「そんなの無理よ

普通は馬でも二日はかかるのよ」

「なら置いていけばいい」

そんな事できるはずがない

「大切な仲間なのにできるわけないでしょう  
それに使い魔とも離れ離れになっちゃうし……」

「なんだい、やけに二人の肩を持つじゃないか  
もしかしてどちらかが君の恋人なのかい？」

ワルド様の質問に顔が赤くなる

「そ、そんなわけないじゃない」

だから否定の言葉を言っても説得力はないかもしれな

でもワルド様は私の言葉を信じてくれたみたいだ

「それは安心したよ

10年ぶりに会った婚約者に恋人がいるなんて言われたら、僕はショック死してしまうかもしれないからね」

そうワルド様は言ったが、私はワルド様の雰囲気違和感を感じていた

それは多分10年ぶりにワルド様に会って緊張してるからだろう

……でも、それと同時にナハトの事を思い出し胸がモヤモヤする……

なんだかナハトの声を聞きたくなってきた

私はそんな複雑な何とも言えない気持ちでワルド様の話を聞くのだった

~~~~~

SIDE ～ナハト～

……ヤバイな……

動いていれば引くんじゃないかと思っていた熱は引くどころか上がってきた

多分無理すれば普通にぶっ倒れる

「お、おいナハト？
大丈夫か？」

俺の様子に気付いたのかギーシュが声をかけてくる

「…………大丈夫だよ」

だから無駄なトコで体力使わせるな

「だ、だけど…………」

「だけでも何もねえよ！
それよりも自分の事心配したらどうだ？
随分とぐつたりしてんじゃないか」

「いやいや！

こんな僕から見ても今の君は体調がすこぶる悪い事ぐらいわかるよ
ルイズ達に言うかい？」

…………ちつ、純粹に俺の事を心配してるってのが質悪い

「いや、何があるうとルイズには言うな」

しょうがないから作戦変更だ

「俺が体調悪いのは認めるから、この事は誰にも言うな
言ったら殺す」

俺は殺気を放ちながら言う

「わ、わかったよ
だからそんなに怖い顔をしないでくれよ」

ギーシュも何となくではあるがわかってくれたようだ

「……悪いな
今俺も結構ギリギリなんだよ」

「……普段あれだけ傍若無人の君がそんなに素直だと気持ち悪いね」
ギーシュは冗談混じりにそんな事を言う

「……うっせ」

体調的な問題と借りがあるので強くは言えず、結局こんな言い方になっちゃった

「っ!？」

「えっ!？」

その時、俺とギーシュの馬の間に明らかに俺らに敵意を持った矢が突き刺さる

「敵襲!」

俺は未だにイチャついてるだろうルイズ達にも聞こえるように叫ぶ
……と同時に自分も馬から飛び降り矢がきた方に注意をむける

……敵はどうやら複数のようだが、あまり統率がとれてないようだ

俺は連中の攻撃を見てそう判断する

「なあ、ギーシュ

連中はおそらく追い剥ぎとかそのレベルだ
多分お前でも勝てるぞ」

俺はわりかしテキトーな事を言っつて、ギーシュをその気にさせ考える
いくら統率がとれてないからといっても、先行してるワルドの存在
がわからなかったワケじゃないだろう

それなのに攻撃してきたという事は何かしら策があるか、あるいは
何も考えてないバカのどちらかだろう

「いけ！ワルキューレ！」

そこまで考えてる内にギーシュはもうワルキューレを出し、応戦し
始めた

……まあ、ギーシュだけに任せるのは不安もあるし、俺も参戦するか

「…………あ、あれ？」

デルフを握った所で体のバランスが取れなくなり膝を着いた

「どうした相棒？」

「あ、ああ……ちよっちやバイ事になった」

俺はそう言いながらもデルフを杖代わりに立ち上がろうとする

だが、体はまったく言う事をきいてくれない

「もしかして相棒……」

「言うなデルフ

俺の体の事は俺が一番よく知ってる

……まあ、ぶっちゃけガチで休まねえと、明日にはぶっ倒れちまい
そうだけだな」

見なくてもわかる

体中から脂汗が吹き出し、顔色なんて相当ヒドイ色してんだろう

でも、俺がここで倒れたらギーシュが一人で奴らを相手しなきゃい
けない

いくらギーシュがメイジで奴らが平民の野盗の類いでも、数で押さ
れたら流石に無理だ

「……だけどな、ギーシュのフォローぐらいししないと、ヘタすりゃ
ここでクエスト失敗するかもしれねえんだよ」

とは言うものの、何か妙案があるわけじゃねえ

色々バレルの承知でベキラマかイオラでも使うか？

……却下だな

こんなトコで奴にこっちのカード見せるワケにはいかねえ

……とその時、空から思わぬ援軍が入った

「ドラゴンだ！」

野盗の誰かが叫ぶ

声に吊られ思い頭で上を見ると、何処かで見たようなドラゴンが何処かで見たような二人を乗せて滞空していた

「ダーリン！！

迎えに来たわよーっ！」

「……………」

ドラゴンの上にはいつもの制服姿のキュルケにパジャマ姿（帽子付き）のタバサがいた

……はは、どうやらクエスト失敗の心配はしなくてよさそうだ

俺はそんな安心感と共に二人と一匹の反撃をぼんやりと眺めるのだ
った

第29章

そして使い魔達は襲われる(後書き)

次こそは早目に投稿したいですね

第30章

そして再び天空へ

く道中編く（前書き）

まだ慣れてないからかスマホでの投稿が難しい

というのが遅れた理由ではダメッスかね？

「……………てば！ちょ……………ーリン……………てば！」

誰かに呼ばれている気がする

でも体も頭も言うことを聞いてくれない

「ダーリン！」

だが、そんなに悠々と寝ていられる状況じゃないのも事実である

俺は睡眠を欲する体にムチを打ち、何とか起き上がる

……………うむ、少し寝たせいかな心なし体が軽い気がする

「ダーリン、凄い熱じゃないの！」

起き上がった俺を抱き留めてそんな事をいうキュルケ

だが、助かったとはいえ何故ここにキュルケ達がいるんだ？

「なんでも何も、朝一でダーリンを探しに行ったら馬に乗って何処かに行く所だったから、追いかけてきちゃった

こいつの朝一ってどんだけ早いんだよ……………

「……………どーせこのまま帰れって言ったトコでついてくるんだろ？」

「もちろんよ

何やってるか知らないけど」

じゃあ、しょうがねえ

「ついて来たもんはしょうがねえけど、一応こっちは極秘任務なんだから邪魔はすんなよ？」

「はい

……で、話戻すけど、ダーリン熱あるんじゃないの？」

ちっ、上手く話し反らしたと思ったのに

……どーせわかる事なら協力してもらうか

「まあ、熱はある

でも俺はやる事あるからまだぶっ倒れるワケにはいかない
だから俺はお前らに協力してもらいたい」

「はいはい！ダーリンの為なら私なんでも協力しちゃう！」

「……（コク）」

二人とも協力してくれるようだ

「……サンキュー

じゃあ、早速だけど俺が体調悪いのはルイズたちには言わないでくれ」

「ヴァリエールに言わないのは別にいいんだと、ダーリンは体大丈夫なの？」

「大丈夫だ……と言いたいところだが、実際結構キてる
そこでタバサにしてもらいたい事がある

……ルイズ達にバレないようにできる範囲でいいから俺に冷たい風を送ってくれ」

我ながら無茶な注文だとは思っているが、それだけ切羽詰まってる
だからしょうがない

「……難しい……けど、できる範囲でならやってみる」

「……助かる」

と、その時になってようやく前方にいたルイズ達がやってきた

「大丈夫！？……まあ、ナハトがいるなら大丈夫だとは思うけど……
……って、なんでツエルプストー達までいるのよ！？」

「なんでも何もダーリンを手伝う為に決まってるじゃない
ねえ、ダーリン」

そう言ってキュルケは俺にしなだれかかってきた

はたから見るとただしなだれかかっているように見えるが、実際は
俺を支えるようにしてるのだから凄い

「朝出るところ見られていたらしい

……まあ、別に邪魔しないらしいし、手伝ってくれるみたいだから俺はいいんじゃないかと判断した
ルイズやおっさんは何か問題あるか？」

「……問題はないわよ……文句ならあるけど……」

「僕は邪魔しないというなら別に構わないよ」

ルイズはブツブツ言ってたが、最年長のワルドが問題ないなら大丈夫だろう

「……つか、おっさん遅いぜ
ルイズに構いたいののはわかるが、一応護衛として来てるんだから俺らの事を置いていくなよ」

「これはすまない事をしたね」

「奴らはただの物取りだと言っています」

そこで取り調べをしていたギーシュが戻ってきた

ただの物取りだと？

「そうか

ならば捨て置こう」

ワルドはそう言うが、果たしてただの物取りが貴族御一行を襲うだろうか？

俺がそう考えてる内にワルドはルイズを連れて行ってしまった

「ダーリン大丈夫？」

キルケが心配してくるが、俺は何か釈然としないものを感じ考え事をしていた為、聞き取れなかった

「……………ああ、悪い

……………何か言ったか？」

「何もこうもないわよ

急に考え込んでやって……………

ただでさえ体調悪いんだから無理しないでよ？」

「……………ああ、そうだな

なあ、普通野盗が貴族御一行を襲うなんて事あるのか？」

「ないとは言わないけど、相当条件が揃ってないとないわよ」

条件？

「例えば？」

「まず、襲う予定の貴族のクラスが低い事、そして杖が手元に無く確実に奇襲がかけられる事

最低でもこの条件下じゃないと襲うなんて馬鹿な事はしないわよ」

そんな条件は揃ってなかったハズだ

……………という事は相当のバカか何かしら裏があるな

「キュルケ、タバサ、ギーシュ、悪いんだがもう少し付き合ってくれ」

俺は三人を残し、この釈然としない何かを確かめる事にした

第30章

そして再び天空へ

ゝ道中編ゝ（後書き）

以下戯れ言

先日、唐突にタバサが夢に出てきました

そして何故かサイトと三人で三麻（三人の麻雀）をやりました

オチもありません

以上、戯れ言でした

第31章

そして再び天空へ

ゝ宿屋編ゝ（前書き）

ホントはここで船に乗りたかったのですが、まあ、意外と進まなくてまだなんですよねゝ

次で船には乗りたいですが、ワルドと決闘どうするか……

第31章

そして再び天空へ

～宿屋編～

キウルケ達と共に簀巻きにしてある自称物取りのトコに行く

ギーシュには周りを警戒してもらっている

「てめえらホントにただの物取りか？」

「そうだって言ってるでしょう！」

……もう本当に勘弁してくださいよ」

自称物取りはそう言うが、その目は明らかに何かを隠していた

「正直に言った方がいいぞ？」

俺が最後通告のように言っても、もう黙りを貫く自称物取り

……そうか、そっちがその気なら俺にも考えがある

「タバサ、確か強力な、秘薬持ってたっけ？」

ほら、貴族が気に入らない平民をいたぶる為に飲ませるやつ」

ウソだ

そんなのあるかどうかもわからないハツタリだ

だが、そんなハツタリも平民であるこいつらには効いたらしく、口を割り出した

「ほ、本当は白い仮面着けた貴族が声かけてきたんだ
本当なんだ、信じてくれ！」

「そ、そうだ！」

今日ここを通る貴族を襲ってくれって」

どうやらウソは言ってなさそうだった

まあ、この期に及んでウソつく連中なら処刑もんだな

「その言葉にウソはないな？」

最後に念を押して確認し、ウソじゃないのを確認

すると、俺達はタバサの風竜に乗ってルイズ達の後を追った

「ねえ、ダーリン

何かわかったの？」

まあ、わかったっちゃわかったが、まだ根拠もない推測だ

「まだ何とも

……それより寝るから着いたら起こしてくれ」

俺はそう言つと夢の世界に旅立った

~~~~~

SIDE 〱ウェールズ〱

「エルさん、お掃除ご苦労様です  
時間が大丈夫でしたらお茶どもどうですか？」

僕は学院の用務員として働く事となった

そして今はこの学院なのメイドさんに色々教わっている所だ

さっきは庭の箒がけを教えてもらった

最初オスマン氏はもっと違う職を考えてくれたそうだが、僕はこの  
機会だし普段はできないような事をやってみたかった

だからこの仕事をやっているのだが、中々お手本通りにいかない

「いや、もう少しやってからにしますよ」

このおじいさん言葉にもようやく慣れてきた

最初は戸惑ったが、オスマン氏との練習のお陰だな

「そうですか……では、あんまり無理しないでくださいね？」

シエスタ嬢は優しいな

彼女もナハト君の事が好きだというのだから、流石はナハト君とい  
った所だな

さて、今頃何処にいるのか……

早ければ明日明後日にはラ・ロシエールに着くだろう

無事に任務を終えて戻って来てくれ

僕はそう願わずにはいらなかった

~~~~~

SIDE 　　ナハト

……おい、こりやどついう事だ？

風竜に乗ってルイズ達に遅れてラ・ロシエールに着いてみれば、まだ船は出せないのだという

これじゃあ、急いだ意味がないじゃねえか

……　　つたく、無駄に疲れさせやがって

「どうする？」

部屋はもうとつてあるみたいだが、休むかい？」

ギーシュがフロントで聞いてきたのか、そう教えてくれる

「……ああ、悪いがそうさせてもらっわ」

だが、俺は自分の事よりもルイズの事が気になった

いくらなんでも俺達が着いても迎えにも来ないような奴だっただろうか？

いや、流石にそんな事はない

何かしらの要因で来れないのだろうか

……まあ、ヒントも何もない状況で考えてもわからないものはわからないだろう

それよりも今は早く本調子に戻る事だ

俺はギーシュの案内してもらって、部屋に向かった

~~~~~

SIDE ～ワルド～

忌々しい！

あの平民め！

ルイズがさっきからずっと僕の話を上空で聞いている

理由はきつとあの平民の使い魔が気になっているからに違いない

いくら彼がガンダールヴだからといっても、これはあまりに計画に支障をきたす

「……なあ、僕の可愛いルイズ  
明日予定を空けておいてくれないか？」

ならば、少し予定とは変わってしまったが、明日ルイズの心をもつ  
一度こちらに引き戻そう

「……えっ？」

ごめんなさい、もう一回言ってもらえますか？」

どうやらルイズはまだあの使い魔が気になってるようだ

やはりここは明日しっかり決着をつける必要があるな

僕はそう改めて誓った

### 第31章

そして再び天空へ

ゝ宿屋編ゝ（後書き）

まだまだスマホに慣れるのに時間がかかりそう……

## 第32章

そして再び天空へ

〈手合わせ編〉（前書き）

ようやくスマホにも慣れてきて、早打ちできるようになってきました！

……だったら早く更新しろよ……

## 第32章

そして再び天空へ

く手合わせ編く

翌日、部屋の扉をノックする音で目覚めた

体はまだ本調子ではなかったが、まあ、一晩ぐっすり眠ればそれなりに良くなつた

ちなみに部屋割りは当然だが、俺とギーシュ、キュルケとタバサのペアだ

そしてそのもう一人の俺の相方は未だベッドで爆睡中

仕方無しに俺ご対応する事に

……まあ、相手はなんとなくわかつてる

相手がわかったトコで彼の用件までは流石にわからんがな

「はいはい、何ざんしょ？」

俺は扉を開け、そこにいるだろうワルドに問い掛ける

「やあ、使い魔君

実は折り入って話があるのだが今いいかい？」

よくない

それはこんな早朝にしなきゃあかん話なのか？

俺のそんな拒否の空気を知ってか知らずか、奴は用件を話し始めた

「どうやら次に船が出るのは二日後になるそうなのだよ

で、ルイズに聞いたのだが、君は相当強いらしいではないか

そこで今日手合わせなどどうだろう？」

つまり出るまでに時間があるから、その間に俺の強さを把握しておきたい、と？

冗談じゃねえ

こちららまだ本調子ですらないのに、なんでわざわざそんなめんどくせえ事しなきゃいけないんだよ

……まあ、本調子だったらやってもいいけどな

「やだね

こちらら置いてきぼりくらって、追い付いてみればまだ船が出ませなんて言われてテンション下がる一方なんだ  
少しは休ませろ」

そう俺は言っただが、ワルドは全く意に介さず押してくる

「まあ、そう言わないでくれたまえ

僕はルイズの婚約者だろう？」

だから、その使い魔の实力が気になるのだよ」

気になるも何も、俺が本気になればこの世界の人間が皆ドン引きするレベルだっつーの

まあ、そんなの滅多な事がないとならないだろうけどな

「だって自分平民ツスから」

俺はこのままやってもラチごあかないと思い、『平民だから弱いですよ』路線に切り替えた

「そんな事はないだろう

ルイズに聞いたよ

あの『土くれ』を討ち取ったそうじゃないか  
君はもつと自分に自信を持っていぞ」

うつせ

俺はどちらかといえば自信の塊だ

……とりあえず色々喋ったルイズは軽くお仕置きだな

と、そんな事を心に刻みつつ……

「じゃあ、まあ、軽くなら……」

俺はそう折れた

どーせワールドはこっちが首を縦振るまでここで粘るだろう

それは流石に俺がダルい

だからしょうがなく妥協した

「おお、そうか

では、この宿の裏に広場がある  
そこに正午に待ち合わせでいいかい？」

俺はそれに無言で頷くと、部屋に戻った

……ああ、めんどくせえの受けちまった

まあ、軽く汗流してリハビリだと思えばいいか

と、俺はポジティブに考えた

つか、そつでも考えなきゃ俺に旨みがなさ過ぎるからな

………

………

………

「ギャラリーいるなんて聞いてないんだが？」

俺が約束の正午になり広場に行くと、待っていたのはワルドだけではなく、一緒ぬ来たメンツが揃っていた

「ギャラリーがいた方が盛り上がるからね」



とかワルドは言ってるが、『軽く手合わせ』なんて目ではなく、明らかにガチで勝ちに来る目だ

そんなにルイズにイイカツコしたいか？

大人なんだから少しは考えろよ

そう思ったが、まあ、今更どうにもなんない事なので諦める

「そうかよ

……じゃあ、やるか」

俺はそう言ってデルフを取り出す

「相棒……もう俺っちに飽きたのかと思っちゃまったぜ」

……そんなにご無沙汰だったか？

「つい昨日使ったと思うんだが」

「だって折角新しい相棒なのに戦う時しか使われないなんて悲しいじゃねえか」

なるほど、そういう事が

「……ねえ、もしかして私を呼び出したのって二人の手合わせを見せる為？」

なんだ、ルイズは呼ばれた理由わかってなかったのか

「そうだね

手合わせには介添え人が必要だからね」

「そんなの却下よ!」

ルイズが俺とワルドに反対する

「まあ、俺もホントならやりたくないんだが、こいつがどうしてもやりたいってきかなくてな……  
少しぐらい許してくれや」

俺はルイズをやりわりとギャラリーの方に押す

すると渋々ながらもルイズは端っこに行く

「ホントならあんたがしっかり説明しとくトコだぜ?」

俺はそう言うと同時にデルフを構えて駆け出す

ガンダールヴの力は極力使わず、昔の俺の半分ぐらいの力になるように調整して

……武器握れば勝手にガンダールヴは発動しちまうから、それ含めての調整だな

「いきなりとは中々卑怯ではないか?」

とかワルドは言うが、しっかり剣で受け止めてるし

……ん? 剣?

「おっさん杖じゃないのか？」

「杖でなくとも契約さえすれば魔法は使える

それに僕はただのメイジではなく、一応軍人なんでね」

……なるほど、めんどくせえ奴だ

俺は一度距離をとり、聖なるナイフを数本取り出してワルドに投げる

もちろんそんなのは効かないが、投げると同時にワルドに向かって  
弧を描くように接近する

そしてナイフの処理が終わった直後のワルドの横っ腹にデルフを振  
り……………

「いや、実に惜しいね」

抜けなかった

デルフがワルドの横っ腹に当たる直前に、いつの間にか詠唱終えた  
のか、ワルドの風魔法が俺を襲った

結果、ダメージはほとんどなかったが、俺は吹き飛ばされた

「発想は中々よかったが、これが君と僕の差だよ」

俺はいくら手を抜いていたといっても、ここまで言われるのは力チ  
ンときた

……まあ、結果的に軽く流れたからいいか

俺はそう納得する事にした

## 第32章

そして再び天空へ

〈手合わせ編〉（後書き）

偽次章予告

ワルド手合わせに負け、少なからずショックを受けたナハト

そこに迫りくる謎の仮面男

動かない船、もう後がない絶体絶命のピンチ

ナハトは無事にアルビオンに行く事ができるのか！？

### 第33章

そして再び天空へ

ゝ一時の休息編ゝ（前書き）

このサブタイのシリーズ長いですね……

### 第33章

そして再び天空へ

ゝ一時の休息編ゝ

「ナハト？今ちょっといい？」

ワルドとの手合わせ後、部屋で休んでいたらルイズが訪ねてきた

「……………なんだ？」

ちなみにワルドは何やってるか知らんが、他の三人は買い物だとか

ギーシュは荷物持ちだろうけど

「ちょっとさっきの手合わせで気になった事があったのよ」

ルイズは部屋に入るなりそんな事を言ってきた

「なんだよ、気になる事って  
言っておくが負けたのはわざとだぞ？」

俺はルイズに何か言われる前に先に言っておく

「そんなの見ればわかるわよ  
あの時のあんたはもっと速くて見えないぐらいだったもの  
……………じゃなくて、もしかしてあんた体のどこが悪いの？」

そしてルイズの言った言葉に戸惑う

「……………なんでそう思うんだ？」

悟られないように隠してきたハズだ

実際、ルイズの前ではそんな場面はなかったし、さっきの手合わせだつて違和感を覚えるような内容じゃなかった

もつと言え、昨日ぐっすり寝たからか今日の俺はそこそこ体調は回復していた

「なんでつていうか、なんかいつもより顔色が悪いような気がして……」

ルイズはそう言うが、俺は結構驚いていた

あのルイズが俺の事を観察していた？

「なんだ、そんなのお前の思い違いじゃねのか？」

口ではそんな事を言うが、内心ルイズの事を見直していた

普段の態度やワルドといたりで、俺の事をそんなに見てるとは思つてなかった

「思い違いじゃないと思うけど……」

……あんたが大丈夫つて言うなら、いいんだけど……」

「いいんだよ

俺が大丈夫つて言つてんだから」

だからこそ俺はこつやってルイズを突っぱねる事ができる



知らない間にルイズが少しでも成長していてくれたから

「ってか、こんなトコいるかぐらいならワルドのトコ行つてやれよ  
あいつ、ルイズにイイカツコしたいが為に手合わせしたようなもんだぜ？」

まあ、奴には他にも目的ぎあつたんだろうがな

例えば俺の強さを知る為、とかな

俺は奴の事は信用していない

奴のルイズを見る目は表面上では婚約者のそれだが、  
時折垣間見るあの目は狩人のそれだ

何を狙つてるかは流石にわからないが、ルイズを含めた何かを狙つてるのは確かだ

それに俺は過去の経験からロリコンは信用しないようにしている

つまり二重の意味で俺は奴を信用してない

「本気じゃないナハトに勝つても自慢にならないじゃない」

「そうか？」

俺はルイズに聞き返す

「そうよ

だって本気のあんたなら、ドラゴンの群れぐらい倒せちゃうでしょ？」

「まあ、こつちの世界のドラゴンがどのくらい強いかわからんが、負けるのはあり得ないんじゃない？」

俺はタバサの使い魔のドラゴンを思い浮かべて言った

「つまり本気のあんたに勝つていのはそういう事なのよ」

「そんなにドラゴンって強いモンなのか？」

確かに俺み最初にスカイドラゴンと戦った時ひ苦戦したようなしてないような……

「強いも何も、こつちではエルフの次ぐらい相手しちやいけない魔物よ」

どうやらこつちではエルフも強いらしい

俺のいた世界とは大分違うな

……コンコン……

なんて事を考えていた時、扉をノックする音が聞こえてきた

「誰だ？」

「……私」

普通それだけじゃわからんと思うが……

まあ、わかったからいいか

「空いてるから入っていいぞ」

扉が開くと、そこには予想通りタバサと、その連れみたいな形でキ  
ユルケが立っていた

「よお、どうした？」

「タバサとちよつと町に行くから誘いに来たのよ」

俺が用件を訊ねるとキユルケがそう言う

「んー、悪いがパスだ

ちよつちこれから武器の手入れすつから

ルイズと荷物持ちでギーシュ連れて行けよ」

「はあっ!？」

なんで私がツエルプストー達と行かないと行けないのよ!」

ルイズが文句を言うが、黙殺する

「そうねえ……」

ダーリンの邪魔になるくらいならヴァリエール連れて行く方がいい  
わね」

「ちよつと!私の話を聞きなさいよ!」

だが、ルイズの叫びは聞き入れてもらえず、連れて行かれたのだった  
俺は静かになるとデルフを出した

「なあ、デルフ

風のスクエアのメイジって、どんぐらい強いんだ？」

俺はさっきの手合わせを思い出して言う

もし、調整した時の俺よりも強いなら、考え方を改めなきゃいけない  
楽勝だとたかをくくっていると、いつ足元を掬われるか……

「そうさね……

少なくとも相棒がちょっとその気になれば問題ないレベルなのは確かさね」

やっぱそのぐらいしかわからないか……

「っていうか、これこそ貴族の娘っ子にでも聞けばいいじゃないか？」

デルフが少し不貞腐れたように言う

「だってそれだとデルフとの会話の機会減っちゃうだろ？」

「あ、相棒……」

「まあ、刃物は使わないとすぐ錆びちまうしな」

「どーせそんな才チだと思っ たよっ！」

そんなやりとりをしながら俺は他の武器も手入れしていった

### 第33章

そして再び天空へ

ゝ一時の休息編ゝ（後書き）

まだまだまだまだ続くよ、再び天空へ編

## 第34章

そして再び天空へ

くチーム別け編く（前書き）

そして学校が始まった……

### 第34章

そして再び天空へ

くチーム別け編く

その夜、俺は二階のあてがわれた部屋の窓から月を眺めていた

「今更だが、この世界って月二つあるんだよね」

その呟きは俺以外誰もいない部屋の中に溶けていく

「何黄昏てんのよ」

……いや、たった今二人になった

「人の部屋に入る時はノックしろって教わらなかったか、ルイズ」

「食事の時間になっても姿が見えないからご主人様が直々に呼びに来てあげたのよ」

それとノックしないのは別問題だと思うのだが、まあ、今更ルイズの理不尽にとにかく言ったトコでしょーがないか

ちなみに体調はほぼ完治した

まあ、武器手入れの後も大分寝たしな

「つーか、使い魔は同じ卓に着いて食べていいのか？」

「別に構わないわよ

ここにあんたが使い魔だって知ってるの何人いるっていつのよ」



つまり外聞を気にする必要がない、と

「……ふーん

なあ、前に俺の世界について話した事あったろ？」

「?……ええ、あったわね」

ルイズは俺の急な話題の変更に戸惑いながらも答えてくれる

多分思い出したのは俺と同じで、あの召喚された日の夜の事だろう

「そんな時さ、結構色んな事話したろ？」

「そうね」

ルイズはそんな時の事を思い出しているのか、目を瞑りながら相槌を打つ

「あんた、もしかしてホームシックなの？」

「いや、違うな

俺はあの世界が飽きたからこの世界に来たんだ  
ホームシックになるにしても早過ぎるわ

……じゃなくて、ほら、月見てみるよ」

俺は扉近くのイスに腰かけていたルイズを窓辺まで呼ぶ

「何よ、月が二人あるのなんてこの世界じゃ普通よ」

「いや、そういう事じゃなくて、もうすぐ満月だろ？」

月はほぼ、満月ではあるが、まだ完全な満月ではなかった  
もうあと数日もあればその未完全な月は完全な満月になる

「それがどうしたのよ？」

「乙なモンじゃねえか  
不完全から完全に変わる様を間近で見れるなんてよ」

「そうかしら？」

「ああ、そうだよ

俺は前の世界じゃそんな事気を使うような事はなかったからな」

だから俺はこっちではこんなゆったりとした時間を大切にしていきたい  
と思っている

「で、黄昏れてたの？」

「まあ、そんな感じだ

……じゃあ、メシにすつか」

俺はそう言って窓辺から立ち上が……………ろうとしてルイズを突飛ばし、俺も横に飛ぶ

すると、さっきまで俺達がいた場所に何本もの矢が突き刺さる

「ちよっ、何なのよこれっ！？」

最初、状況が掴めてなかったルイズだが、矢を見ると驚きながらも割と冷静になっていた

「さあな？」

ただ、歓迎の雰囲気じゃない事は確かだな」

俺はルイズと共に壁を盾にしながら様子を見る

耳を澄ませば、下の階からもバタバタと音が聞こえてくる

どうやら下でも襲撃を受けているようだ

だが、どちらにしる外に出るには下に行かないといけない

「ルイズ、とりあえず下で皆と合流するぞ」

俺はそう言いながら考える

ここに来る途中でも襲撃にあった

そして今現在も襲撃にあっている

おそらく昼間のも今のも反乱勢の息のかかった連中だろう

問題なのは何処でこの任務の事が連中に漏れたのか、だ

俺を含めたルイズやギーシュの三人は白だ

姫さんやウェールズももちろん白

キュルケ達は俺達と合流するまで何も知らなかったから当然白

……って事は消去法から言ってワルドが一番怪しいんだが、まだ証拠も何もない

それにあいっはずっと俺達と一緒にいたから、今回の襲撃なんてタイミングが難しいはずだ

……クソッ

推測しかできないのにこれ以上考えてられるか

俺はそこでこの事について考えるのを止め、今これからの事に思考をシフトする事にした

「よお、こつちも大変な事になってんな」

この宿は階段を降りるとすぐに食堂そして玄関へと続いている

俺は階段を降りてテーブルを盾に襲撃者と応戦してるキュルケ達と合流する

「ダーリン！

何なのよ、こいつら？」

知らんわ

「俺ご知りたいぐらいだ

っーか、ここ突破できそうか？」

「これだけ多いと相手かメイジじゃなくても厳しいね  
ここはチームを二つに別けるのはどうだい？」

ワルドいたんだ……

「まあ、任務はルイズがアルビオンに行ければいいからな  
どう別けるんだ？」

どーせ、婚約者だから僕とルイズはセットだとか言うつもりなんだから  
俺は口には出さないが、そうだろうと目で言っただけ

「じゃあ、僕とルイズと使い魔君の三人とその他の三人でいいね？」

「それじゃあ、バランス悪くねえか？」

いくらなんでもギーシュ達に足止めは難しいんじゃないだろうか

「じゃあ、君も残るか？」

俺はその提案に少し考える

ホントは今ルーラで飛んでもいいが、そんな事しないで済むならそ  
れに越した事はない（ルイズを成長させるという意味で）

最悪、俺だけ先にルーラでアルビオン行けばいいというものもある

それに襲撃者にも話を聞いておいた方がよさそうだ

「じゃあ、とりあえず俺はこっち残るわ  
追いつけそうなら追いつくから、どんなルートを使って船まで行く  
か教えてくれ」

こうして俺達は二つに別れた

## 第34章

そして再び天空へ

チーム別け編（後書き）

今回は連投できそうな気がする……

### 第35章

そして再び天空へ

くさらば大地編く（前書き）

遅くなって申し訳ありません

理由は予告通り投稿しようとした時、とある重大なミスをしてしまい、そのままでは物語に支障をきたしてしまったため、書き直していたらこうなってしまうました

申し訳ありませんでした



### 第35章

そして再び天空へ

くさらば大地編く

「それで、ダーリン？  
何か良い案でもあるの？」

キュルケが聞いてくる

「まあ、一応な  
けど、俺はすぐにルイズ達追いつけるから手早く片付けて後任せる  
感じになると思う」

「それでもいいけど、本当に大丈夫？  
いくらなんでも結構いるわよ？」

「モーマンタイ  
……サクラがいたらベギラゴンで終了だったんだが、まあ、この戦  
力でもなんとかなるだろう  
……よし、誰か魔法とかで大量の油用意できるか？」

「それならば、この『青銅のギーシュ』が承ろっ」

さっきまでガクブル震えていたギーシュが急に強気になる

「ギーシュにできるのか……？」

俺はわりと本気で問う

「僕は『鍊金』のスペシャリストになるのが夢だから大丈夫さ」

………夢？

なんか不安が大きくなってきた……

「………まあ、いいや

じゃあ、とりあえずやってみてくれ」

「任せたまえ」

そう言つとギーシュは胸元から薔薇を取りだし、相手に向かって投げた

「『錬金』！」

そして散り散りになっていく薔薇の花びらに錬金を唱える

すると、今まで宙を舞っていた花びらがドロツとし、やがて油に変わり連中の上や周りにいくつも落ちていった

「………へえ、やるじゃん」

多分俺は初めてギーシュを見直した

「じゃあ、後は油まみれの連中に火でも放てばオツケーだな  
タバサは火が消えないように風の調整、ギーシュとキュルケはこれを何回がやって、ここを防衛ラインにして頑張ってくれ」

「………あれ？

じゃあ、ダーリンはもう行っちゃうの？」

「ああ、そろそろ行く

俺が参謀でも十分だったろ？」

そう言つと、三人は笑つていた（若干一人は笑っているように見えただけが）

「じゃあ、ここは任せて行つてきなさい

………ちゃんと私の親友（ケンカ相手）を守りなさいよ」

キュルケはそんな事を言つた

それを聞いた俺は……

「誰に向かつて言つてやがる

俺はルイズ（ゼロ）使い魔だぜ？」

俺はそう言つてルイズ達を追いかけた

~~~~~

SIDE ーキュルケー

ダーリンが行つたんだから、ルイズの方は大丈夫ね

本当は私も一緒に行きたかったけど、私には

ここであいつらを足止めしてダーリンを楽しませてあげる仕事がある

からしょうがないわね

「じゃあ、せっかくだし派手な花火にしましょうか」

私はそう言つと、化粧道具を取りだした

「君はこんな時なのに化粧するのかい？」

「こんな時だからこそよ

せっかくの舞台なのに女優がスツピンじゃあ……しまらないで、しゅっ!!」

ギーシュに答えると同時に牽制のファイアーボールを打つ

「さあ、じゃあ、ギーシュ

今からのあんたの働き次第で人並みになれるか、半人前で終わるかが決まるから頑張りなさい」

「今の僕、半人前なのかいつ!？」

「……今更」

……タバサも言つわね

「じゃあ、ぱっぱといくわよ

ほらギーシュ、いつまでもぶざけてないで、ちゃんと油を作りなさい」

そして私達の戦いは始まった

~~~~~

SIDE 〱ワルド〱

バカな使い魔だ

いや、自分と僕との力の差を理解したというのなら賢明な判断か  
まあ、どちらにせよ思った以上に計画が楽になったからいい事か

「ルイズ、このままでは奴に追い付かれる  
抱えていくぞ」

そして今僕達を追い掛けさせてる白い仮面の男もまた仕掛け人だ

彼は僕が《遍在》の魔法で作り出した分身だ

つまり、本当に僕達を襲う事はない

だが、ルイズからすればそんな事はわからない

仮面の男が襲ってきてるようにしか思わないだろう

そしてそれを助ける婚約者である僕

これによりルイズはさらに僕に惚れる事だろう

計画の一つは楽勝だな

僕は一人ルイズには見えないようにほくそ笑みを浮かべた

.....

.....

.....

途中で遍在には消えてもらい、僕達は船着き場に到着する

「大至急船を出してくれ」

僕は船長と思われる人の所に行きそう言った

「なつ、貴族様!？」

.....いくら貴族様でもそいつはできねえさ  
なんせアルビオンまでの最低限の風石しか積んでないから、途中で  
風石足りなくなりまさあ」

だが、船長はそう言った

つまりまだ船は出せない、と

「僕は貴族だ

それにこれはお願いでなく命令だ」

実際はそんなに急がなくてもいいが、せっかく計画が上手く進んでいるのだ

このままあの使い魔が来ない内にここを離れば、もっといいだろう

「いくら貴族様の命令でもできない事はできませんよ!」

「ならば足りない風石の分は僕がやろう

僕ほ風のスクエアのメイジだ」

「……そこまで言うなら出すが、その分これは弾んでもらいますよ?」

そう言つて船長は右手でお金のジェスチャーをした

やれやれ……ちゃっかりしてる事だ

「わかった

では、それなりの報酬は約束しよう」

「よし、わかった

野郎共っ! 出航の準備をしろ!」

そして僕達は二人でアルビオンに旅立つのだった

### 第35章

そして再び天空へ

くさらば大地編く（後書き）

この話は大分原作未読の方に優しくありませんでしたが、どうだったでしょうか？



## 番外章

### そしてIFの物語（前書き）

お久しぶりです。

三輪車さんに注意された事を意識し、他の作品を見て少しは勉強してきました。

今回は書き下ろしで、本編とは関係ありませんが、注意された事を意識して書いたので、よろしければお目を通し頂ければ幸いです。

ちなみに、本編内容についての解説は後書きにて行います。

## 番外章

## そしてIFの物語

これはナハトのいる世界とは別の世界の物語。

サイトのポジションにナハトがいるように、ナハトのポジションに  
がいる世界。

もしもルイズに召喚されたのがナハトではなく、  
んなIFの物語。  
だった……そ

過程ではなく、ただそこに  
が召喚された。

そんな……IFの物語である。

SIDE 〽????〽

……やれやれ、まさかこんな事になるとは思わなかった……

本当ならばこんな所ではなく、違う場所の予定のはずだったのだが

……

まあ、ここに喚ばれたのだから仕方があるまい。

そもそも我は何者の命令を受けるつもりもない事だしな。

そうこう考えている内に喚ばれた時に舞い上がった砂煙が晴れてくる。

……まあ、誰が出てこようと我には関係ない事。

我はそう、思っていた。

「あんた誰?……って、ええっ!!!!?」

砂煙が晴れ、目の前にいたのはまだ人間で言えばまだ15才やそこらの少女だった。

本来ならば多少予定は違えども、シナリオ通りにこの場にいる者共を残らず殺すはずだった。

だが、我はこの少女を一目見た瞬間、身体にミナデインのような衝撃を受けた。

「ミ、ミス・ヴァリエール!?  
危ないから下がちなさい!!」

少女の後ろで何やら雑音が聞こえるが、そんな事は今気にする必要あるまい。

今我が気にする事は目の前の少女の事であり、それ以外はどうしてもいい情報だった

「我の名か？」

我が名はダークドレアム。

破壊と殺戮の魔神。

だが、それはどうでもいい些末な事。

お主の名を教えてもらえるか？」

我の言葉に呆然としていた少女は我に恐怖しながらも答える。

「ル、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……」

よい名である。

「長い名だな。

我は今後何と呼べばよい？」

「……ルイズよ。」

未だ怖がりながらではあるが、そう答えてくれる少女……ルイズ。

「では、ルイズよ。」

お主がどんなつもりで我を喚んだのかは知らぬが、我はお主に絶対の忠誠をここに誓おう。」

「え、ええ？……ええっ！？」

これで何度目の驚きだろうか。

だが、驚いた顔も実に可愛い。

……ああ、どうやら我は巷で噂の一目惚れをしてしまったようだ。

「ルイズよ。」

我はお主に一目惚れしてしまったようだ。

我は我の生ある限りお主に絶対の忠誠を誓おう。」

これが我とルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールとの運命の出会いだった。

## 番外章

### そしてIFの物語（後書き）

解説という言い訳みたいなお話。

今回のお話は昔の落書きみたいな物で、続くかどうかは気分次第と  
いった所。

希望が多ければやるかもしれません。

……でもあまりにチートな存在なのですぐに飽きるかもしれません  
が……

まあ、IFの話ですのでダークドリームはルイズに一目惚れしたと  
いう設定です。

ちなみにこのダークドリームは？のダークドリームです。

## 第36章

そして再び天空へ

く不法船入編く（前書き）

お久しぶりです。

これからしばらく本編の連続投稿ができそうです。

### 第36章

#### そして再び天空へ

#### く不法船入編く

俺はキュルケ達に後ろを任せ、全速力でルイズを追う。

前の世界では一人での旅だった為、ありえなかったものだ。

……意外とこういうのもいいと思った。

だから何だって話。

やがて俺は船着き場に着くが、船はいくつもありどれがアルビオン行きなのかわからない。

「おいおい、マジかよ……」

だが絶望しかけたのは一瞬で、すぐに頭を切り替える。

確かアルビオン行きの船は本来ならまだ出れないハズだ。

「おい、ピンクブロンドのちっさい少女を連れた髭帽子の貴族はどの船に乗ってる!？」

だが、そんなちまちま考えてる間に人に聞いた方が早いという結論に達し、俺は近くにいた関係者と思われる奴に聞いた。

「貴族様でしたら、あっちの船に……」

俺はその話を最後まで聞かずに指示された方に走りだす。



すると、ある一隻の船が出航する直前だった。

そしてその船上にはピンクブロンドの髪が見えた。

俺はそれを見てその船に飛び込んだ。

……貨物室の中に。

間に合うよう勢いよく飛び込んだのはいいが、適当な窓から飛び込んだ為、ルイズのいる船上にはおるか、人のいる部屋でもなく貨物室に入ってしまった。

「……せめて人のおる部屋がよかったな……」

俺は一人ごちた。

そうこうしてる内に船が動き出す感覚があった。

「そついや海も河もなかったけど、どうやって進むんだ？」

俺は今更そんな事を思い、窓の外をしてみる。

「……おいおい、マジかよ……」

そこには俺の想像以上の光景があった。

「こんななんあったらラーミアいらねえじゃねえかよ……  
船が飛ぶとか誰が考えられるっつーんだよ」

なんと船が空を飛んでいたのだ。

「……ん？」

って事はアルビオンってのは空にあるのか？」

陸路で行ける場所ならわざわざ目立つ船なんて使わないでいいし、それこそ馬を使えばいい。

「なあ、デルフさんよ。

もしかしてわざと教えなかったのかい？」

「いやいや、相棒は知ってるもんだと思ってたんだよ。

俺っちだって、わざわざ相棒を騙して敵に回したくないわけだし」

まあ、そういう事でいいだろう。

知っていようがいまいが、俺のやる事に変わりはないんだしな。

それよりも今は少しでも体を休めるか。

俺はデルフに誰か来たら起こすように言って、貨物室の中で仮眠をとる事にした。

~~~~~

SIDE ーワルドー

ククク……

少し予定とは違ったが、ガンダールヴの少年がいなくなった事に比べれば笹井な事だ。

もうあまり時間があるとはいえないが、あの少年さえいなければそれでも十分な時間だ。

「ナハト大丈夫かしら……」

僕が隣にいるのにそんな事を言うルイズに心の中で舌打ちをする。

もう君は彼に会えないというのに……

「彼ならきつと大丈夫だよ。

なんせ、僕に負けたとはいえ彼はガンダールヴなのだから」

まあ、一応死ぬ事はないだろうという意味だけだね……

……

……

……

「アルビオンが見えたぞー！」

見張りの船員の声が聞こえる。

「行こう、ルイズ」

船を飛ばす魔法を使いながら、ルイズを誘う。

残念ながら、この作業のせいで今までろくにルイズといられなかったから、そろそろルイズと一緒にいたい。

だが、運命は残酷だった。

アルビオンが見えたと思ったら雲中から船が接近してきた。

しかもその船には、この『マリー・ガラント』号よりも一回りは大きい大砲をこちらに向けていた。

「嫌だわ、反乱勢……貴族派の軍艦かしら？」

そうルイズが小さく呟いた。

「あの船には旗がありません！恐らく空賊ではないかと思われま
す！」

だが、事態はある意味ルイズの思った以上に悪いものだった。

「貴族様！魔法で何とかありませんか！？」

船長が僕に助けを乞うように言ってくるが、残念ながら船を飛ばすのに魔法を使ってしまうている為、魔法は打ち止めだった。

「いや、魔法は打ち止めだよ」

だから僕は簡潔に事実を述べた。

「……は、破産だ……」

船長はへたりこみながら、力のない声でそう言った。

~~~~~

SIDE 〱ナハト〱

俺は夢を見ていた。

夢とわかるのはこの光景があまりにも非現実的だったからだ。

「ナハト、今日はナハトの好きなカレーライスよ」

テーブルにカレーの皿を置きながら女性は笑顔で言う。

「わーい！僕カレー大好き！」

その女性の笑顔に笑顔で答える10才程の少年。

「うむ、母さんのカレーは特別美味いからな」

そしてそれをテーブルに座ったまま眺め、同じく笑顔の男性。

「……（じっくりじっくり）」

そして同じくテーブルでうつらうつらしている初老の男性。

そのいずれの顔も白いモヤのようなものがかっており人物を特定できない。

……が、それでも俺にはこれが何の光景だかわかる。

（……これは俺の家だ……）

だが、俺の記憶がない時のもう親父はバラモス討伐旅に出てこの家にはいなかった。

（……つまりこの夢は俺の願望ってワケか？）

そんな考えが一瞬頭をよぎったが、すぐにその考えを一蹴する。

（俺は別に一般家庭に憧れてるワケじゃねえし、むしろ血筋のお陰で苦労せずにレベルさえ上がれば魔法を使える。

そういう意味においては感謝しているといってもいいぐらいだ）

じゃあ、一体これは何なんだ？

俺は考えようとして、止めた。

例えこれが願望であったとして、それで今の俺に何ができるって話だ。

（俺は今のこの生活が気に入ってるし、後悔するような事は今まで

一度たりともない。

だから、こんなくだらなない夢なんて見る必要がない)

俺はそう結論し、目を覚ました。

.....

.....

.....

「相棒！起きろ相棒ってば！」

デルフの声と同時に目が覚める。

「.....っせーな、起きたつつーの」

夢見のせいだ機嫌は悪かったが、体力的にはもうほとんど完治といつてもいいぐらいに回復していた。

「どうしたんだよ、デルフ」

「どしたもこうしたもねえよ！  
どうやらお客さんのようだぜ？」

デルフはカタカタと言ってドアの方に顎をしゃくった(ような気がしたただが)

「……にやるほど……  
や、よく起こしてくれた」

気配を読むと、どうやら数人がこの部屋に向かっているようだ。

しかも断片的に聞こえる会話を聞くに、こいつらはこの船を襲ったらしい。

（あの髭ロリコンめ、こういう時に役に立たずにどうすんだよ）

と、自分の事は棚に上げて心の中で毒づく。

「じゃあ、ちよっくら回復記念にやりますか」

俺は気配を消し、ドアのすぐ横に張り付くように身を潜める。

そして侵入者が部屋に入る為にドアノブを握り回した瞬間、そのドアノブを思い切り開け放つ。

そして、侵入者の一人にデルフを突き付け……

「……ありゃ？お前は確か……」

そこにいたのは見知った顔だった。



## 第36章

そして再び天空へ

ゝ不法船入編ゝ（後書き）

最近風邪が多いらしいですから皆さんも注意してください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4570s/>

---

そして伝説は紡がれる……

2011年11月24日09時51分発行